
宝の小箱

くまミニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝の小箱

【ZPDF】

Z0420F

【作者名】

くまいい

【あらすじ】

小匣の鍵を、小道の軌を、小舟の川を…もたらし、定め、眺めるもの。そんな“誰か”と、少女達との出逢いを描いた三部作のお話です。

私は、時々思う事があります。

……『時間』は、私に何を残してくれたんだらう。

……『時間』に、私は何を残せたんだろう……
つて……

「う～ん。まだ、ちょっと寒かったかなあ」

軽く体を震わせると、聰美はセーターの袖口を頬に押し当てていた。

毛糸の肌触りが、心地好い。

昼間は雲一つ見えない小春日和であったとはい、今はまだ一月の始めなのだ。日が暮れてしまえば、高台にあるこのマンションなど、すぐに冷氣に包まれてしまつ。幸い、聰美が立つ小さなベランダに届けられるのは、僅かなそよ風だけだつたが。

遠くまで広がる無数の灯りの群れを眺めながら、肩口で切り揃えた髪の毛を無意識に指先で遊ばせる。

いや、本当はその町の煌きすら、見てはいないのだ。

聰美の心の中には、つい先程聞いたばかりのラジオの言葉が繰り返されている。幾度も、幾度も……女性の声が、胸の奥で密やかに流れ続いている……

「……『時間』^{とき}は、私に何を残してくれたんだらう」

『時間』に、私は何を残せたんだらう……

白い吐息が、闇の中へと溶け込んでいく。聰美はベランダの手摺りに頬杖をつくと、漆黒の夜空へと目を向けた。

清澄な冬の大気の彼方で、金星が文字通り黄金色に輝いている。静かに瞬く星屑を背にした、その一際目映い光点から、聰美の大き

な瞳は暫く動こうとはしなかった。

(なんて綺麗なんだか...)

ぽんやりとした考へが浮かぶが、本当はそんなことを感じているわけではない。その美しい光の奥に、遙かな『時間』が見えてくるのだ...

ふつ...と、宵の明星がぼやけてくる。

「...あつ...」

大きな麦藁帽子が見えてくる。夏の光に縁取られたその影から、男の子が振り返ってくれる...

知らず、頬が染め上げられていく。...そう、あの口の一言が心を巡るのも、全て彼のせいなのだ....

「おい、聰美！ お前、何してるんだよ」

不意に、背後から兄の声が飛び込んでくる。あの男の子の姿を見られた気がして、慌てて...そして、『夢』を途中で破られた腹立たしさと共に、聰美は口を尖らせると振り向いて言つた。

「何よ！ お兄ちゃん! や、勝手に女の子の部屋に入つて来ないでよね」

「悪かつたな。お前に貸したペンを...あつ、これだ。これを返してもらひに来たんだよ。持つていいくだ」

「どうぞ!」

机の上に置いてあつたペンを手にすると、兄はそのまま部屋を出ていこうとする。だが、ドアを抜ける直前、急に足を止めるとな顔で聰美を振り返つてきた。

「聰美。俺は受験生だから勉強しろ、なんて言わない。だけどな、風邪だけは引くなよ。ベランダに出るなら、もつと何かを着ひ」

「...うん、分かった」

そつと、音も無くドアが閉じられる。

時々、聰美には兄が意地悪なのか優しいのか分からなくなる。一人つ子の由利は「とつても優しいじゃない」と言つてくるが、聰美には素直に頷くことなど出来ない。

「あ～あ、……お兄ちゃんの、バカ！」

ベランダに続く窓を締めると、ベッドの上に寝転がつてしまつ。何だか、とても大切なものを壊された気がして、聰美はふて腐れていた。

白い壁紙の貼られた天井で、蛍光灯が柔らかな光を放つている。乳白色の化粧カバー越しに弱められた淡い光は、天井に微かな陰影の漣を描いて広がつていた。

……いつしか、兄のことなど忘れてしまう。

胸の中の困惑は深い光の淵に波を静め、再び、聰美は過去の『時聞』へと想いを寄せていた……

「どうしたの、聰美ちゃん。今日は、随分と大人しいのね」

冷えた水をコップに注ぎながら、『ブルーノ』の店長は聰美に話しがけていた。

「うん……」

昼過ぎで誰も居ない、小さな喫茶店の中で、聰美はカウンターに頬杖をついている。そんな少女へと水を差し出しながら、店長も隣に腰掛けて待ち続けた。

店長の児島のおばさんは、聰美の母の義妹になる。聰美は小さな頃からこのおばさんが大好きで、『ブルーノ』を始めてからは由利と一緒に常連客の一人になっていた。

喫茶店は短大の正門脇にあるので、客足が鈍ることは少ない。だが、今日のような夏休みには空き時間も生まれ、そこを狙つて立ち寄るのが聰美の楽しみでもあつたのだ。

「……あのね、今日、由利が告白されたの」

「あら、良かつたじやない」

「そう、良かつたの。だつて、由利もその男の子のこと、好きだつたんだもん」

全然良かつたことではないかのように話す聰美に、ふつと頬を緩める

ると、店長は尋ねてきた。

「で、どうして拗ねてるの？」

「私、拗ねてなんかない！」

可愛く口を尖らせると、一気に水を飲み干してしまった。そんな彼

女の仕草は、中学三年生よりもずっと年下の子どもを想像させる。

「拗ねてるわよ。ほらほら、白状しなさい」

こつんと額を小突かれて、ますます聰美は頬を脹らませてしまつた。

だが、勿論、聰美自身も話しておきたかったのだ。その為に、この店まで来たのだから。

「……だつて、由利、とつともはしゃいでるんだもん。私との約束だつて、後回しにするのよ？ ほんと、嫌になっちゃう」

真夏の強い日差しも薄いレースで弱められ、店の中にはあちこち暗がりが見えている。人の心に落ち着きをもたらす淡い闇を背景に、店長は静かに頷くと言つた。

「それで、恋愛をしてみたくなつた？」

「う、ん……分かんない……」

あやふやな表情で俯いてしまつ。

「でも、いいなあ、つて思つたんじやない？」

「……」

じつと、水の無くなつたコップから目を放さない。

少し間を置いた後で、店長はそんな聰美に続けていた。

「聰美ちゃんは、誰か好きな人がいるの？」

「ううん！」

大きく頭を振ると、聰美は児島のおばさんを見上げて言った。

「だつて……私なんて生意気だし、勉強だつて出来ないんだもん。誰も、好きになんてなつてくれないよお」

強い口調で語る聰美に、だが店長は優しく微笑むとそつと言葉を

遮つた。

「違うの。聰美ちゃんには、誰が好きな人はいないの？ って訊いたのよ」

「…いない」

がくつと首を落としてしまった聰美に、店長はくすくすと笑い出していた。

「もう！ 笑わないでよ」

「『めんなさい』。

でも、聰美ちゃん。もつと、自分を認めてあげなくちゃ。聰美ちゃんは、とっても可愛いわよ。絶対、誰かに《本当》に『好き』になつてもらえるわ」

大好きなおばさんの言葉に、少し頬を赤らめてしまつ。だが、すぐに聰美は首を左右に振つていた。

「ダメよ。竹田君や笹木君なんて、私のこと、ただの友達だと思ってるもん。私だって、そうとしか思えないのよ」

「焦つて人を好きになる必要なんてないわ。『好き』な気持ちを、少しづつ、胸の中で育てていけばいいの… そうしたらね、きっと分かるわ。

私は、この人を『好き』になるんだ、って……」

「それって…おばさんもそうだったの？」

微かに見えた光に、聰美は思わず勢いよく尋ねてしまつた。身を乗り出す姪の様子に柔らかな笑い声を上げると、店長は口を開いて

…

カラソッ… ロロソッ…

突然、ゆつたりとした鐘の音が響き渡る。ドアが開く小さな軋みにびくつと体を震わせると、聰美はカウンターの席に座り直していた。

「…構いませんか？」

男の子の声がする。まだ子どもらしさが残るのに、どこか大人びている、そんな声だ。

「ええ、いらっしゃい」

慌てて立ち上がる店長を追つて、聰美はこの迷惑な客を睨もうとした。

だが、カウンター越しの暗がりばかり見詰めていたので、逆光の中では黒い影しか見えてこない。仕方がないので、それでも、取り敢えず聰美は不満の表情を頬に映しておいた。

「何にしますか？」

「すぐに作れるものはありますか？　ずっと外を歩いていて、まだ何も食べてないんです」

遠慮がちな言葉までが癪に障り、聰美は再び視線をカウンターに戻してしまった。

「サンドイッチくらいなら、すぐに出来ますけど」

「じゃあ、それでお願いします」

急ぎ足で戻つてくると、店長はパンを切り始めている。

（もう！　折角の話も台無じじゃない）

喫茶店である以上、当然の仕事なのだが、その台無しにした張本人をもう一度振り返つてみると、彼は一気にコップの中身を飲み干しているところだった。見ていると、脇に抱えていた黒いケースと幾枚かの紙を隣の席に置き、頭からは麦藁帽子を外している。

（何よ。今時、麦藁帽子なんて）

漸くはつきりと見えてきた様子からすると、自分よりも少しだけ年上だろうか。高校生くらいだろう。これほどまで腹を立てていなければ、少しくらいは格好良いと思つたかも知れない。

だが、今は、聰美はこの男の子の全てが気に入らなかつた。

「ごめんなさい、聰美ちゃん。水を持っていてあげてくれない？」

空になつたコップが目に入ったのだろう。どんなに嫌な事でも、おばさんの頼みなら断れない。

「はーい」

唇を尖らせながらも、綺麗な陶器の水差しを手にして聰美は立ち上がつていた。わざと少しだけ視線を逸らせながら、客のテーブル

へと近付いていく。

「ありがとう」

水差しを渡すと、にこりと柔らかな笑みが返つてくる。思わずその優しい笑顔に吸い込まれ、もう少しで聰美は怒りを忘れるところだった。

余程、喉が渴いていたのだろう。氷を残して、瞬く間に二杯の水を飲んでしまう。

そんな男の子の様子を、何故か立ち去れずに聰美は黙つて見詰め続けていた。

漸く人心地がついた男の子は、まだ傍らに立つている聰美に気付くと、恥ずかしそうな顔をして言つてきた。

「ずっと、朝から歩き続けてたから…済みません」

「え？ あっ、いえ、別に…」

男の子は、何杯も口にした水の事を気にしているのだ。だが、自分はそんな些末な事で不機嫌になつていいわけではない。

慌てた聰美が話し出す前に、だが男の子は先に口を開いていた。

「それに、何かの話の途中だつたんでしょう？」

「そう、そうなのだ。

だが、こうもはつきりと言われてしまつと、何と応えればいいのか分からぬ。

「何だか、落ち着かない。

「いいんですよ。たいした事じゃありませんから」

突然の店長の声に、聰美はもう少しで叫びそうになつてしまつた。すっかり、おばさんの存在を忘れていたのだ。
（…たいした事だわ！）

サンディッシュの並んだ皿を出す店長を見ながら、そつは思つたもの…

正直に、聰美はほつとしていた。

男の子は水だけでなく、食べ物にも飢えていたようだ。一人が

遠慮無く見守る中で、ぱつぱつ、と見る間にパンが消えていく。

「この図面の為に、ずっと歩いていたの？」

店長もこの客に興味があるらしく、隣の席に腰掛けている。何しろ、ここは短大生以外の客は聰美や由利くらいなのだ。一見など、珍しい。

店長の横、男の子から離れた所に腰掛けながら、聰美も指差された椅子の上を覗き込もうとした。だが、間に席が一つもあれば見えるはずもない。

客である男の子は急いでサンドイッチを飲み込むと、聰美にも見えるように紙をテーブルの上に置いてくれた。

見れば、その紙には『ブルー』周辺の地図が描かれている。他にも、図面は何枚があるらしい。どれも縮尺は大きく、敷地の中には名前や家の大きな形までが書き込まれていた。ついさっきまで書いていたらしい一番上の地図には、正誤のチェックが入っている。「夏休みの間、こんな風に図面の変更点を書き込むアルバイトをしてるんです。本来なら、中学生は雇つてももらえないんですが、僕の叔父が人手が足りないからどうしても、つて…」

「あなた、中学生なの？」

驚いて叫んでしまった聰美に、彼は不思議そうな面持ちで頷く。

「ええ、中学三年生です」

「……！」

落ち着いて答えるその雰囲気は、どう見ても自分よりも年上なのだ。

「受験勉強の方は、大丈夫なの？」

決まり文句であるかのように尋ねる店長に、彼は静かな笑みを浮かべて答えていた。

「何とかなると思います。やつぱり、高校くらいは行かないと、子ども達に何も教える事なんて出来ませんから」

「子ども達？」

聰美は、店長と互いにきょとんとした表情で顔を見合っていた。

そんな一人の前で水を僅かに口に含むと、彼は静かな声で続ける。

「僕は小さな子どもが大好きなんです。可愛いところも、醜いところも…全部含めて、大好きなんです。」

それに、絵本や童話、ファンタジーといった児童文学も好きだから、将来はそんな方向の仕事に就いてみたいな、って…」

少し遠くを見ながら、だがしつかりとした口調で彼は言葉を紡いでいる。その瞳の中には真摯な光が宿り、聰美は思わず眩しそうに目を細めてしまった。

なんて綺麗な瞳だらう…

(きつと…)

そう、彼には、その『仕事』が見えているのだ。

「ずっと思つてたんですよ。小さな頃から。沢山ある中で、どの道を進む事になるのかは分からぬけど…今は、司書になつて図書館で働きたいと思つてます。図書館で子ども達に素敵な本を読んであげたいんですよ」

「そんなことまで、考へてるの?」

自信に満ちた彼の言葉に、思わず聰美は尋ねていた。

「変ですか?」

逆に、彼は真面目な顔で問い合わせてくる。聰美は答えに窮し、身を引いてしまった。

(だつて…)

自分は、将来についてそこまで考へたことなど無いのだ。何かをしたいから高校に進学するのではなく、ただ皆がいくから進むのだ。その先を尋ねられても、ただ会社で働くのかな、っとその程度でしかない。だいたい、それにしても、根拠があるわけではなかつた。ましてや、自分自身の願いや夢があるはずもない。

…同じ中学三年生なのに、彼が随分と大きく、高い存在に思えてしまう。

店長は、客の彼とアルバイトについて話を続けている。だが、聰

美はその間もずっと心の中を彷徨い歩き、殆ど何も聞いてはいなかつた。

「じゃあ、アルバイト、頑張つてね。またこの辺りに来る」ということがあつたら、寄つてちょうどだい

「はい」

ふと気付けば、店長が彼を送り出している。

（え？）

慌てて立ち上がった聰美に、彼は一度、優しく笑い掛けてくれた。思わず動きを止めてしまった聰美の前から、そのまま、柔らかな微笑みは真夏の光の中へと歩き去つてしまつ……

（あ～あ…行つちゃつた…）

もう少し、彼と話をしたかった。もつと、もつと沢山、知りたかったのだ。

きっと、彼は自分の思いもしない事まで考えているのだろう。だが……逆に、それは同じ年齢に於ける一人の『差』を拡げることにもなつてしまつ……

「さてと…」

ぼんやり立ち直りしている聰美をちらりと一瞥しながら、わざと大きく溜め息を吐く。そんな店長の声に我に返ると、聰美は急いでカウンターの上の鞄を手にしていた。

「おばさん、ごめんなさい！ また、来るわ」

「聰美ちゃん？」

驚く声にも振り返らず、バタンッ！ と大きな音を立てて、聰美は飛び出してしまつた。

「…自信を無くさなきやいいけど……」

悩み、深く考へることは大切だが、それは自身を見失う為のものではない。例え、一時期『個』を見失つたとしても、それは『本当』の『自分』を見つける為の、足掛かりであるべきなのだ。

目映い光に照らされた、聰美の小さな背中を見送りながら、店長は少し不安げに額を曇らせていた。

一週間が、瞬く間に通り過ぎる。

朝からずつと机に繫り付いていた聰美は、軽く伸びをすると立ち上がつていた。

思えば、あの夏の日に出逢った男の子を想い返す度に、不安定な心のまま幾日も過ごしてしまう。今田だつて、そうだ。こんな気持ちで勉強を続けても、本当に身に付いているのかどうか…だが、やらざるにいることも、また不安なのだ。

何故、不安定になるのか…それは、聰美自身でもよく分かつていた。どれだけ時間をかけて考えても、聰美には、自分の進路や夢など思い付かなかつたのだ。

聰美にしても、幼稚園や小学校に通っていた頃には、将来の夢や職業を何かに書いた記憶がある。だがそれは、どれも安易な、憧れとさえも言えないものばかりだ。

「……」

そつと足を忍ばせると、部屋のドアを静かに開ける。そのまま台所に向かい、聰美はインスタントのコーヒーを用意し始めた。

…あの日…あの『ブルー』で彼と逢つた日、聰美は初めて『自分』がとても小さな存在に思えてしまったのだ。

由利の恋愛話など、自分が本気になれば解決出来そうな問題だ…そう思つていた。だから、真剣ではあつたものの、深刻ではなかつた。聰美にとつて、その問題は『まだ追い付けるもの』だったのだ…

「熱いっ！」

ぼんやりとマグカップに触れ、思わず聰美は小さく叫んでしまつた。指の先を耳たぶで冷ましながら、改めて慎重にコーヒーを持ち上げる。

それ以上は物音をたてずに、聰美は再び部屋に戻つていた。

乱雑なままの机の前に座ると…小さく一つ、溜め息が零れ出す。

……彼は……そう、自分と同じ年のはずだ。だが、聰美にとつて、
彼は……最早『追い付けないもの』だつた……

追い付いてみたい、とは思う。だが、どうやつて？

何だか、目の前の参考書の山が、無意味なものに見えてくる。勉強そのものの大切さは、聰美にもよく解つてゐるはずなのに……

「あ～あ、……私、今、全然らしくない……」

元来、物事を難しく考えるのが苦手な性質なのだ。半年近くも悩み続けていること自体、由利からは奇跡だと言われてゐる。

今更ノートを広げる氣にもなれず、頬杖をつくと聰美はマグカップから立ち昇る湯気をじつと見詰めていた。

「……私、幼いのかな……」

そう呟いた声も仕草も、確かに周りからは愛らしく見えるものだ。そんな周囲に甘えてきたことも、否めないだろう。

だが、『幼さ』とはそれだけのものではない。

「もう……！ すっひく憂鬱！」

珍しく苛立つた口調で言葉が飛び出した瞬間、不意にラジオからCMが流れてきた。

思わず、びくつ！ と体を縮めてしまつたが、自分でタイマーをセットしたことを思い出して苦笑してしまう。ここ数年、気に入っている番組なので毎週時間を合わせてゐるのだ。勿論、受験勉強中も息抜きと称して聞くようにしてゐる。

その番組は、特に珍しい曲や情報が流れるわけではない。ただ、毎週一つのテーマを、それも真剣な悩みや問題を決めては、リスナーやローポが真面目に応えようとする……そんな番組作りが気に入っているのだ。

「ちょっとだけ、やあすも…」

ノートや参考書を閉じると、机の脇に積み上げてしまつ。ちょっとだけ……にならることは、聰美自身もよく分かっている。いつもこの番組を聞いた後は、色々と考えさせられるのだ。勉強など、手につくはずがない。

ラジオを目の前に持つてみると、マグカップのコーヒーだけを相棒に、聰美は聞き慣れた女性ロードの声に耳を傾け始めた。

本番中、ぽつりと呟いた言葉に、こんなにも反応があるなんて、改めてこの番組を沢山の人が聞いているんだな、って感動しました。

先週、私は……

……『時間』は、私に何を残してくれたんだろう。

……『時間』に、私は何を残せたんだろう……

つて言つたんです。その何気ない言葉に返事を送つてくれた人の中から、今日は『櫻通りの風遣い』君のハガキを読んでみたいと思いません。

「あつ……」

心做しか、ラジオに耳を近付けてしまつ……

『櫻通りの風遣い』……彼は、ただのリスナーのはずだ。だが、いつも真剣に、幾つもの悩みに応えている。そんな彼の姿勢や心配り、考え方があ氣に入りで、聰美はいつしかファンと言つてもいいくらいに『彼』のことを気にしていた。

「ダメだよ、聰美。どんどん、ネクラになっちゃうよ」

由利は心配してそう言つてくれるのだが、これは聰美にしてみれば少しだが外れていた。そもそも、聰美が聴いているラジオ番組は、今流れているこれ一つだけだし、この番組の内容は決して変なものではないと思っている。本格的に受験勉強を始める前までは、時にはハガキも出していたが、何もおかしな事は書いていない。それで、何度も放送で読んでもらっているのだ。

……ただ……そう、自分でも少し変かな、って思つてるのは……

『彼』のハガキに緊張してしまつことだらう……

……『時間』は、私に何を残してくれたんだろう。

先週、真結さんはそう言わっていましたが、ここに、僕なりに考えた事を書いてみたいと思います。

そもそも、『時間』の一方的な流れは、本質的には、僕達からあらゆるものを持ち去ることしかありません。

ですが、矛盾するようですが、だからこそ残してくれるものもあるのです。

それが「思い出」と言つ名の『過去』です。

「思い出」は、物事の善し悪しに拘らず、その人の心に残った出来事を、『時間』が美しく洗い清めてくれたものです。僕達はその『過去』を足場にして、更なる『時間』の行手を観ることが出来ます。例え、その「思い出」が嫌悪すべきものであつても、それが本人にとって大切な物だからこそ、過去は残り続けているのです。

「そうなのかなあ……」

自分にとつて、それほど夏の日の出来事は大切なのだろうか…『時間』の流れが、わざわざ残してくれる程のものなのだろうか…聰美の目に、一瞬、にっこりと柔らかく笑う『彼』の姿が見えてくる。

何だか急に慌ててしまい、聰美は意味も無くマグカップに唇を付けていた。

次に、『時間』に僕達は何かを残せるのでしょうか…

恐らく、何枚も送られてきただろうハガキの中には、「そんな風に考えること自体、『時間』に囚われている証拠なんだ」と言つた内容のものも多かったと思います。

それは、ある意味では真実です。

『時間』に縛られた思いは、《真実》なものへと近付く妨げになります。ですが、人々の多くはその限りある『時間』の中で、流れながら惰性と共に生きていくことしか出来ません。そんな有限の『時間』の中へと、何かを残したい……その思いを弱さと決め付けることなど、決して誰にも出来ないです。

「そうよ！」

思わず声に出しながら、聰美は一人大きく頷いていた。

今、こうして座っている机の引き出しには、小学生最後の日に皆で書いたサイン帳が大事に仕舞つてある。この小さくても温かな冊子こそ、聰美達が『時間』の中へと残そうとしたものだ。『歴史』のように長大で複雑なものではないが、確かに聰美自身の『時間』の中へと残されたものなのだ……

『時間』に何かを残せるのか……この問いに対しても、それが形見や記念品、或いは遺志のようなものを指すのであれば、それらは間違いないく人によつて残せるものだと言えます。

ですが、きっと真結さんは、そんなことを言いたかったのではないと思います。

普段、こうして何気なく生きている……その一つ一つの行動、それ自身によつて、『何か』を残せるのだろうか……
僕なら「残せる」と応えます。

何でもない通りすがりの出会い……ぽつりと漏れた言の葉……そんな普通の生活の一場面が、自分にとつても相手にとつても、とても大切なものとして、お互いの『時間』の中へと残されるのです。その行為の多くは、無意識によるものかも知れません。ですが、そうと気付いていなくても、自分が残した、そして残してもらつた『何か』で、僕達は背中を押され歩き続けているのです。

長くなりましたが、最後に纏めるとすればこいつでどうが。

……『時間』は、私に何を残してくれたんだろう。

『時間』は、私に「思い出」を残してくれます。

……『時間』に、私は何を残せたんだろう…

『時間』に、私は「想い」を残せるのです…

「ふうん…」

(何だか、宗教みたいね)

そんな事を考えてしまったが、これは自分の中での「逃げ」なのかも知れない。

(…だつたら、あの時も…)

…自分は、『何か』を残してもらったのだろうか…

自分も『彼』に『何か』を残せたのだつたら嬉しいな、つと少しだけ思つてしまつ。そんな自分に気付いて、聰美は何故か再び慌ててしまつた。

夏休みの想い出の中で、もう一つ、絶対に忘れられないものがある。残してもらつたと聰美が思つてゐる…だが、実際には聰美自身が自分の『時間』の中に残した『何か』へと、意識が緩やかに流れ込もうとした時…

不意に、女性Dの声が耳に飛び込んできた。

少し短くしましたが、この『櫻通りの風遣い』君のハガキが、多くの内容を代表してくれてゐると思います。

『櫻通りの風遣い』君は、最後にこう付け加えています。

近頃、『風の小道』さんのハガキが紹介されませんが、局の方にも届いていないのでしょうか。

「え?」

「ぱつ! とラジオを両手で掴んでしまひ。一言も聞き漏らすことの無いよつて、聰美は耳を押し付けと息を潜め、集中した。

彼女の素直な視点が好きだつたのですが、もしもリスナーでなくなつたのなら残念です。

そうですね。私も、この頃『風の小道』さんのハガキを見ていました。彼女の小鳥や空の話は好きだつたんですね。

『風の小道』さんも、『櫻通りの風遣い』君と同じ中学二年生ですから、きっと受験勉強で忙しいのでしょう。私は、そうだと信じています。

…ラジオを持つ指先が、目に見えるほどに大きく震えている。どうしても、聰美には体の震えを止めることが出来なかつた。自分でも、顔を赤くしているのが分かる……

(どうしよう…私、こんなにドキドキしてる……)

どんな些細な悩みでも真摯になつて応えてくれる、そんな姿勢や優しさが大好きな『彼』が、聰美のペンネームを覚えていてくれたのだ。しかも、そのハガキの内容まで褒めてもうれたなんて… あれらのハガキこそ、聰美が何気無くペンを取つて書いて送つたものだ。それを、こんなにも、いつまでも覚えていてもらえたなんて…

まさか、自分が『彼』の『時間』の中に、『何か』を残しているとは思いもしなかつた。

……だが……そう。

同時に、彼が受験生だったことは、聰美にはとても衝撃だった。自分には、絶対に『彼』のよつた応えは書けない。勿論、書こうとしたことも無いのだが、あんな内容を考え付くことすら自分には出来ないだろう。

ペンネームを折角覚えてもらつても、これでは『彼』との隙間はどんどん拡がつてしまつだけではないか……

コトツ……

ラジオを机の上に置くと、聰美は椅子に深く座り直していた。……がつくりと、肩を落とす。

もう、ラジオからの声も聞こえない。喜びが深い喪失感に変わろうとした瞬間、ふと、閉じられた瞼の裏に光が揺らめいた。

あの、夏の日に出逢つた男の子が笑い掛けてくれる……

……柔らかな笑顔に導かれるまま、聰美の心は眩しい夏の光へと赴いていた。

て児童書が並ぶ部屋へと向かう。十日田にもなると、二人は堂々と胸を張つてこの部屋に入ることも出来るようになつていた。可愛らしい幼稚園児が絵本を広げる中へ入る」ことが、始めの間はとても恥ずかしかつたのだ。何も、恥ずかしがる理由など無いのに…

あの男の子は、こんな小さな子ども達に囲まれて、その小さな子ども達が読むのと同じ本を読みながら、ずっと座つていられるのだろうか…

……結局、その日も男の子の姿を見かけることはなかつた。

考えてみれば、今もこの暑い日差しの中で、彼は図面を片手に歩き回つているのかも知れない。例え、どれだけ本と子どもが好きであつても、頼まれた仕事を途中で投げ出したりはしないだろう。

「でも、聰美。どうして、そんなに会いたいの？　まさか、好きになつたんぢやないでしょ？」

横に並んで自転車を押しながら、遠慮がちに由利が尋ねてくる。

「そんなんぢやないわよ！」

少しばかり頬を染めながら、大急ぎで聰美は否定していた。そして、そのまま暫く黙つた後で、ゆっくりと付け加える。

「どうしてか…なんて、分かんない…

でも、知りたいぢやない？　どうして、そんな先のことまでも自信を持つて言えるのか…どうなるか、未来なんて分かるはずないのに…

「のままぢや、私、自分が間違つてる気がして悔しいのよ」

そう、未来なんて分かるはずがない……だが、分からぬ未来だからこそ、自分自身で創ることも出来るのではないか…

一瞬、胸を過ぎた考えに、自分自身で驚いてしまう。

真夏の陽光に灼かれながら、もう少し聰美が考えてみようとした時、由利の言葉が耳に飛び込んできた。

「でもね、聰美。叶うかどうか分からぬ夢を、そんなに叶つたり言つことが凄いものなの？　だって、そんなの潰れても当然じやない。夢と仕事は別だと思うよ。だから、大学出るまでに仕事をみ

んな探すんぢやない」

わらうと浮かんでいた思いも忘れ、聰美は賛成するよひに小さく頷ひつとした。

…だが、それが出来そうにない。

大学を出るまでに仕事を見付ける…それは、後、何年間か逃げ続けることではないのか…

ふと目を向けた先で、黒いくらいの青空から照り付ける日差しを受け、アスファルトが微かに揺らめいている。緩やかな坂を上りながら、セミ達の賑やかな音楽に身を包まれた時…

（あつ…）

不意に、一陣の風が背後から吹き抜けていく。

思わず、聰美は顔を高く上げていた。柔らかな櫻並木の緑葉の向こう、純白の雲が美しく輝き、広がっている。白雲を照らすその鋭い光は、頭上の纖細な葉群を縫つて、大地に漣を描き出していた。

「きつとね……」

自分を囲む素敵な存在、その一つ一つを田で丹念に追いながら、聰美はそつと呟いていた。

「あの子は、そんなことも知つてると思つ。でも、それでもやうとしてるのよ。

…きつとね、その強さを知りたいんだと思つ

「ふ～ん…でも、その強さつて、しんどいもんだと思つよ」

「…………うん」

だが、それでもいい。知つてみたい。

この夏の一瞬が煌いているように、あの男の子の田も輝いていたのだ。あの瞳を、もう一度見てみたい。

そして…柔らかく笑いかけてもらいたい…

それだけで、聰美には『強さ』が分かる気がしていた。

櫻が、無限の空に向かつて葉擦れの歌を奏でている。その豊かな音色の下を、少し黙り込みながら、一人は共に並んで潜り抜けていった。

由利と別れ、マンションに帰り着くとすぐに、聰美は服を着替え始めていた。

（私、バカみたい……）

少し、そんな自分の行為に呆れてしまう。

だが、聰美は手を止めようとはしなかった。本当は、随分と真剣なのだ。

十日前、あの男の子と逢つた時の服装を身に着けると、聰美は誰もいない玄関から外に飛び出していた。

今から、あの『ブルー』に行くつもりだった。

万に一つの確率でもいい。いや……逢えないだろ？……分かっている……

だが、聰美はこうせずにいられなかつたのだ。

そのまま、再び強烈な口差しの下に駆け出すと、聰美は隣接するマンションの角へと足早に歩き始めた。自転車は乗りたくない。あの日も、自分は歩いておばさんに会いに行つたのだから……

「え~ いつ~！」

不意に、先の方で幼い女の子の声がする。聞き覚えのある、近所の子どもの声だ。

別に、気にも留めずに棟の向こう側へと回りつつとした瞬間、大人びた男の子の声が聰美の耳に飛び込んできた。

「あつ！ う~ん、取られたか」

思わず、凍り付いたように足が止まる。

……間違えるはずもない。ずっと……そう、ずっと、探し続けていた声なのだ。

動けない……聰美には、ただ、大きくなる鼓動を抑えるように、胸元に組んだ両手を押し付けることしか出来なかつた。

「えへ、もう、あたしのもんだよお」

「う~ん……」

動きたい……覗いてみたい……そう、自分は『彼』に逢いたかつた

のだ……

……だが、……それでも、見つかりたくない……

(何してるのよ、聰美……)

きゅっと手を握り締める。

……そり、もう一度と、こんなチャンスは無いかも知れないのだ。そつと、そつと、足音を立てずに、建物の影から覗き込む。一瞬、こっちを向いていたらどうしようかとも思つたが、幸か不幸か、見覚えのある麦藁帽子は聰美に背を向けて腰を下ろしていた。

階段前の植え込みに座り、休憩していたらしい。傍には、あの黒いケースと缶ジュースが置かれている。その彼の周りに一人、小学二年生くらいの女の子が、一人は図面の一枚を振り回して飛び跳ね、もう一人はすぐ横で面白そうに彼を見詰めていた。

彼自身は、大袈裟に腕を組んで悩んでいるらしい。

だが、ふと顔を上げると、彼は横に立っていた女の子に困り切った口調で話しかけていた。

「あんなこと言つてるけど、どうしようか」

その言葉に、幼い女の子の方も困ったように笑つてゐる。それもそうだろう。自分だつて、図面を振り回す女の子と同じで、彼をからかいに来ているのだ。

怒りもせずに友達に相談しようとしている彼を見て、少し離れたいた女の子の方も立ち尽くす。その瞬間、彼は立ち上がり、図面を持った女の子へと駆け寄つていた。

「わっ？」

慌てて逃げようとした時には既に遅く、女の子はしつかりと両手で捕まえられてしまつた。

「ほり、やつぱりこれはお兄ちゃんのだな」「するう～いつ！」

腰に手を当てて脹れている幼い子どもを見て、彼は心の底から楽しそうに笑つてゐる。

「ふんつ！ つだ」

「あはは。まだまだ、修行が足りないな」

悪戯っぽく片手を瞑ると、『彼』は取り戻した凶面を黒いケースの中に仕舞い込んでしまった。

「さてと、仕事、仕事」

そう言つと、まだ可愛く口を尖らせている一人の小さな女の子に、『彼』はにっこりと優しく笑いかけた。

だがその時、ふと思いついたように『彼』はその一人に尋ねていた。

「そうだ。この向こうのお家つて、誰も住んでないのかな」

「うん。誰もいないよ」

割と、あっさり答えてくれる。そんな一人の頭を軽く叩くと、『彼』は柔らかな口調で言つた。

「そうか、ありがとう。じゃあね」

「うん。ばいばあい！」

大声で叫ぶと、幼い子ども達は手を繋いで向こうの公園へと走り出していく。

『彼』は、一人でそんな女の子達を見送ると、残った缶ジュースを飲み干してしまった。

ずっと覗いていた聰美は、今すぐ出て行くべきかどうか、少し躊躇つっていた。

何だか、前に逢つた時とは随分と印象が違つて見える。だが……やっぱり、以前と同じ『彼』なのだ。

僅かの間、身を引くと壁に凭れ、視線を落としてしまう。

(…………えいっ！)

怖がつてしまふ心を必死になつて抑え込むと、建物の影から身を押し出し、瞳を上げる……

ところが、最早そこには『彼』の姿など何処にも見えなくなつていた。

「ええ？ そんなあ……」

慌てて『彼』がさつきまで座っていた植え込みへと走り寄り、周りを見渡してみる。だが、何処にも…停まっている車の陰にすら、人っ子一人見当たらないのだ。

あまりのショックに、聰美はぺたんつ、と植え込みの傍に座り込んでしまった。

（ついたきまで……ここに、こうして…座つてたのに……）

（どうして、自分はすぐに飛び出さなかつたのだろう……）

「もうつ！」

両の拳を握り締めると、力一杯、膝に叩き付ける。

（……やっぱり…もう、逢えないのかな…）

思えば、『彼』の名前すら知らないのだ。全ては《偶然》に頼るしかない。

「ついてないな…」

こうして座り込んでしまうと、どんどんと弱気になつてくる。どれだけ自分の周りに目映い光が満ち溢れ、どれだけセミ達が声を限りに叫んでいても、今の聰美の心は夏から程遠い気分で一杯だった。

「えいっ！ キックだあ」

突然、田の前の階段から、小さな子どもの声が聞こえてくる。続いて、どつと湧き上がる幼い歓声に驚いて、聰美は立ち上るとマシンションの中を覗き込もうとした。

（……！）

不意に、暗がりから、誰かが飛び出してくる。

慌てて身を引いた聰美のすぐ前で…まるで何事も無かつたかのように『彼』が笑いながら立ち止まつていた。

「え？」

思いもしなかつた状況に、体が硬直してしまつ。息をすることも出来なくなりそうだ…

「ん？」

そんな聰美に気が付いて、『彼』はにっこりと笑い掛けてくれた。

「やあ、下村さん」

「え？ ええ？ ど、どうして名前を知ってるのよー。」

思わず怒鳴つてしまつた聰美に、『彼』は少し困つた顔で頭に手を当てていた。

「まあ、それは…いや、やつぱり、恥ずかしいから言えないな」「何よ、それ！ ねえ…」

そう言い掛けた時、不意に後ろからクラクションが聞こえてくる。慌ててその車に向かつて手を振ると、『彼』は急いで聰美に言った。「ごめん、怒らせたみたいだね。でも、俺だつて必死になつて調べたんだ。

また、逢いたかつたから…」

「…え？」

早口で話す『彼』と、一瞬、田が合つてしまつ。それが何故か気恥ずかしくて、二人ともすぐには口を逸らしてしまつた。

（やだ、どうしよう…）

抑えようとするほど、鼓動は大きくなつていぐ。頬が熱を帯び、赤くなつてくるのが自分でも分かるのだ。

「あの…じゃあ、俺、もう行かなくちゃいけないから」「え？ あつ、えつと…」

「じゃあな！」

慌てて口を開けようとした聰美に、大きく手を振つて駆け出していく。

「ちよつと待つてよ！ 私のことだけ知つてるなんて、ずるういつ！」

必死に叫ぶ聰美に、一度、『彼』は嬉しそうな笑顔を向けてくれた。

だが、次には車に乗り込み、すぐさまエンジン音は遠ざかってしまつ…

本当に、言葉が聞こえたかどうかは分からない。ただ、自分の中の気持ちを、少しは伝えられた気がする。

「…今度逢つたら、絶対、許さないんだから」

そう、今度逢つたら……

喜びに満ちる囁きは、白銀の風に運ばれ天空を巡る。

今日、今この素敵な出来事を早く伝えようと、聰美は『ブルー』に向かつて走り始めていた。

「へえ。由利ちゃん、同じクラスになつたの？」

家とは違い、インスタントではないコーヒーを受け取りながら、聰美は嬉しそうに児島のおばさんに頷いていた。

「席は、ちょっと離れてるんだけどね」

少し気取った素振りで、香りを味わつてみる。そんな姪の仕草に温かく目を細めながら、『ブルー』の店長は尋ねた。

「それで、勉強の方はどう？ 少し無理して入つたんでしょう？」

「大丈夫！ …って、本当はまだ言えないけどね。でも、由利だつているんだもん。何とかなると思うよ」

「そう。じゃあ、これからは『あの男の子』を探すのに集中出来るわけね」

からかう店長の言葉に真つ赤になりながらも、聰美はつんつと澄ましてみせた。

「由利もそろばっかり。あれから、ちょっと図書館に行こうかな、って言つと、すぐにからかうんだもん。嫌になつちやう」

あの連続十日間の通いが効を奏したのか、聰美は夏休み以降も、しばしば図書館に行つている。勿論、『彼』に逢えるかも知れないという期待もあるが、今では、本を借りること自体が大きな目的だ。

「でも、会いたいんでしょ？」

「…うん」

優しい深入りに、聰美は素直に頷いていた。

「でもね…何だか、『その時』が来るまで逢えない気がするの。由利にはロマンチストつて言われたけど…

『本当』に、そんな気がするんだもん……」

遠くを見詰める姿が、随分と大人びて見える。店長はゆっくり瞳を閉じると、小さな吐息を漏らしていた。

「私、やっぱり変なのかな」

大好きな児島のおばさんの様子に気が付いて、聰美はそつと静かに囁いた。店長はそんな少女へと、ふわっと柔らかな笑顔を向ける。「違うの。聰美ちゃんは、全然ロマンチストなんかじゃないな、つて…そう思つたの。夢を見たり、幻に憧れてるんじゃないくて…そうね。『信頼』してるんでしようね」

「信頼?」

きょとんとした表情で見上げる聰美に、店長は大きく頷き、応えていた。

「そう。逢えることを願うんじゃないで、当然逢えるものとして、その『時間』を待ち続けているのよ」

「そうなのかなあ……」

小首を傾げながら、聰美はおばさんの言葉を反芻していた。

あの男の子とは、たつたの一度ばかり逢つただけだ。そんな『彼』に対して、自分自身では、信じる、信じないといったレベルの思いは持つていないうちだつた。ただ…漠然と、そうなるんだろうな、と思っているだけなのだ。

だが、今、改めてそう言われれば、自分の中の何処かに『信頼』を置いているのかも知れない。だからこそ、諦めてもいのに、去年の夏ほど焦つていのうだ。

「どっちにしても、待ちすぎて、肝心のチャンスを逃さないよつこしなくちゃね」

「うん。大丈夫よ、きっと」

自信に満ちた笑顔で、聰美は頷いていた。

春の光が、まだまだ若葉よりも枯れ枝が目立つ木立の向こうから、ゆっくりと空の旅路を始めようとしている。小鳥達が愛らしくざわめく中、『全て』は黄金色に等しく染め上げられていた。

その金の矢の一筋が、カーテンの隙間を縫つて聰美の穏やかな寝顔を照らし出す。布団からはみ出しているその腕の中では、ベルの止められた目覚まし時計が冷酷にも時を刻み続けていた。

「おい、聰美！」

突然、大きな音と共にドアが開く。

「お前、今、何時だと思ってるんだ？」

飛び込んでくるその乱暴な声に軽く伸びをすると、うつすらと聰美はその目を開いていった。

「……？ 何よ、お兄ちゃん！ 勝手に女の子の部屋に入らないでよ！」

本氣で怒っている聰美に、呆れた視線が返ってきた。

「あのな、そういうことは時計を見てから言えよ。後は、もう知らないからな」

「え？ …ええ！」

手元に転がっている時計に気付いて、聰美は慌てて跳ね起きていった。

「どうして止まってるのよーおー…」

「自分で止めたんだる…」

溜め息と共にドアを閉める兄など、最早聰美の眼中には無かつた。朝食はおろか、髪を整える時間すら無いのだ。

「ああーん、さいてえ」

いつもと何一つ変わらない『時間』の中で、空はますます青く輝き、春の日差しを柔らかく受け止めていた。

「やた！ まだ始まつて…」

喜びの声が教室に飛び込んだ、その瞬間、ベルが校内に鳴り響く。その安心の音色の中、大きく肩を上下させながらも、ほつとした表情で聰美は自分の席へと歩み寄った。

「なあ、下村」

そんな聰美を、そつと隣の中川が呼び止める。

「ん？」

荷物を机に置いて振り向くと、彼は何処か心配そうに囁いてきた。

「坂本の奴、何があつたのか？」

「え？」

その言葉に慌てて由利の席を見てみると、驚いたことに、いつも大事にしている髪すら整えてきていない。元気そうな素振りさえ見せられず、小さく体を丸めている。

…随分と泣いたのだろう…目が、赤い…

「由利…」

急いで近付こうとした時、担任の内山先生が教室へと入ってくる。聰美は不安と心配で一杯になりながらも、一度、席に戻つていた。（どうしたんだろ…）

そういうえば、毎日のように続いていた電話が、昨夜は一度もかつてこなかつた。自分に打ち明ける余裕すらも無い何かが、あつたのだろうか…

いつもよりもずっと長く感じられる先生の話を、聰美は苛々しながらも我慢し続けていた。内山先生は割とお気に入りなのだが、今日は腹立たしく思えてくる。

「では、これで終わります」

やつと先生が出ていくや否や、聰美は由利の所まで駆け寄つた。

「どうしたのよ、由利！ 何かあつたの？」

「…聰美…私…」

すう一つと、涙が見開かれた瞳を覆つていいく。だが、両手を必死に握り締めると、由利は小さく頭を振つた。

「由利…」

「…「」めん…昼休みまで…」

やつとの思いで呟いている。そんな由利の姿に、聰美は急いで彼女の肩を抱くと言つた。

「うん、分かつた。分かつたよ…」

体を震わせている由利に、自分自身も泣きそうになりながら、聰美は何度も何度も繰り返し囁いていた…

「…屋上…行こう、か」

ひたすら待ち続けた昼休みの時間が漸く訪れると、鞄の中から弁当を取り出す事もせずに聰美は由利を誘っていた。

「……うん…」

やつと落ち着いてきたのか、思つていたよりもしつかりと返事をしてくれる。そんな由利の様子に少し安心すると、聰美は彼女の手を取つて教室から抜け出した。

向かいの校舎に渡り、階段を上つていく。

その間も、二人は何も喋らなかつた。

明るい喧騒が校舎に広がつていく中、だが聰美には重く静かな自分達の足音しか聞こえてこない…

その静寂が怖くて、急いで聰美は厚い扉を押し開けていた。

春先の、穏やかな光が足下を照らし出してくれる。なんて柔らかく、温かな波だろ…

青く霞んだ空の下に出ると、聰美は音を立てずに扉をそつと閉めてしまつた。

そして、ゆつくりと由利を振り返る…

その視線に触れた瞬間、由利はその場に頽れていた。

「由利！」

被さるよつとに抱き締める聰美の腕の中で、由利は声も出さずに泣き始める。

「由利…」

そつと、腕に力を込める。

ただ…ただ、ずつと、聰美は待ち続けた。

春の陽気に包まれたとは言え、建物の影に入ると、時折風が寒さを伴い吹き付けてくる。そんな寒さからも由利を守つてやるようにな、聰美は唇を噛み締めながら、涙を堪えてずつと抱き締め続けていた。

「…聰美…」

「大丈夫？ 由利…」

漸く、震えが小さくなつていく中、由利が微かに頷いてくれる。それから更に暫く待つていると、やがて、腕の中から掠れた声が零れてきた。

「寛君のこと……」

「片岡君、どうかしたの？」

「昨日…もう…

……別れよう…つて……」

「ええ？ 何よ、それ！ 本当なの？ 由利」

激しい口調で確かめてくる聰美に、由利はそつと頷いた。

「だつて…だつて、あいつから告白してきたんじゃない」

「……今のが高校で…もっと、好きな子が…出来たんだ、つて…

「そんな…！」

言いたいことは、沢山ある。だが、それらが言葉にならないほど、聰美は本当に心から憤りを感じていた。

「勝手すぎるよ！ そんなの、絶対に許せない」

立ち上がって今にも動き出しそうな聰美の腕を、だが由利はしっかりと掴んでいた。

落とした視線の先で、悲しみに染まる瞳が、じっと自分を見上げてくる：

「もう、いいよ…誰か、他に好きな子がいる…そんな寛君と…私、もう…平気で話せないよ…」

「でも、好きなんでしょう？」

「…もう…いい…」

(よくなによ！ 由利、しつかりして…)

そう叫びそうになるのを、聰美は必死になつて抑えていた。由利の涙に濡れた顔には、その言葉はとても厳しく思えたのだ。

怒りに満ちる心を押さえ付け、一つ、大きく深呼吸をする。

そして、俯く由利に向かって、ゆっくりと聰美は口を開いていた。

「…分かった。もう、何も言わない

「……うん…」

「……きっと、本当に由利が好きになる人は、あいつじゃなかつたのよ。それに、そんな勝手な奴なんだもん。別れて、良かつたのかも知れないよ……」

「今は辛いけど……泣きたいだけ泣いてしまつたら……それで、終わつてもいいと思う……」

「もつと、もつと何か言いたいのだが……」

「……どうしても、『他人』のようにしか言えない自分が、情けなくなつてくる。」

「ごめんね、由利。私、何も出来そうにないの……」

泣きそうになりながら……いや、本当に目を瞬かせながら、聰美は咳いていた。

「ううん……ありがと……」

由利はそう囁くと、そつと体から力を抜いた。

そのまま、聰美の細い腕に全てを委ねてしまう……

いつしか陽が滑り、二人の上からは影も追い払われている。太陽は日映い光を降り注ぎ、その温もりは一人の体と心に柔らかく染み渡つていた。

その日、聰美は由利を家の前まで送り届けていた。

別に、何を話すわけでもない。いや、一言も口にはしないのだ。だが、少しでも長く一緒にいたい……

時に、沈黙は素晴らしい『言葉』となる。由利にとつても、聰美にとつても、今必要なのはその『沈黙』だった。

「……じゃあね」

「……うん……」

結局、高校を出てから声にして交えた会話は、これだけだつた。由利が家の中へと入つていいくのを見届けると、聰美は急いで来た道を戻つていた。聰美の住むマンションは、由利の家とは少し方向が違つているのだ。

道端に躍る春の日差しは、そつと瞬き聰美の視線を誘つてくる。

だが……その淡い光は、今の聰美にはくすんでいるものとしか映らないかった。

マンションの薄汚れた灰色の階段を駆け上り、所々に錆の浮いた冷たいドアを開ける。

聰美は自分の部屋まで直行すると、荷物を全部机の上に放り投げ、すぐに着替えを始めていた。

脱ぎ捨てた制服には目もくれず、借りていた本を鞄に詰め込む。そして、そのまま、聰美は再び玄関から飛び出してしまった。

（……お願い……）

ずっと……そう、昼過ぎから、ずっと……聰美は心の中で繰り返していた……

（……今日、逢いに来て……）

児島のおばさんが言っていた『信頼』……その『力』は、由利の姿に自らを重ねた聰美の胸中で、大きく揺らいでいるのだ。（逢いたいの……どうしても……逢いたいのよ……）

こんな形で逢いたいと願うなど、今迄予想だにしていなかつた。だが、今日はここ数ヶ月の間でも、一番『彼』との出逢いを切望している。

今日、逢えなければ……

……もう、一度と逢えないかも知れない……

毎日のように会っていた一人が……あれほど簡単に離れてしまうのだ……

ましてや、たった一度の出逢いなど……

「……私……もう、イヤ……」

中学校最後の夏休みからずっとと思い続けていた悩みや混乱、不安が一気に押し寄せてくる。いつもなら、大好きなおばさんの店で泣いているかも知れないが……

今、聰美に必要な存在は、おばさんではなく『彼』だった。

見事な檻の並木が続く道を、半ば走るような足取りで急ぐ。赤茶けた煉瓦の壁が鮮緑と薄墨の間から見えてきた瞬間、不意に聰美の

目に熱いものが込み上げてきた。

だが、まだ…まだ、泣くことは出来ない。

必死に歯をくいしばって、図書館の中へと入っていく。

明るい日差しの下から急に薄暗いホールへと飛び込んだ為か、濃厚な暗闇がそこに漂っている気がする。その闇の濃淡や、支配的な沈黙の中に自分の心が見えるようで、聰美は逃げるよう右手の開かれたドアへと駆け込んでしまった。

温かな色彩と光に包まれ、少しだけ落ち着きを取り戻す。何とか震える体を抑えつけると、聰美はまずは借りていた本をカウンターで返却した。

…そして…振り返つて探そようと…

…だが、足は動こうとはしなかった。

…怖いのだ…もしも、今日、逢えなかつたら…

もう、一度と逢えないかも知れない…もう、何度も繰り返す想いが聰美の心で叫んでいる。たつた一度顔を合わせたくらいで、名前すら知らないのだ。本当に、自分の事を知ってくれているのかも分からぬ…

…いや、知らない方が自然だろう…

『彼』にとつて、自分は別に『特別』でも何でもなかつたのかも知れない。聰美自身が想つているほどには、『彼』は自分を想つてくれていなければ知れない…

昨日まで確かだつた想いが、今日のたつた一つの出来事で、全て崩れてしまいそうになつて…

(…しつかりしなくちゃ…)

精一杯の力でそう励ましてみるものの、体の震えは大きくならうとする。

それでも、途轍もない力を使って近くのテーブルまで歩いていくと、聰美は倒れるように座り込んでいた。落ち着こう…そう思い、願うのだが、不安と恐怖は一層胸の中で大きく強くなつてくる。(どうしよう…私…どうしよう…)

「逢いたいよ……」

小さく口中で呟くと、聰美はテーブルの上に顔を伏せてしまった。静かな空間が、重圧となつて小さな肩にのしかかつてくる。考えたくもない嫌な光景が、閉じられた瞼に次々と浮かんでは消えていく……

カタツ……

そつと、すぐ隣の椅子が動く。図書館の人が、不審に思つて座つたのだろうか。

だが、そうだとしても、聰美には最早どうでもいいことだった。例えどんな迷惑をかけたところで、今日『彼』と逢えなければ、もう一度と図書館まで来ることも無いのだから……

瞼の裏の闇を背に、につこりと優しく笑いかけてくれる……周りの存在など忘れ、聰美は想い出にしがみついていた。

(…お願い……)

「下村さん……」

不意に、心配に満ちた囁きが耳の中へと飛び込んでくる。

(…！)

その声にはつと顔を上げると、聰美は隣の席に目を向けた。

「…あなた…！…！」

「しつ…！」

思わず叫びそうになつた聰美を、鋭く制してくる。慌てて口を手で塞ぎながら、もう一度、確かめるように聰美は目の前の男の子を見詰めていた。

麦藁帽子を被つてはいないものの……見間違えるはずもない。去年の夏休みに出逢つた、あの『彼』だ……

その『彼』は、聰美の視線に照れた表情を見せると、小さく耳元で囁いてきた。

「外に出ようか。話したい」とがあるから……」

話したいことなら、自分にも沢山ある。尋ねたいことは、もっと多いかも知れない……

何度も何度も急いで頷く聰美に、温かな笑い声を少し漏らすと、『彼』は先に立つて児童書が並ぶ部屋を出て行こうとした。

すぐに、聰美もその後を追う。

今はそれほど薄暗く感じないホールに出ると、赤くなつてきいくしない素振りをしている聰美に、『彼』は振り返つて言った。

「すぐこの上に公園があるんだ。そこに行こつか

「…うん

何だか、夢でも見ているような気がする。何ヶ月も逢わなかつたことなど、嘘のようだ。しかも、これがまだ三度目の出逢い…先程までの揺らぎなど、今は何処にも見えなかつた。いや、それどころか、以前よりも更に強く確かな力が、心の中に築き上げられている。

風除室を抜け、図書館の外へと歩き出す。そのまま左手に進むとすぐに低い丘が現れ、『彼』はそこににある階段をゆっくりと上つていった。

じつとその後ろ姿を見ながら、聰美もついて上つていいく。図書館を出てから、一人とも全く口を開いていない。沢山の事を言いたくて…だが、何から…どうやって切り出せばいいのか分からぬのだ

…

「あの…」

「え？」

遠慮がちに話しかけた聰美を、足を止めて振り返つてくれる。その『彼』を前に、聰美は自然と言葉を押し出していた。

「今日は、絶対に逢いたかったの…

「ずっと、ずっと…逢いたいと思って…ここまで、来てた…」

「なんだ…ごめん。俺に、もう少し勇気があれば、もつと前に声をかけられたんだけど…」

恥ずかしそうにそう言つと、『彼』は手招きをして先に階段を上り切つてしまつ。そんな『彼』に追い付くと、聰美は横に並んで歩き出していた。

「今日は、いつも下村さんと違つてたからね。思わず、声をかけたんだ」

「…今日は、つて？」

不思議そつた瞳で聰美が見上げると、『彼』は目を逸らせながら苦笑いをして言った。

「その…本当は、去年の夏休みから、ずっと下村さんを図書館で見かけてたんだ。あの喫茶店で逢つてから、毎日、ここにまで来てくれただろう？俺もアルバイトの時間を切り詰めて、どんな本を読んでるのかな、つて…」

「その…『ごめん。どうしても知りたかったから…友達に、名前だけ訊いてもらつたんだよ…』

「そんなの、ずるいよ！ 私なんて、あなたのこと、何も知らなくて…

「ずつと…ずつと……逢いたかったのに…」

可愛く口を尖らせてしまう。そんな聰美に、『彼』は困ったように笑みを浮かべていた。

「本当に、『ごめん。でも、たつた一回しか逢つてないし、図書館の中でも見かけない方が多かつたから…ずつと迷つてたんだ』

「あんなに凄いこと、考えてたんでしょう？ なのに、迷うなんて…」

「凄いこと？」

問い返してくる『彼』に、聰美は力強く頷いた。

「子どものことや、司書のこと」

「ああ…それは、俺一人のことだからね。でも、これは違うんだ。何よりも、下村さんのことを一番に考えるべきだつたからね」

そんなことを、真剣に言つてくれるのだ。決して、口先だけではない

「ずるいよ… 一人だけで、良い格好するんだもん…」

頬を赤く染め上げながら、伏し目がちに聰美は囁いていた。

「じゃあ、これからは… その、下村さんにも手伝つてもらうよ」

会話が繋がつているのをどうか…だが、一人とも、これ以上は上

手く言えなかつたのだ。

それでも、少しは互いに分かり合えた気がする…

(きっと、この人も…)

自分と同じように想い、感じているのだろう。きちんとした『声』にするのは、時を置いてからでも構わないではないか。

丘の上には幅広いタイル敷きの道が伸びており、左右に木々と街灯が交互に配されてある。道の中央に点在するモニコメントを経巡りながら、一人はやがて芝生に囲まれた噴水の許へと近付いていった。

傾き始めた日の光を受け、水の粒が日映く照り輝いている。水面を跳ねる途切れない音色に耳を澄ませながら、二人は傍のベンチに腰を下ろし、飛沫越しの涼風を受け止めていた。

少し、沈黙が横たわる。

…やがて、聰美は話し出していた。

「今日は、『本当』に逢いたかつた…私、あなたに逢つてから、『自分』に自信なんて持てなくて…もしも、こうして逢わなかつた…」

…私、あなたのことまで、『信頼』出来なくなつてたと思う…

その時、自分は何を信じていけるのだろう…

小さな、殆ど独り言のような呟きに、『彼』は直接には応えてこなかつた。

「…今日のこと、話してくれるかい」

「うん…」

たつた二回だけ…それも、殆ど通りすがりでしかない『彼』を、どうして自身以上に支えとしているのだろう…

聰美には、自分のことでありながら、その理由など少しも分からなかつた。

…いや、理由など無いのかも知れない。…ただ、そこには『事実』だけがあるのだ。

なら、それは最も『真実』に近いのかも知れない…

途切れがちになりながらも、聰美は由利のことを話し続けていた。不思議と、涙は出でこない。悔しさも、怒りも、悲しみも…涙など見せなくとも、『彼』にはきちんと伝わっていくような気がした。（そうよ…きっと、この人が私と『同じ』だから…）

「ふ〜ん…それは、腹が立つな」

「でしょ？ でもね…由利は、もういいから、って…そういうのよ…一瞥してみると、隣で『彼』はきゅっと口を固く結び、真剣な表情で考え込んでいる。その瞳がとても厳しく思え、聰美は急いで目を逸らしてしまった。

胸の奥で、どんどんと鼓動は大きくなつていぐ。その音を「」まさにように、聰美は慌てて付け足していた。

「男の人って、勝手だな、って…」

「…だから、俺もそうかも知れない、って思つたんだりう〜?..」

微笑みながらやう言つてくる『彼』に、聰美は急いで大きく頭を振つた。

「違う〜！ そんなんじや、ないよ」

「いいんだよ。気にしてないから。俺だって、きつと不安になると思つよ」

「…」

さつときは思わず叫んてしまつたが、確かに、自分は不安だつたのだ。だからこそ、今日は絶対に『彼』と逢いたくて…

「その、由利つて子のことだけど…」

「あつ、うん…」

「俺も、下村さんの言つとおりだと思うよ。ただ、彼女が、まだ彼のことを好きなままでいたい、って言つたら、俺はきっとそれには反対しないと思う」

「どうして？ 早く忘れた方がいいでしょ？」

「人の気持ちつて、そんなに簡単じゃないよ。その人のことを好きだ、って思つたら、理由や立場なんて関係なく、好きになつてしまふことだつてあるんだ。」

いや、やうじやないかも知れない。きっと、理由の分かる好きな
んて、『本当』の『好き』じゃないんだよ

「うつ……うへん……」

胸元で腕を組むと、聰美は考え込んでしまった。だが、考えるま
でもないのだ。つい先程、自分自身、理由の無い想いを認めたでは
ないか。

「…やつぱり、凄いなあ。私なんて、絶対、そんなこと言えないも
ん」

本当に、随分と『彼』との間には『差』があるよつて思えてくる。
それが、とても悔しかった。

そんな聰美に、ゆつくりと『彼』は言った。

「俺は、自分を凄いなんて思つてないよ。その証拠に下村さんだつ
て、今の俺の言葉を考えて、少しあは賛成してくれたんだろ？」

「少しごこなが、全部賛成してると」

「ありがとう。でも、ほら。下村さんだつて、同じ事を考えること
は出来るんだよ。今はまだ、きっかけがあつて初めて出てくるのか
も知れないけど、基本は下村さんの中にはちゃんと入ってるんだ」

「でも、それって宝の持ち腐れえ」

憮然としている聰美に、だが『彼』は柔らかな笑みと共に応えて
いた。

「違うよ。宝の詰まつた小箱だよ。いつでも、好きな時にその中か
ら取り出せるんだ。ただ、その引き出しの鍵を自分で見付けるか、
他人から受け取るかの違いがあるだけなんだよ」

その言葉に、聰美は思わずふつと噴き出してしまった。

「まるで、何処かのラジオ番組みたい」

彼女のお気に入りの番組が、『宝の小箱』と言つ名前なのだ。

だが、驚いたことに、『彼』の方も聰美の言葉に笑いながら頷い
ているではないか。

「『宝の小箱』か。あれはいい番組だよな」

「聞いてるの？」

「ああ、ハガキも出してるよ」

聰美の勢いに気圧されながらも、『彼』はそう答えている。

心の遠くで、小さな光が見えた気がする。どんなことでも真剣に考え、応えてくれる……それも、同じ年なのだ……

だが、どう言えばいいのだろう？ あの人のハガキが好きだから……そuddtたらしいな、つと思い込んでいるだけなのかも知れない……

「下村さん？」

突然黙り込んでしまった聰美に、静かに囁きかけてくれる。視線を上げた先には、柔らかな笑顔が見えていた。

そう……この笑顔が……この瞳が、胸中から離れないのだ……

「あの……その……」

「ん？」

「間違つてたら、『ごめんな』もしかして……『櫻通りの風遣い』君じゃない？」

聰美は、半分怯えながら『彼』を見つめていた。

「へえ、よく覚えてるね。そうだよ。『櫻通りの風遣い』は、俺のペンネームなんだ。ほら、図書館前の通りが櫻並木になつてるだろう？ 俺の家もある近くだから、櫻に因んだ名前にしたんだよ。でも、本当によく覚えてたね」

「そりやそうよ！」

ぱつと立ち上がりながら、これ以上ないくらいに頬を上気させる

と聰美は言った。

「だつて、凄い常連じゃない。私、あなたの文章がとても『好き』で、だから、あの番組も欠かさず聞いてるんだもん。どんな悩みにも、問題にも、きちんと応えてくれるし……素敵だな、つて……冬には、私のこと、心配してくれて……」

「え？ ……あつ、じゃあ『風の小道』ってペンネームは……」

今度は『彼』が驚く番だった。聰美は何度も頷いて、続いている。

「うん！ 私のことなの」

「そうなんだ。…へえ、偶然つてあるんだね」

「うわあ～、何だか信じられない。私、今日一日、色々な事がありすぎて混乱してるぅ」

『彼』の前を、意味も無く往復してしまつ。じつとなごしていらっしゃないので。

そんな聰美を温かく見守りながら、ふと『彼』は呟いていた。

「でも…偶然なんかじゃないのかも知れない。偶然なんて、必然と

変わらないんだ…君を見ると、そう思えてくる」

「え？ もう！ 難しいこと言つて、一人で納得しないでよ。私、

どうなつてるのか分かんないんだから！」

「…そうだな。ゆっくり、考えていこう

そう言つて立ち上がると、『彼』は急に、落ち着かない聰美的手を握り締めてきた。

「え？ あっ、え！」

思わず、足を止めてしまう。

自分でも、熱いくらいに赤くなつているのが分かるのだ。鼓動など、絶対に外まで聞こえてるに違いない。

「ほら、図書館まで競争だ！」

「ええ？」

少しの間手を引いてくれた後で、『彼』は聰美を放してしまつ。

「ちょっと！ 待つてよお」

慌てて叫びながら、聰美はそんな『彼』を急いで追いかけ始めた。

明るい笑い声が、茜色に染まり夕暮れの中へと広がつていいく。風はその温もりを抱え、空を巡り何処までも流れていった。

翌日、高校から帰つてくるや否や聰美は服を着替えると、図書館に向かつて急いで自転車を走らせていた。

(…もう…)

少し、唇を尖らせてしまつ。

昼休みの校庭で、由利に昨日の出来事を話すと、呆れた顔で言われてしまつたのだ。

「じゃあ、何？ そこまでしとつて、名前もまだ知らないの？」

今日の由利は、もう随分と落ち着いていた。「どうでもいいわよ。

あんな奴！」と元気な声を出そうとしていたから、暫くすれば以前の彼女に戻るだろう。聰美は、そんな由利の強さをよく知っていた。そんな由利に言われて脹れてはみたものの、考えてみれば、その通りなのだ。昨日は動転したまま別れてしまつたが、自分は『彼』のペンネームしか知らない。ましてや、何処の高校なのかなど訊いているはずもなかつた。

…それに、もっともつと、他に教えてもらいたいことがある。

(悔しいな…)

『差』が無くなるまでは、『彼』に教わつてばかりかも知れない。だが、いつかは『彼』の役に立つてみせる。その為に、勉強だつて頑張つているのだ。

(私だつて、自分の鍵くらい、自分で探せるんだから…)

すつかり見慣れた自転車置き場でチエーンを回し鍵をかけた後、聰美は図書館の正面へと回つた。

そのままホールに入り、右手の部屋を覗き込んだが、……児童書の並ぶ中には、まだ『彼』の姿は見えていなかつた。早すぎたらしい。いや…今日、じつに『彼』が来るという確たる根拠も、実は無いのだ。

どうしても急いでしまつ気持ちを落ち着かせようと、椅子の一つに腰掛ける。

改めて『彼』以外の存在に目を向けると、平日にしては、子ども達の姿がやけに多く見えている。しかもその子ども達の様子が、何処か普段とは異なり、ざわついているのだ。

（何かあるのかな…）

ぼんやりとそう思つたものの、それ以上は気にも留めずに、聰美は借りた本を広げて読み始めていた。

この部屋に並ぶ子ども向けの本を、聰美はちつとも面白いものだと思わなかつた。だがその中でも、絵本にだけは、お気に入りの作品を幾つか見付けている。その数をもつと増やそうと、幼児向けのものから大人を対象としたものまで、何百冊とある絵本の群れを聰美は端から一つ残らず読んでいくつもりだつた。

大きな絵と、簡潔な文章が小気味いい。正直に言つて、聰美は物語や小説を読んでも、いつも何処かで冷めてしまつてているのだ。その文章が長くなればなるほど、「こんなにも面白いはずがない」とか「こんなにも大変なことばかり、続くはずがない」と思つてしまつ。

その意味では、クラスの他の女の子達とは違い、テレビドラマも苦手な方だつた。格好良い男優を眺めるのは嫌いではないが、予告で次回の話の内容があつさりと分かつてしまつたり、有り得ない状況ばかりで主人公に災難が降り注ぐのは、見ていて呆れてしまつ。そこまで有り得ない設定を用いるのなら、ハッピーエンドにしてしまえばいいのに、どうも悲劇が一般の人々には好まれるようだ。

「こんな風に思いたくないが、時々、聰美は本気で考へることがある。

……結局、誰もが自分よりも大変な人々の姿を見て、今の自分を取り巻く状況に、偽りの安心と満足を覚えたいのだろう……

その点で、絵本は有り得ない状況を、より真実に近いものとして描き出してくれる。中途半端に『現実』を表現する俳優を用いない

ので、本の内容は『空想』として素直に受け入れられ、冷めてしまうことも無い。だが逆に、創られた『空想』の世界であつても、文章では書き表されない物事が、描かれた絵を通して確實に真実味を帯びてくる。微妙なそのバランスが、聰美にはぴったりだったのだろ。或いは、絵の中にある鏡や椅子、窓辺のゼラーヴムや台所の蛇口といった『生活』に、聰美は安心を感じていたのかも知れない。……これは『空想』だ。だが、「あつて欲しい」……「もしかしたら」……そう思つてもいい『現実』なのだ……

そんな雰囲気が醸し出される《絵》にこそ、聰美は心惹かれるのだろう。

「うわっ、うわあ！」

いつしか集中して絵本の中に入り込んでいた聰美の耳に、突然幼い歓声が飛び込んでくる。

「陵史たかしお兄ちゃんあんちゃんだあ！」

何事かと慌てて顔を上げると、聰美は部屋の入り口を振り返つていた。

(……！)

驚いたことに、そこには子ども達に囲まれ、照れたように頭を搔いている『彼』がいるではないか。

(…陵史?)

それが、『彼』の名前だつたのだ。

急いで立ち上がってみたものの、子ども達のはしゃぐ様子に思わずたじろいでしまう。そんな聰美に気付いて『彼』は軽く手を上げてくれるのだが、動けないのは『彼』も同様だつた。

「お兄ちゃん、今日も読んでくれるんでしょう？」

まだ随分と小さな女の子が、ちょこっと首を傾げて尋ねている。

その期待に満ちた円らな瞳に、『彼』は辛うに応えていた。

「ごめん、美和ちゃん。ちょっとだけ、待つてくれないかな」

「えええ～つ！」

「僕、ずっとずっと、待つてたんだよ」

一斉に、周りの子ども達が不満の声を上げる。その言葉の波に、『彼』は本当に困り切つてしまっていた。

（私だったら…）

押し退けてでも、動いていたかも知れない。それが、どれだけ子ども達の心を傷付けるかも知らずに…

聰美は、何も言わずに待ち続けていた。

「ほんのちょっとだけ。『ごめん！』

何度も謝つて、とうとう陵史も動き始めてしまう。心から済まなそうにしている彼に、子ども達は文句を言いながらも、邪魔はしなかつた。

その様子をじっと見つめていた聰美は、近付いてくる陵史に頬を赤らめながら微笑みかけた。

「やあ、聰美…じゃない、下村さん」

急いで言い直す彼に、思わず噴き出してしまつ。

「いいよ、聰美で。その方が嬉しいもん」

囁くように告げられた言葉に、陵史は正直に慌てていた。

「え？ あ、えつと…ありがと…」

あの、悪いけど…俺、春からずっと、えつと、週に一回、みんなにお話を読んであげてるんだ…」

「気にしないで！ 待ってるから。私も聞きたいし…」

舌の縛れを遮つて聰美が言うと、不意に陵史の足にしがみついていた女の子が、にこにこと見上げながら尋ねてきた。

「ねえ、お兄ちゃん。この人、『カノジヨ』って言うのぉ？」

「ええっ！」

これには、思わず一人とも真っ赤に頬を染めてしまう。すぐには応えられずにいた一人の様子を見て、少しだけ大きな小学生達が愉しそうに囁き立ててきた。

「おい、うるさい！ よお～し、分かった。今日は、もう何も読まないからな」

陵史が赤くなりながらも少し脅かしてみせると、小さな子ども達

が慌てて騒ぎ始める。

「だめえ！」

「ぜええ～つたい、だめえ～！」

そのあまりの勢いに、恥じらいも忘れ果然としてしまつ。そんな

聰美の前で、陵史は一つ大きく頷いた。

「はいはい、分かったから！　じゃあ、いつもの所に集合～！」

その一言で、子ども達がばたばたと走り出している。

沢山の小さな背中を見送りながら、陵史はそつと肩を竦めてみせた。

「大人気ね！」

「今のところは、な

そう言つて互いに顔を見合わせると、二人は急に笑い出してしまつた。

何処に行けばいいのか分からず、そんな幼い子どもの温かな背中を押しながら、ちらつと眩しそうに隣に立つ陵史を見上げる。

（この人の『強さ』って…こんなところにもあるのかな…）

そんなことを思つてしまつ。

「つまらなかつたら、部屋を出でていつてもいいから…」

「つうん。つまらないなんて、絶対に思わないわ」

「ありがと～」

子ども達の前に向かう陵史を見送つて、自分は少し離れた椅子に腰掛ける。

そんな聰美に、一度、柔らかな笑みを向けてくれる。聰美もそつと頷くと、彼は輪になつて座る子ども達に言った。

「じゃあ、始めようか

「ねえ、今日も、お兄ちゃんのお話？」

美和と呼ばれた女の子に、逆に陵史は尋ねていた。

「その方がいいのかな」

「うん！　うんっ！」

沸き起る賛同の声に頷くと、陵史は手にしていた鞄から原稿用

紙を何枚か取り出した。

（え？ お話つて……じゃあ……）

そう、陵史自身が書いているのだ。

先程までは、随分近くに想えたのに……何だか、前より一層、『差』
『』が広がってしまった気がする。どんどん上に昇ってしまって……もう
う、手も届かないのかも知れない……

急に、『自分』に自信を失つてしまつ。

聰美は、複雑な表情を頬に映しながら、始まつた陵史の声に耳を
傾けていた。

「今日のお話は、本当はみんなには難しいと思う。聞いたことも無い
い言葉が、一杯出てくるからね。きっと、この図書館の人でも知ら
ないような、そんな言葉だつてあるんだ。

でも、じつと聞いて欲しい。お話に必要なのは、知識じゃなくて
心だからね。

「じゃあ、始めようか」

その日、私は美しいたたずまいを見せて広がる湖の南岸を巡り、ヴィンの町へと入っていました。

私には、帰るべき家などありません。肉親も友も既に亡く、ただ、幼少の頃から諸国を経巡り生きてきた者です。

鮮赤に染まる傷の焰を振るいもせず、神々に毎朝供物を捧げることもあります。

聖なる龍が護る妙なる月の雫も私の許では風となり、その煌く光だけでは宿に留まることも適わないのでした。

ですが、私にも詩を愛でる女神さまから戴いたものがあります。それがこの声と、清澄な音色を奏でる豎琴です。

これらのものを携え、私は行く当ても無く、気儘に旅を続けています。

飄々と街の中や草の原を歩んでは、眸の向く儘に全てを見つめ、空想の敷布を広げるのでした。

一面の白大理石が夕陽に輝く広場の泉で、光の泪が宙を舞う様を認めたなら、その煌く滴を纏う子ども達に私の想いは馳せていきます。

夕闇が迫り、青闇が集う宵ともなれば、愛を語らう恋人達の優しい囁きを思い微笑みます。

或いは風に向かい立ち掛かる、孤高の古木を見上げれば、その足下に横たわっている勇気ある人々の哀しい調べに瞳を濡らすのです。

私は、詩人ではありません。

ですが、心は詩を求めているのです。

美しい言の葉と、消え入りそうな儂い音色… それらを私は知りたいのです。

…ええ、そうです。

詩の女神さまの想いを多く心に残す為、私は足の向く先へと歩ん

でいるのかも知れません……

そうです。その日も、私の想いは細やかな美を奏でるファロア女神さまの神殿へと誘わされていました。

その御堂から流れ出す、聖女達の声に心惹かれたのです。

華美な装飾など見られませんが、慎ましやかな祈りと秘めた莊厳さが、この聖なる館には漂っています。

その慈愛に満ちた衣を纏い、私は自らの心をあらゆる存在へと拡げていきました。

その間にも、縹渺たる聖女達の祈りは胸の中へと染み渡り、私を更なる『時間』へと誘ってくれます……

女神さまの神殿の左右には、小さいながらも美しい側廊が並んでいます。

その要所には、この聖堂で身籠られた高貴な方々の彫刻が静かに佇んでいました。

清楚な歌声と共に私の足は彷徨い続け、妙なる旋律と共に私の瞳は居並ぶ石像を追い掛けます……

その時……不意に、私は美しい立柱の影に、一人の立像を認めました。

半ば隠されているそのたおやかな光に、思わず足を止めてしまったのです。

白衣を緩やかに纏つた、女性の半身が覗いています。

なんと白皙な脚なのでしょう。

湖上にたゆたう金紅色の朝靄にも似た、薄い紗の衣がいじらしくその身を遮っています……

私は、慌てて……そして、ゆっくりと柱に歩み寄りました。

……ですが……次には、私は深い失望に捕らわれていたのです。

今にも動き出しそうな細い腕は、柔らかな光を内側から放つようです。

大きく開かれたその胸元には、冷たさなど一つも感じさせない輝

く鼓動が秘められています。

ですが……

……その、蒼海の輝く炎を内に隠す麗しき大地は、頭部を自らの身で支えてはいなかつたのです。

いつしか、聖女達の美妙な調べは虚空に消え入り、私は唯一人、この女性と共に沈黙の中に取り残されました。

想いは『時間』と言つ名の、目に見えない黄金の流れに彷徨います。

その銀の風に乗り、私はこの女性の軽やかな舞を探し当て、自らの心に観ていたのです。

豊かな金髪が光る風に舞い遊び、星の煌きを辺りに放っています。雪花石膏の肌は空の下に躍動し、青い草々に囲まれ踊り続けています……

微かに潤む漆黒の双眸は私の瞳を見つめ、上気した頬には包み込むような優しい微笑みが映し出されているのです……

……その愛らしく小さな唇は、何かを歌い出しそうに、そつと開かれていきました……

女神さまの神殿を出た後も、私の意は女性の姿を追い続けていました。

ですが、もう一度と、あの石像を見に行くことは無かつたのです……

彼女は、想いの中での言葉に耳を傾けてくれます。

そよ風に揺れる草葉のように、そつと柔らかな笑い声を聞かせてくれるのです……

数日後、私は大理石が敷き詰められた街道を、東方へと歩いていました。

芸術と文化の街、リヴィンへと……

わたしは、その日もヴィンとリヴィンを結ぶ大理石の街道を歩いたんですね。

幅広い街道の左右には、純白の円柱が立ち並んでいます。その円柱の間では、道行く巡礼者や旅人達を担当にした店が開かれ、わたしが見たことも無い異国の品々を敷布に広げていました。いいえ、もう一つ。

円柱の間には、店と交互になつて、大理石の像も立つてゐるんです。綺麗な台座の上では、ヴィン・リヴィン姉妹国に功のあった方々が、じつとわたし達を見下ろしています。

…見守ってくれてるんですね。

その時も、いつもの通り、わたしはリヴィンのファロア女神さまの神殿を目指していました。

その神殿では、今も素晴らしい奇跡が起こると言われています。もう…幾度、この地に足を運んだことでしょ…わたしの妹は、とても重い病気に罹っています。

一年前、急に高熱を出した後…少しも体を動かせなくなつたんですね…

…村では、もう駄目だと呟いて言ってしまいました…

もつときちんとした町で頼めば、神々にも祈りを捧げてくれるかも知れません。そうすれば、治るのかも知れません…

でも…わたしには、そんなお金はありませんでした…

だから、考えたんです。姉として、どんなことが妹にしてあげられるのか…本当に、必死になつて考えました。

そして、お金の有無に関わらず、女神さま御自らの力で奇跡を起こして下さると信じ、このリヴィンの聖地に通うことを決めたんですね。

言ひ伝えは、随分と前に亡くなつた母から、何度も聞かされていました。

「苦しざん時、辛い時。どんな小さな事でも、女神さまは応えて下さるんだよ」

つて。

神殿の入り口から御神体の前まで続く白い石畳の参道を、膝を突きながら進んでいくんだよ、つて。

正直に言えば、辛いんです。

炎天下の長い道程を、必死になつて、少しずつ進むんですから…でも、妹はもつと苦しんでいるはずです。

いいえ、苦しいとさえ言えない辛さからすれば、わたしのしていることなんて、本当に小さなものなんです。

それに、最後に女神さまの優しい、柔らかな微笑みを見た時、わたしは何もかも忘れて笑顔を浮かべることが出来るんです。まるで、子どもに戻ったみたいに、無邪気に笑うことが出来るんです…

…ええ。

わたしは、そんな女神さまの御応えに、救われていたのかも知れません。

その日も、わたしはリヴィンの街に向かつていきました。

周りの石像も、もう今ではすっかり馴染みになつてるんです。

…いえ、…そのはずなんですが…

思わず、わたしは一人の騎士の立像の前で立ち止まつてしましました。

前には、こんな素敵なおを見た記憶が無いんです。

騎士にしては細い腕や脚をしていますが、その奥には力が漲っています。厳しくて、少し頬の瘦けた面には、でも優しい心が観えてくるんです。長い髪の毛は、首の後ろで一つに纏められ、風に軽く靡いていました。

今迄は、無かつたんでしょうか。

でも、それにしては雨に打たれた痕があります…

わたしは、胸の中のざわめきに戸惑いながらも、その方の台座に

おずおずと近付きました。

そつと、彌り込まれた名前を読みます。

「エスター...」

口にした途端、わたしの中に『何か』が大きく広がっていきます。なんて素敵な響きでしょう...この方には、他の名前など付けようがありません。

そのまま、わたしは暫くエスター殿の前で佇んでいました。でも、不意に、優しい風が頬を愛撫して通り過ぎていったんです。その瞬間、わたしは苦しんでいる妹のことを思い出しました。わたしは、己のことのみに夢中になっていた自分が恥ずかしくて...本当に、消えてしまいたくなりました。

また、リヴィンの街に向かつて歩き出します。
エスター殿の御姿を、この胸に仕舞い込んで...

リヴィンの街中へと入った後も、私は歩みを止めませんでした。

『何か』が、私を誘ってくれるのです。

辺りを包み込む光の波が、私の視線を行く手にのみ向けさせます。銀色の風の乙女達はさんざめく笑い声と共に、私の背中を柔らかな手で押してくれます。

そして、大地に夢見る陽気な小人達は、私の前から小石を運び去つてくれました。

目に見えなくとも、確かに存在する方々の麗しき腕に導かれ、いつしか私は素晴らしい女神さまの聖地へと足を踏み入れていきました。大きな円柱に支えられた門からは、幅広い雪白の道が、女神さまの御許まで続いています。

その、なんと美しい微笑み！ 『全て』をその豊かな胸元に抱き、怯える存在を護り導いて下さる女神さまの御前で、畏れ多くも、暫し私は見惚れずにはいられませんでした。

不意に、愛らしい微風が、私の心に語りかけてきます。

丸く、小さな指先が、振り向かせようとしているのです。

私の眸は、女神さまの優美な微笑みから離れ、後ろに伸びる穢れなき参道へと向けられました。

今、そこには、山の脚の女神が唯独り、こちらへと膝を突きながら近付いています。

貧しくも清らかな白衣が、俯きながら一心に祈るその女性の姿を、優しく…柔らかく隠しているのです…

その腕の白さ…

薄い靄に包まれる、仄かで儂げなその身…

そよ風と戯れる、海の光に煌く髪…！

私は、茫然と立ち尽くしていました。

…そうです…私は、ヴィンの街で出逢った女性を、今、この瞳に映していたのです！

突然、その女性が顔を上げ、私を真っ直ぐに見つめきました。澄んだ漆黒の瞳が、驚きで見開かれています…

そして…

…その唇からは、私の名前が零れ出したのです…

「エスター爾殿？」

と…

今、私はあの女性の家へと駆けています。

あの女性は、両の頬にその白く透き通った指先を添え、窓辺の花に囁いていることでしょう。

その時に零れるものは、幸せに満ちた溜息なのでしょうか…

それとも…切なく、辛い吐息なのでしょうか…

あの女性は、いつも無邪気に笑ってくれます。

ですが…今迄は、その奥に青く揺らめく悲しみの深い影が潜んでいたのです。その影を取り除く為なら、私はどのよつた辛苦にも耐えることでしょう…

いつか、あの女性の赤く染まる柔らかな頬に、本当の、心からの微笑みは訪れるのでしょうか…

…私は、それが知りたいのです…

愛らしい唇は、いつも私に心地好い言の葉を送り届けてくれます。ですが…微かに開いたその花弁に、私は長く甘い…優しい口付けでしか応えることが出来なかつたのです…

…私には、何が出来るのでしょうか…

今、私はあの女性の家へと駆けています。

…道を重ねる申し出と共に…

あの女性の溜息に、喜びは満ちてくれるでしょうか…

誰が、それを為し得るのでしょう…

…一体、誰が…

翌年、私達は、少しずつ体が動き始めた義妹と共に、ヴィンとリヴィン、二つの街の女神さまの御許を訪れていました…

……私は、
『真』の詩を知ったのです。

陵史が語つたものは、物語と言つよりも詩に近い氣がする。ゆつたりとしたその口調からか、静寂が語りの間に随分と織り込まれていくのだ。そんな、厳かな雰囲気に圧倒されているのか…子ども達も一言も口にせず、じつと彼を見つめている。

聰美には、とてもこの物語を理解出来たと言い切る自信は無かつた。だが、内容が進むにつれ、様々な場面は眼前に見えてくるのだ。緩やかに波打つ服で身を包んだ聖女達…その礼拝堂からアーチを通して覗く、側廊にある石像の数々…一本の柱の影に隠れた、頭部を失った女性像…

視える場面は、次々と変化していく。こんな光景の一つ一つを言葉に表せたら、どんなに素敵だろう…

『全て』ではないにしろ、彼はそれを試みているのだ…
物語は続していく。

やがて…

……私は、『真』の詩を知ったのです。

皆が個人で楽しむべき余韻を見守りながら、陵史は暫くの間、黙つて立ち尽くしていた。

ふと我に返つて、小さく、手を叩く。子ども達の可愛い手が、そんな聰美の想いを大きな波へと変えていく…

「ありがとう」

柔らかな笑顔が自分を真つ直ぐ見つめていることに気付いて、聰美は真つ赤になると俯いてしまった。

「『』のお話は、とっても難しかったと思う。でも、今は分からなく
ても、何度も読んでもらいたいんだ。知らない言葉も、一つ一つ調
べて、自分の中でお話を創り上げて欲しい…

それがきっと、『本を読む』ってことだからね」「ねえ、お兄ちゃん？」

「ん？」

美和が確かにるように陵史を見上げている。

「だから、『えへんぶ、良かつたんだよね』

彼はそんな小さな女の子の前に腰を屈めると、力強く頷いた。

「そうだよ」

「じゃあ、いいつ！」

そう明るく叫んで、女の子は嬉しそうに笑い声を上げている。
(そうね…)

彼女には、お話の流れすら分からなかつたかも知れない。だが、
全てが良かつたのだと知ることで、彼女はこの物語を知り始めてい
るのだ。『本を読む』ということは、何も《全て》分かることでは
ない。幼い子ども達でも、幼いなりに『何か』を理解出来ればいい
のだ。

その価値は、美和の笑い声に結実している…
聰美は、そう確信していた。

原稿用紙の「ペ」の奪い合いで、一頃り部屋の中がざわめきに満
ちる。

その後になつて、漸く、聰美は陵史に近付くことが出来ていた。

「本当に、『めん。退屈したんじゃないかな』

そう言つて見つめてくれる彼に、聰美は小さく、だがしつかりと
首を左右に振つた。

「『えへん、せん！』 とっても面白かったもん」

につこうと笑う先で、陵史は正直に照れて赤くなつてゐる。

「…部屋、出ようか」

「うん」

荷物を纏めた彼に並んで、部屋の外へと歩き出す。子ども達がからかいに来るが、それも玄関ホールまでだった。

その足で、陵史は向かいの部屋に入つていく。こちらは、文庫や実用書などが並んでおり、部屋も先程の所よりは大きい。

それに、何より、子どもが殆どいなかつた。

「でも、これって童話じゃないね」

空いていた椅子に座るとすぐ、聰美は手にしたポニーを示して言った。

陵史はそんな聰美の言葉に軽く笑い声を上げている。

「そうだね。本当は、今日はこっちを読むはずだつたんだ」
そう言いながら、彼は鞄の中から数枚の紙を取り出して見せてくれた。

『オカシナ村の好きな夢』と題されたそれは、きちんとパソコンで打ち込まれている。

ぱりぱりと見たところ、口調も柔らかく、始めから子ども向けて書かれたものだ。

「どうして変えたの？」

「こっちの方が、あの子ども達には良かつたと思つたのだが：

不思議そうな顔で尋ねると、陵史は優しくふわっと微笑んでくれた。

「聰美がいたからね。あの物語は、聰美に初めて逢つた日から、書き始めたものなんだよ」

「え？ あつ……」

（やだ、どうしよう……）

胸がどきどきして、真つ直ぐ彼を見ていられなくなる。

彼は、自分をあの石像の女性のように見てくれていたのだらうか

「…ありがと」

とにかく何かを言おうとして……だが、今はそれだけしか言えなか

……

つた。

少しの間、沈黙が一人を包み込む。だが、それは決して重荷ではない。温かく、そつと…一人を共に抱き込んでくれる存在なのだ。

「…あの…」めんね、私、本當にはよく分からなかつたの。でも…場面だけは次々見えて…まるでね、絵本みたいに話が見えてきたのよ

暫くしてそう告白すると、陵史は笑いながら頷いていた。

「それでいいんだよ。物語なんて、読む人に分かる範囲で無理せず理解すればいいんだ。若しかすると、明日読めば、この話も全く違つた印象を受けるかも知れない。でも、それは、讀んでいる聰美が、それだけの『時間』を生きてきた証なんだと思うよ」

「ありがとう。今は、面白かつた、つて…それだけしか言えないけど、この『ページ』、何度も読んで考えてみるからね」

小さく頷くその瞳が、とても澄んで見える。聰美は、ビシしても頬が赤くなるのを止められなかつた。

彼がどんなことでも深く考え、自分よりもずっと高い所にいられるのは、こんな風に文章を書いているからだろうか。

もしさうだとしたら…もつともつと、彼の書いたものを読んでみたい。日記を覗くみたいで、氣後れする部分もあるが…それ以上に、彼のことを知りたくて仕方が無いのだ。

彼の文章を読めば、少しばく《差》を縮められるかも知れない…

「ねえ、陵史君。他にも、何か書いてるの？」

「ああ、書いてるよ。途中で止まつてのも入れたら、結構、沢山あると思う」

「途中で止めることもあるの？」

驚いて問い合わせると、彼は少し困った顔で言つた。

「いや、止めるつて言うか…『休む』んだよ。文を書くにも、時期があるからね。その物語を書く為の『時間』が、きちんと決まつてるんだ」

「ふうん…」

その辺りは、聰美にはよく分からぬ。

「ねえ、何でもいいから、読ませてくれない？」

「いいよ。ただ、何でも、つてのは無理だから…」

「明日、俺の家に来るかい？」

「うん！」

と勢い良く応えたものの、一瞬、聰美は考えてしまった。

同じ年頃の男の子の家に行くことに、何處か躊躇いを感じたのだ。少なくとも、世間一般の常識からは、あまり好ましいものではないのかも知れない…

だが、そこまでで聰美は考へることを止めてしまった。世間一般の常識が、いつも自分達に正しく当てはまるものではないのだ。今聰美は、彼の家に行く事に、何の心配も不安も無い。

何と言われようと、それが聰美の『真実』だつた。

「じゃあ、明日、またここで」

「え？ あつちの部屋じゃないの？」

きょとんとして聰美がそう言つと、陵史は微かに苦笑いを浮かべて言つた。

「あつちだと、知つてゐる子どもが多すぎるからね」

「…そうね。ほんと、人氣者なんだから」

陵史は恥ずかしそうに、だが『本当』に嬉しそうに笑つてゐる。何処か、嫉妬にも似た憧れと共に、聰美はそんな彼を見詰め続けっていた。

「もう、ここでいいよ」

「大丈夫だよね？」

「もつちろん！」

自転車のサドルに跨りながら、聰美は大きく頷いてみせた。

辺りは、もうすっかり暗くなつてゐる。だが、マンショントは五メートルも離れてないのだ。

「明日、図書館で待つてるよ」

「…うん」

何だか、こうして彼と話をしていることが、夢のよつと細てく
る。

去年の夏休みから、ずっとずっと…そり、《本当》はずつと逢い
たかった『彼』が、こんなにも傍にいてくれるのだ…

「じゃあ。気を付けて！」

何度も想い描いたが分からぬ、柔らかな笑顔が背を向けて遠ざか
つていく。

その時、急に聰美は思い出して叫んでいた。

「あつ！ ちょっと待って！」

彼が、立ち止まって振り返る。

「名前！ 名前を教えて欲しいの」

そう…ずっと、知らなかつたのだ。

「俺、小林陵史！」

「ありがとう！ 陵史君…」

大きく手を振ってくれる。

再び背を向けた彼が、並木の向いに隠れてしまつまで…長い間、
聰美は見送つていた。

(…ありがとう…)

心の中で呟いた後、大きく息を吸い込んで家の方へと向き直る。
清爽な春の大気に包まれ、すぐに聰美は力強く自転車を漕ぎ始め
ていた。

微かな宝珠が鏤められた天空の下…透き通つた風で胸中が満たさ
れる。

《全て》に喜びを見出しながら、やがて聰美はマンションの中へ
と入つていった。

残念ながら、今日は雲が多い。それでも、時折流れてくる青空の帯に太陽の縁が触れた瞬間は、大地の上に斑の泡粒が揺れ動く。薄く広大な影の帯と、淡く儂い光の帯とに交互に飲み込まれながら、聰美は昨日の図書館での出来事を由利に話していた。

「なんだ。聰美の『彼』つて、小林君だつたんだ。
ふうん…でも、確かに、ちょっと格好良いね」

田に心地好いリズムで立ち並ぶ木々の下、昼食の弁当を開きながら何気無い調子で由利が呟く。

だがその言葉に、聰美は思わず大きな声で叫んでしまった。

「ええ！ どうして、由利が知ってるの？」

本気で驚いている聰美の様子に、由利は田をぱちくつさせながら当然のように応えてきた。

「だつて、同じ高校じゃない」

「ええ～つ！」

これ以上無いくらいに赤くなつた顔で、勢いよくぱつと立ち上がつてしまつ。

そんな聰美に、呆れながら由利は呟つた。

「やだ、知らなかつたの？」

あまりのショックに、かくかくつと頷くことしか出来ない。

「…ほんと、聰美つてオトボケなんだから、もう…」

「だつて…だつてえ」

大袈裟に溜息を吐いている由利の前で、どうにも落ち着かなくて、ただただ右往左往してしまう。

そんな、本気でうろたえている聰美の姿に、思わず由利は吹き出すと手を取つて呟つた。

「ほり、座りなよ。同じ学校で良かつたじやない。もう、わざわざ図書館まで行かなくてもいいんだよ？」

「……でも、……それって複雑う」

一応は座つたものの、今度は胸の動悸が激しくなつてきてしまつ。その大きな音が気になつて、聰美は徒に手を弄んでは、時々胸元に強く押し付けていた。

「そんなところが、『らまんちすと』なのよ。

いいじやない。中学校を、首席で卒業するような奴だよ？ それなりに運動も出来るし、でも、全然、でしゃばらないし。勿体無いくらいじやない」

「……私……どうじょり……」

「え？」

覗き込んでくる由利の視線を避けるように、聰美は僅かに濡れた瞳を下に落としてしまつた。

『陵史』と言う現実が自分に近付けば近付くほど、逆に『自分』との『差』が広がっていく気がするのだ。きちんとした『自分』を持ち、しかも客観的にその『自分』を分析して……でも、理想ばかりでなく、全体を観ながら『本当』の『自分』を主張出来る……いや、それだけではない。何をしても、自分は彼には敵わないのだ……

一方的に、彼から『何か』を貰い続けることは、簡単で、それはそれで楽しいものなのかも知れない。だが、そんな一方通行の関係は、聰美には悔しく思えるのだ。

（自分一人で、なんて……ずるいよ……）

だが……今の聰美に、一体何が出来るだろ……

あれだけ『彼』のことを知りたかったのに……今はもう、知らないう方が良かつたと思い始めている自分に気付いて、聰美は急に怖くなつてしまつた。

（違う、そんなんじやない……！）

そう、まだ……まだ、知りたいのだ。自分の中の『自分』は、もつともつと陵史のことを知りたがつて……

「聰美……？」

心配に満ちる声が聞こえる。聰美は静かに顔を上げると、見守る由利へと、震える声を投げかけていた。

「由利……私……陵史君に何もしてあげられないのよ……」

「聰美……」

由利は小さく溜息を吐くと、疎らな雲に覆われた空へと視線を向けた。

「……聰美って、真剣に人を『好き』になるんだね」

「え……？」

細く鋭い裂け目が、純白の膜に浮き上がる。その天の隙間から零れて、斜光が薄暗い空に澄んだ幕を引いていた。幾重もの透明な膜は、雲を背景に濃淡を描き、大地の存在を目映く縁取っている。「私なんて、ただ、好きになるだけで……一緒に居て、一緒に笑つてたらしいんだ、って……そう思つてた。

「……でもね、聰美を見てたら思うのよ。私なんて、まだ子どもなのかな、って。悔しいけど、私、まだ誰も《本当》には『好き』になつたことなんて無いんだな、って……」

「そんなこと、ない！」

「聰美……人を『好き』になる形つてね、きっと沢山あると思う。でもね、どんな形をしてても、きっと、誰でも聰美みたいに悩んじやうのよ……」

「私ね……本当は、とっても聰美が羨ましいんだあ」

「由利……」

思わず、俯いてしまう。

そんな聰美に小さく笑いながら、だが真剣な口調で由利は続けた。「でもね……どんなに悩んでも、それに負けたら終わりじゃない。自信の無い『自分』なんて捨てて、新しい『自分』を探すべきなんじゃない？ 私だって、口で言つほど簡単じゃないって分かつてるけど……私、他には何もしてあげられないから」

「……ううん。そう言ってくれただけで……『何か』を探せる気がする。私の中の小箱……まだまだ、引き出しがあるかもね……」

今はまだ、少しだけだが……それでも、明るい微笑みが舞い戻つてくる。そんな聰美が顔を上げた先で、由利は力一杯大きく頷くと、膝の上の弁当箱に手を掛けていた。

「はいっ……じゃあ、眞面目な話はそこまでにして、早く食べちゃお」

「うん……」

薄墨を貫いた斜光の束は、厚く、大きく広がつていき、少しづつ雲が輝きを取り戻していく。

風によつて光が流れ、通り過ぎていく木々の下……やがて楽しい笑い声が沸き起こり、その音はあらゆる存在へと届けられていった。

「いっただよ」

自転車に乗つて先を進んでいた陵史が、振り返つて脇道を指差している。

聰美が頷くのを確認してから、彼は櫻通りの半ばを右に折れていった。

陵史の後を追う聰美の頭上の天蓋は、今ではもう、すっかり晴れ上がつている。だが……胸中の悲しみや苦しみは、未だ霞みとなつて黄金の光を翳らせるのだ……

こんなにも近いのに……その間の溝は、なんて大きいのだろう……そんな自分の気持ちに気付いているのかどうか……陵史の笑顔が、何度も振り返つてくれる。その温かく、柔らかい微笑みは……だが、一層、聰美の心を複雑にするのだ……

「ほら、ここなんだ」

そんな彼の言葉に我に返ると、聰美は慌ててブレーキをかけていた。

キ、キイイーッ！

アスファルトを擦る、甲高い音が響き渡る。

こんな不安定な自分を心配して、見守つてくれている陵史を知りながら……だが、聰美はそんな瞳も無理に無視してしまつた……

…行き先の定まらない視線を、目の前の家に振り向ける。そこには、敷地一杯に押し込まれた感じのする家が、豊かな縁で縁取られていた。

陵史は何も尋ねずに、その家の車庫へと入っていく。

(陵史君…)

『彼』の優しさの一つ一つが、どうして、素直に受け入れられないのだろう…

小さく…聞こえないくらいに微かな溜め息を吐くと、聰美も彼に従つて車庫の壁に自転車を立てかけた。

車庫の奥にあるドアを開けると、すぐそこが玄関になつてゐる。陵史は先になつて戸を開くと、聰美を待つていてくれた。

「さあ、どうぞ」

この場になつて、少し緊張してしまつ。

その想いが顔に表れたのだろう、陵史は楽しそうな笑顔で続けてきた。

「大丈夫だよ。今は、誰も居ないんだから」「それはそれで、緊張してしまつんだが…

一呼吸置いて、中に入る。

そんな聰美の様子が可笑しかつたのだろう、陵史は思わず噴き出していた。

「何よお」

それでも、まだ、口を尖らせるだけの余裕はあるのだ。

「いや、別に。聰美つて、本当に素直なんだな、って…そう思つただけだよ」

そう言つと、彼は聰美の手を取つて歩き始めている。

「ちょ、ちょっと待つてよ！」

彼の言葉の通り、素直に、聰美は赤く頬を染めてしまった。

彼の手が、とても熱く感じられる。なんて、温かいのだろう…そのまま手を引かれ、聰美は一階へと上がつていた。

陵史は、階段に一番近いドアを開けると、少し照れくさそうに振

り返つてくる。

「ごめん、中は狭いんだ。適当な所に座つてくれていいよ。すぐ、何か飲み物を持つてくるから」

「え？ あつ……」

「うわあ……」

成程、確かに広いとは言えないだろう。

ベッドや机の他に、大きな本棚やパソコン、それに家庭用のノービ一機まであるのだ。中央には小さなテーブルが出されてあるが、身動き出来そうなところは、その周辺にしか無かつた。

そつと、静かにテーブルの前に座る。男の子の部屋と言つと、どうしても兄の部屋を思い出してしまうが、ここは比較にならないほどきちんと整えられていた。慌てて掃除をした雰囲気でもない。結構、沢山のものがあるのに、何処も乱雑ではないのは、普段からきっと整頓されているからだね。

陵史が居ないのにじろじろと見たらいけないな、と思いつつも、目は興味津々に動き回つてしまつ。

正面の壁には、大きな絵が掛けられている。晚秋の秋の風景を切り取つたものだ。その中心…淡い藍色に霞む家並みへと、一本の道が伸びている。その道が、何だか自分に誘いかけてくれているような気がして、知らず、聰美は立ち上がつていた。

絵の傍まで近付き、もつと詳しく見ようとしたのだが…近寄ると、それだけ粗雑な部分も目に映り、ただの「紙の上の絵」に変わってしまう。

急いでもう一度退がると、聰美は黙つてその『絵』の中を覗き込んでいた。

「力チ……

不意に、足下で音がする。驚いて落とした視線の先では、ティー

カップを置こうとした陵史が苦笑いを浮かべていた。

「ごめん、音を立てないようにしたつもりなんだけど……」

「う、ううん。私の方こそ、勝手にじろじろ見ちゃって……『ごめんなさい』

恥ずかしいところを見られた気がして、赤くなってしまった。

「いいんだよ。聰美に隠すものなんて無いからね。あの絵、気に入つた？」

腰を下ろしてカップを受け取りながら、小さく聰美は頷いた。
「うん……あの絵、不思議ね。淡く霞んだ家の中で、今、どんな出来事が始まってるのかなあ、って……そんな風に見えてくるんだもん」

「へえ……やつぱり、あんなハガキを出すだけのことはあるね」

陵史は嬉しそうに笑っている。そんな彼に、聰美は真っ赤になりながらも怒つてみせた。

「そんなこと、言わないでよ！ 私なんて、何気なく書いてただけで……陵史君みたいに、上手く表現だつて出来てないんだから」

聰美の言葉に、陵史は頷きながら静かに応えていた。

「それが良かつたんだよ。何気なく通り過ぎてしまう物事を、一部でもいいから書き残すことって、本当はとても難しいからね」「そうなのかなあ」

「何だか、まるで実感が無い。」

「少なくとも、俺には聰美みたいな文章は書けないよ」

そんなことは無いと思うのだが、笑いかけてくれる彼を見ていると、そもそも言えなくなる。陵史は、本当にそう想つてくれているのだ。例え、買い被りであつても……

「ありがとう……」

だから、聰美にはこれだけしか呴けなかつた。

少しの間、沈黙が部屋の中を支配する。その静寂に身を委ねながら、上手に淹れられた紅茶を一口含むと、聰美は改めて周りを見回していた。

本棚の中は児童書ばかりだらうと思つていたのだが、何やら難しそうな名前の背表紙も結構並んでいる。児童書との比率は半分ずつくらいだらうか。大きな本棚の隅には、コノシクも見えている。それが田に入つた時、正直に、聰美はほつとしていた。『彼』にしても、まるつきり自分達と違つたりはしないのだ…

ガラス戸の向こうには、他にも何枚かの小さな絵ハガキや、良くな出来た陶器の少女達が見えている。

「こんな人形や、あの絵にしたつて…高かつたでしょ？」

パソコンやコピ一機だつてあるのだ。一体、どれだけのお金を使つたのだろう。

「全部、アルバイト料が化けたんだけどね」

「そうなの？」

「《本当》に欲しいものは、やつぱり、自分の手で買いたいからね」

「ふうん…」

（私なら、親に出してもううううう…）

絵や人形はともかく、パソコンやコピ一機は本当に必要なら親に頼つてしまつだらう。

「ねえ…なんか、オバサンみたいでやなんだけど…あの絵で、どれくらいするの？」

一番心に残る晩秋の風景画を示すと、陵史は軽く笑いながら、それでも気にせずに答えてくれた。

「三万、だつたと思つよ」

「ええ…」

思わず、聰美は叫んでしまつた。たかが絵の為に… そつ思つ氣持ちが、心の何処かにあるのだ。そして、そんなことを思つ自分が醜く感じられ、視線を下に落とてしまつ…

聰美の叫びに、陵史は真剣な顔で応えていた。

「《本当》に必要なものなら、俺はどれだけお金をかけてもいいと思つよ。絵だけじゃない。あの陶器の人形だつて、金額に表せないくらいの沢山の『物語』を、俺にそつと教えてくれるからね」

「……『じめん…』

自分が、とても小さく思えてしまひ…

身を縮めている聰美に気付いて、陵史は慌てて謝つてきた。

「あつ、『じめん。俺、いつも自分の考えだけを話してしまひんだ。』

聰美には、聰美の考えがあるはずなのに…」

「つづん…」

急いで顔を上げると、大きく頭を振る。

「私なんて、何も考えてないもん。…やつぱり、陵史君、凄いよ。文章を書いてるからかなあ…『自分』って中心があるみたい」「そうかな。…まあ、確かに『何か』を書いていれば、それだけ考えることも多くなるけどね」

そう言つて立ち上がると、陵史は机の上からノートの山とペーパー用紙の束を運んできた。

「うわあ…このノート、何冊くらいあるの？」

「二十冊くらいかな。勿論、途中までしか出来てないものもあるけど。で、こっちがパソコンから打ち出したものなんだ。俺、字が汚いから、きっとこっちの方が読み易いと思つよ」

差し出されるものを、ぱりぱりと捲つてみる。

内容は、童話も含めたファンタジーが多いようだ。ファンタジーと言つても、巷で人気のある剣や魔法や学園ものばかりでないのが彼らしい。

何冊も見せてもらつてから、ふと聰美は気が付いて尋ねていた。

「ねえ、挿絵つて無いの？」

その言葉に、陵史は困つたように笑つてくる。

「本當なら、必要なんだろうね。特に童話なんて、絵の印象が一番大事かも知れない。でも、俺、見る方は好きでも、描く方はまるつきり駄目なんだ。これでも、随分と練習はしたんだけどね」

「そうなんだ…なんだ。陵史君にも、苦手なものつてあるのね」

また少し、ほつとする。それを感じたかのように、『彼』は片目を瞑つてみせた。

「安心した？」

「え…？」

恥ずかしさと嬉しさで、さあっと頬が赤くなる。『彼』には知られていないと思っていたのに…

「……うん。…とつても、安心した！」

はにかみながらも、弾む口振りが素直に飛び出してしまう。そんな聰美を見て、陵史は思わず吹き出していた。

聰美も釣られて笑い出してしまう。そのまま暫くの間、一人は共に大きな声で笑いあつていた。

部屋の中の存在が、全て明るく輝いて見える。素敵な存在に囲まれて…何より、陵史が目の前で笑つてくれているのを感じながら、聰美はそつと心の中で決めてしまつていた。

『彼』にも、苦手なものはあるのだ。全てに完璧で、いつも孤高の世界に住んでいる人間なんて一人もいない。

…だつたら、まだ『彼』に近付けるかも知れない…

聰美は、家に帰つたら、すぐにも文章を書いてみるつもりだつた。折角、陵史にも褒められたのだ。文章を書くことで、『彼』と同じように『自分』を…新しい『自分』を見付けられるかも知れない…

奇妙なぐらいにすつかりと落ち着いた気分で、聰美は陵史を見詰め続けていた…

「じゃあ、これを借りるね。暫くは、図書館にも行けなくなるけど大丈夫。その『時』が来れば、きっと逢えるよ。

…今迄みたいにね

「うん！」

勿論、探そつと思えば校内で逢うことも出来るのだ。だが、聰美はそんなことをするつもりはない。きっと、『彼』もそうだろう。

「本当に、送らなくてもいいのかな」

「うん、平気よ。じゃあね！」

少し自転車を押してから、陵史に向かつて大きく手を振る。応えてくれる彼に笑いかけた後、聰美は家に向かつて走り始めていた。曲がり角の直前で振り返ると、陵史がずっと見守ってくれている。

（私だつて……）

いつか、彼の役に立つて、彼を見守ることが出来るかも知れない。今はまだ、『自分』に自信なんて無いけれど……絶対に、『彼』と並んでみせる。

（一人で頑張るなんて、許さないんだから……）

涼しい夜風に吹かれながら、聰美は知らず、素敵な笑顔を溢していた。

その風の一筋が、開いていた鞄の隙間に入り込んでしまった。櫻の木の下で慌てて自転車を止めると、聰美は半ば飛び出していた紙を押さえ、きちんと鞄を閉じようとした。

ふと、押された紙に視線が向かう。どうやら、陵史から借りた冊子に挟まっていたらしい。

急いでその紙を抜き出すと、聰美は近くの街灯の下で広げていた。

「……詩？」

綺麗に印刷されたものだ。その頭には、聰美の名前が刻まれてある……

（……？）

あの人は 小さな背中を向けて 佇んでいた

温かな静寂をその身に纏い

だが決して振り返

らずに……

私には 分からなかつた

……その『影』が 誰であるのか を……

そう……

ゆっくりと振り向いてくれる その時までは……

薄墨が 抱え込んだ《影》を 手放してくれる

淡いその身を微かに震わせ やがて《光》に変

わりゆく……

私には 分かっていた

……その《光》を 待ち望んでいたと……

そう……

その人が 心の黄金と一つになると……

もう 独りで旅を続けることは無い

時の舟が吹き寄せてくれた その人を見付けたのだから……

う……

そう……

私はもう 独りではない……

「陵史君……」

嬉しくて……泣きそうになってしまつ。

そう……絶対に、独りではない。絶対に、独りになんてさせない……

「私……きっと、《光》になつてみせる」

今でも、陵史は聰美のことを《光》として認めてくれているのだ。だが、それだけでは聰美自身が許せない。もつともつと……『彼』に相応しい『自分』があるはず……

それを見付けた時、初めて、《本当》に自分はこの詩を受け取ることが出来るのだろう……

ゆっくりと… 大切に、紙を折り畳んで仕舞い込む。

そのまま、少しだけ閉じた鞄を見つめた後、聰美は再びペダルを踏み始めた。

あれから一週間。

聰美は毎日気に入つたものを選んでは、文章に纏めようと頑張つていた。陵史とも、ずっと逢わずにいる。今度出逢う時は、一通りこの文章が出来上がつた時と決めたのだ。

お気に入りの出来事は、意外と簡単に、それも毎日きちんと見付けられた。

若葉が陽光に煌く夕暮れ時の静けさや、碧く透明なイヌフグリの群生。傾きかけた穏やかな春の光に抱かれ、シロツメグサを摘んでいる一人の少女……

だが、難しく書こうとするためか、なかなか鉛筆が動かない。映像は、すぐに心の中に浮かぶのだが……語彙が少なすぎるのだろうか……

ハガキを書いていた頃は『自分の言葉』だったことも忘れ、聰美は今、辞書を片手に戦苦闘していた。

そもそも、長い間ノートを前に座り続けることも難しいのだ。誘惑は幾らもある。

そして、何より気になるのが、借りてきた陵史の文章だった。

『彼のようないい言葉を探し……』『彼のようないい言葉を探し……』一つの情景から何かを紡ぎ出そうとしたり……

苦しめば苦しむほど、陵史が凄い人のように思えてくる。ノートにたつた二ページ書くだけでも、自分はこんなにも苦労しているのに……

『本当に、悔しかつたのだ。

だから、中途半端に逃げるつもりはなかつた。どんなものでもいい。一生懸命、取り敢えずは最後まで書いてみよう……それが、聰美の目標だった。

それでも、時々は脇に置いてある陵史の作品に目を通してしまつ。

そこに書かれた考え方や意見に一つ一つ頷いたり、少しだけ首を傾げたり…自分だつたら、こう思うだらうな、と主人公に替わって台詞を考えることもあつた。

「…絵があつたら、もつといいのに…」

いつも、そう思つ。素晴らしい文章だと思うのだが、聰美には雰囲気が堅すぎる気がするのだ。小さなカットでも、思考や想念の適度なクッショーンになるのに…

そんなことを考えていると、時々、勝手に聰美の鉛筆はノートに落書きを始めていた。

陵史の文章を思い浮かべては、気儘に線を流していく。そんな自分で気付くと、慌てて落書きを消してしまつたが…いつのまにか登場人物の顔や声までもが固定されているのに気付いて、聰美は知らず真っ赤になつてしまつた。

（やだ！ 私、また遊んでるぅ）

急いで落書きを消しては文章を練り、少し休んではまた落書きをして…

必死になつて頑張つたのに…何処か落ち着かない気分で、それでも今日、聰美は一通りノートを書き上げていた。

読み終えた彼の作品もノートと共に鞄に入れ、すぐに図書館へと自転車を走らせる。

陵史のものには程遠いが、自分なりに一生懸命やつたのだ。文章を書いていて、考えてしまつことも多かつた。まだ新しい『自分』は見付けられないが、このまま続けてみれば、変われそうな気がする…

そんな報告をしたくて、聰美は櫻並木の下を全力で走り続けていた。

いつもの部屋に入つてみると、机に向かつて何かをメモしている陵史の姿が見えてくる。邪魔をしないようにそつと足音を忍ばせて近寄ると、そのまま黙つて聰美は向かいの椅子を引いた。

「……？」

それでも、何かの気配を感じたのだろう。陵史がふと、顔を上げる。そんな彼に、聰美は静かに微笑むと囁きかけていた。

「いいの、そのまま続けて。私、待ってるから」

「ありがとう」

柔らかい笑みを返してくれる。聰美が小さく頷くと、陵史は再びメモに戻ってしまった。

そんな様子を暫く見守った後、傍に並ぶ棚から本を選ぶ。読み進んでいくにつれ、物語の情景が次第にはつきりとした輪郭を描き始める。陵史と出逢つてから、何だか以前よりもその光景の『色』が鮮やかになつた気がするのだが……絵本を読むようになったからだろ？

「よし、終わつた」

空想の時間に遊んでいた聰美の耳に、不意にそんな言葉が飛び込んでくる。

急いで本を閉じると、聰美は優しく微笑みかけてくれる陵史に目を向けた。

「それ、宿題？」

「いや、今度の作品に使おうと思つてね。それより、本当にじめん。随分と待たせてしまつて」

「ううん、いいよ。

はい、これ。ありがとう」

鞄の中から彼の作品を取り出して渡すと、陵史は恥ずかしそうに少し頭を搔いて言った。

「感想は、聞きたくない気がするなあ。やつぱり、自分の中を覗かれてるみたいで、照れるから……」

「私だつて！」田記をじつそり見てるみたいで、ちょっとビビධาร্ঘをしてるもん。

でも……読んで良かったと思う。少しくらいこな、陵史君のことを知ることが出来たんだもんね」

「う… まだまだ、本当に少しだけなのだろう… だが、『少し』は『無』ではないのだ。

そんな聰美の言葉に、陵史は小さく笑い声を上げるだけだった。

「それで… その… 陵史君?」

「ん?」

「これ… えつと…

…… 読んでみてほしいの」

そう呟きながら取り出したノートを、聰美は真っ赤にならながら彼に差し出していた。

「……これは?」

不思議そうな面持ちで受け取る陵史に、聰美はゆっくりと… 考えるようにしながら言葉を紡いでいた。

「陵史君の詩、読んでね… 私も『光』になりたいな、って… ううん。私、自分で分かってる。

「… 私、まだ『光』になんてなつてないのよ… 」

「聰美…」

真剣な瞳で否定しようとする陵史を、聰美は真っ直ぐ見詰めて遮つた。

「だから… 私も相応しくなる、って… 『自分』を見付けたくて、陵史君みたいに文章を書いてみたの…」

「それが、このノートなんだね…」

「くんつ、と頷くと、彼は重ねて尋ねてきた。

「ここで読んでもいいのかな」

一瞬、迷ってしまう。恥じらい、恐怖、期待… 全てを飲み込んで、聰美はもう一度、黙つて頷いていた。

真面目な表情でノートを開くと、陵史は文字の一つ一つを丹念に追い始める。そんな彼の姿を正視出来なくて…

聰美は先程まで読んでいた本を、再び手に取っていた。

だが、文字を読むことなどまるで出来ない。同じ行を何度も何度も読み返して、それでも何が書いてあるのか頭に入つてこないのだ。

心の中はすっかり動転していて、今すぐこの場から逃げ出したいくらいだった。

それでも…必死になつて、聰美はその席に留まり続けていた。やがて、ノートを閉じる小さな音が、普段の何倍もの大きさで耳を貫いてくる。

聰美が恐々と上目遣いに見てみると、そこには陵史の厳しい顔があつた。

「…多分、はつきり言つた方がいいと思う」

そんな低い言葉に、聰美はびくっと体を震わせてしまった。

「俺は、聰美の『何か』を捉える視点はとても凄いと思うてる。でも、その素晴らしい力を、こんな文章で穢したらいけないよ。聰美は、感じ取った情景を無理に言葉で説明しようとして、その視点を歪めてしまつてる。しかも、そこから抽象的な考えを取り出して、無理に意味を附加しようとしてるんだ。」

確かに、文章を書いて『何か』を考えることは、『自分』を高める行為だと思うよ。でも、それは一つの方法、手段でしかないんだ。絶対に、目的じゃないんだよ。

きつと、このノートは苦労して書いたと思う。でも、『何か』を考えること、それ自体はそんなに難しいものじゃない。こんなことは言いたくないけど…聰美は、俺の真似をしてるだけなんだ。

無理に俺の鍵を差し込んで、引き出しを抉じ開けようとしてるんだよ…」

その言葉を聞いた瞬間、ぱっと勢いよく聰美は立ち上がり、陵史を睨み付けていた。

悔し涙で、その瞳が濡れている。

「そんなに言わないでよ… 私だって、陵史君の為になりたくて… 必死で頑張つたのに…なのに…！」

図書館中に響き渡つていることも意に介さず、聰美は力一杯、叫んでいた。

…悔しかつた…本当に、悔しかつた…

「聰美……『自分』を探すのは、俺の為じゃない。聰美自身の為なんだよ」

「そうかも知れない……そうかも知れない……」

……だが、今はその静かな口振りが、一層癪に障るのだ。

「いつもいつも、ずるいよ！ そうやって、一人で先に行くんだもん！」

もう、いい。帰る！』

激しい勢いで鞄を手にすると、聰美は部屋の外へと駆け出してしまった。

背後で、慌てて立ち上がる音がするが、振り返る素振りなど見せない。

そのまま、図書館を出でしまつ。

「聰美！」

陵史の叫び声を後ろに残したまま……

……自転車は、夕暮れの中を走り去つてしまつた……

「ねえ、おばさんからも何とか言ひてよ」

ほとほと困り切つた顔で、由利はカウンターの向いの店長に助けを求めていた。

ここ『ブルー』の程好い暗がりには、聰美的悲痛な泣き声が広がつてゐる。

カウンターに突つ伏して哭き続ける姪の姿に、児島のおばさんは一度、静かにその瞳を閉じた。

「そうねえ…確かに、その小林君も、ちょっと酷いわね」

「もつと、別の言い方があつたと思つんだけど…」

「でも、それだけ真剣だったのよ」

店長の言葉に、由利も頷く。

だが、聰美は、そんな言葉を認めたくはなかつた。

「でも、聰美ちゃん? 『本当』は、聰美ちゃんにも分かつてゐるでしょう?」

自分のしていたことは、ただの真似事なんだ、つて。それを分かつていて、でも認めたくないんじやない?」

「おばさん!」

そんな言葉では、火に油を注ぐようなものではないか。

由利の抗議に、だが『ブルー』の店長は片目を瞑つてみせた。

そして、そつと話し続ける。

「真似事が、悪いとは思わないわ。きっと、その小林君も、そこから入つたはずよ。

でも、彼はそれが『真似』なんだ、つてきちんと分かつてゐたと思うの。その中から、『本当』の『自分』を探し出さなくてはならないんだ、つて…

多分、とても悩んだはずよ。沢山の存在の中から、一つ一つ『自分』に合いそうなものを拾い上げては、以前に持つていたものを

照らし合わせていく。『自分』が納得出来る存在を、少しづつ選んでいく……

でもね、結局は、『本当に』に『自分』と一致する存在なんてないのよ。

だから、そこで考えるの。

『自分』は、これらの何処を変えれば、『自分のもの』に出来るのか……

その考え方の手がかりは、今迄に拾い集めたパーシングの中には、いつの間にか紛れ込んでいるものよ。いいえ、無意識のうちに、そのパーシングを変えてしまってこることもあるでしょうね

ゆつたりと、一言一言を区切る度に、柔らかな沈黙が泣き声を包み込む。

上りする小さな肩を抱いている由利も、店長の言葉をただ黙つて、だがしつかりと受け止めていた。

「聰美ちゃんにも、小林君の文章を読んで『ここは、この方がいいのに』『これは違うよ』って思う所があったのでしょうか？」

気付いていないかも知れないけど、その時、聰美ちゃんは『自分』の考えを創つているのよ。そんな風に思うことが、どんどんと『自分』を変えていくの。

変わることは、一瞬ではないわ。

一番、今、聰美ちゃんにとつて大切なことは、小林君の『言葉』を一つ一つ受け止めて、きちんと聞き返したり、考え込んだりすることなのよ。その行為が、『自分』を変えていくの。

勿論、間違つていると思うなら、そう言えばいいわ。彼の意見がいつも正しいとは限らないもの。反対してもいいことで、彼自身ももっと大きくなれるのよ。

話を聞いているだけだから断言は出来ないけど、小林君なら、きっと聰美ちゃんの意見にも真剣に応えてくれると思つわ

「……私……出来ない……」

しゃくつあげる聰美の咳き声、由利は呟くように言つた。

「ダメじやない、聰美！ やりもしないで諦めるなんて、全然、らしくないよ。

小林君のこと、分からないままでいいの？ 悔しくないの！ いつも先に進んでるけど、でも、その考えを一つ一つ分かつてけば、それだけ《差》も縮まるんじやない。

『自分』なんて、きっと自然に変わるんだよ。うつん、小林君のことを、ただ教えてもらつだけじゃなくて… 考えて、文句を言って… そんなことをしてる時にはね、もう、聰美は変わつてしまつてのよ

「そうね。もう、随分と聰美ちゃんは変わつてているわ

小さく、頭が揺れる。

否定するそんな仕草を愛らしく思いながら、店長は優しい瞳で言った。

「大丈夫。もう、自信を取り戻してもいい頃よ。

すぐに、きっと分かるわ。

これが、新しい『自分』なんだ、って…

穏やかな日差しが、店内へと流れ込んでくる。

細長い光の帯は、その温もりで辺りを満たし、全てをその身の内へと抱き込んでいた…

今日は、空を見上げても黒い雲しか目に入らない。今にも雨が降つてきそうだ。

憂鬱なその雰囲気に少しむくれながら、聰美は足早に家へ帰ろうとしていた。

あの日以来、図書館の方には行っていない。由利に背中を押されながら何度も考えた末に、やつと自分の行為が『真似事』だと認めた後でも…それでも、聰美は図書館に行く気になれなかつた。

勿論、学校でも会おうと思えば逢えるのだが…

逢つて、謝りたい気はある。だが同時に…文句も言つてしまいそうで、怖いのだ。

(何よ！全部、私が悪いみたいじゃない！)
そんな思いがあることも、事実なのだ。

何だか、ますます不機嫌になってしまつ。素直でない自分が可愛くなくて、聰美の心は一層沈んでしまつた。

そんな聰美に追い打ちをかけるように、大きな雨粒が頭上からぶつかつてくる。

次の瞬間、激しい雨音が辺りを包み込んでいた。

「もう！ 頃で私を苛めるんだからあ！」

思わずそんなことを叫びながら、聰美は鞄を頭に乗せて走り出していた。

瞬く間に、雨は白いカーテンで聰美を周囲のものから覆い隠してしまつ。よく見慣れているはずの帰り道が、まるで違う場所に感じられる。迷子になつたみたいだ。

(あの角を曲がれば……)

見覚えのあるブロック塀が、一瞬、雨の幕の向こうに覗く。あと、もう少しで……

そう思つた瞬間、聰美は何かに躊躇ついていた。
まるでボールか何かのよう、勢いよく、前へと飛び出す。

「あれ？」

そんな言葉を呴いた時には、聰美は激しく路面に叩きつけられていた。

ふう……つと……

……気が遠く、なる……

こんな、アスファルトの上では、轢かれてしまつ……直後なのか、暫くしてからなのかは分からぬが、ふとそんなことを思い始める。だが、意志も身体も、そんな思いに付いてきてはくれない。

「おいつ！」

(……?)

「大丈夫か？」

随分と遠い所で、誰かが叫んでいる。倒れている聰美に気が付いてくれたらしい。

優しく、そつと体が持ち上げられる。

「おー、聰美！ しつかりしろ！」

（しつかりしてゐわよー！）

…と叫んだつもりなのだが、声にならっていないらしい。

薄い感覚で、雨に濡れていないことは分かる。背中には冷たい…

コンクリートだろうか。

上半身を起こしながら、何度も呼び掛けてくれる…

その声や、周りの物音が少しずつ判別出来るようにならってきて…

漸く、意志と身体が微かに動き始めていた。

うつすらと、目を開けていく。

考えていたよりもずっと近くに、心配と不安、恐怖に満ちた男の子の顔があつた。

「見えるか？」

「う、ん…」

ぽんやつと応えた後で…ふと、その声に聞き覚えがあることに気が付く。

（…？）

慌ててもう一度、しつかりと焦点を合わせる。

瞬間、聰美は思わず悲鳴に似た叫び声を上げていた。

「陵史君！」

一気に、頬が赤くなってしまう。

どうして、こんな反応だけはスマーズに起らせるのだろう…もう少し、鼓動も小さくなつて欲しい。こんなに近くにいるのに、聞こえてしまうではないか…

「ど、どうして…」

そんな焦りを知られたくないで、聰美は懸命に声を探していた。

「どうして、つて…家に帰るといひだよ。ほら、すぐそこ図書館が見えるじゃないか」

「ええっ…」

本気で、聰美は驚いてしまった。

雨宿りが出来るようにと運んでくれていた軒下からは、確かに櫻に囲まれた図書館が見えている。

（私、どうして……）

「そんなことより、何処か痛くないか？ 見えるといひこな、打ち身と擦り傷しか無かつたんだけど……」

「え？ あ、うん…大丈夫みたい…」

彼が拭いてくれたのだろう。もう乾いている手足には、じんじんと低く響く痛みがあるものの、何とか動かせそうに思える。意識の方も、次第にはつきりとしてきている。

「立ち上がるか？」

「うん」

差し伸べてくれる指先を素直に取ると、聰美はゆっくりと立ち上がりうとして……

「きやっ…」

途端に、右足首からずきひ… と激痛が突き上げてくる。再び倒れそうになつた聰美を両手で支えると、陵史はそつと壁に立たせてくれた。

「捻挫かな…どうする？ すぐ近くに、病院があるけど」

「う、ううん！ 大丈夫…」

「じゃないかも知れないだろ？ 一応、診てもらつた方がいいよ」

「…………うん…………」

真剣な陵史の言葉に、聰美は俯いてしまった。

「こんなに生意気な自分を、『本当』に心配してくれる…

急いで二人の荷物を纏めている陵史の姿を、壁に凭れながら、聰美はじつと見つめていた。

「…………知らずに、涙が込み上げてくる…………」

「よし。じゃあ…」

立ち上がりそう言いかけた陵史に、聰美はふと倒れ込んでい

た。

「おい！ 聰美？」

心配する声を嬉しく思いながら、聰美はそつと囁いていた。

「ありがと… あんな、酷いことを言ったのに… 私…」

「… 謝るのは、俺の方だよ。あれから、何回後悔したか…

…」「めん…」

静かなその言葉に、聰美は声を上げて泣き出してしまった。…
雨の勢いは少しも弱まらず、激しい音を立てて路上を叩き続けて
いる。

だが、陵史の耳には、聰美の泣き声だけがいつまでも… いつまで
も、響き渡っていた…

「良かつたじやない。捻挫一つで仲直り出来たんだから」「良くなあい！」

見舞いに来てくれた由利に、聰美は怒つてみせた。

幸い、何処にも異状は見つからなかつた。ただ、念の為に一、二日は家に居るよう言われただけで、すぐ治るそつだ。

「それで、わざわざ家まで送つてもうつたんでしょう？ 肩を貸して
もらつて」

「由利！ 私はタクシーでいい、つて言つたんだからね？」「でも、最後までは断れなかつたのよねえ

「もう、いいつ！」

赤くなつて口を尖らせた聰美に、由利は笑い出していく。
だが、すぐに真面目な顔に戻ると尋ねてきた。

「でも、本当に良かつたじやない。すぐに描いてみる？」

「うへん… でも、改めて頼まれたら、描けないのよ」

家まで送つてもうつた時、陵史は聰美のノートを返してくれたの
だ。彼は、あのノートをいつでも渡せるようひとと、肌身離さず持つ
いてくれたらし。

そのノートの一番最後のページに、聰美が消し忘れた落書きが残

つっていたのだ。すぐにその場面が自分の作品のものだと気付いた陵史に、別れ際、聰美は挿絵を描いてくれるよう頼まれてしまつた。

「私だつて、絵があつたらいいなあ、つて思つてたけど…まさか、自分で描くなんて思つてもみなかつたし…」

「文句を言わないので！…これで、小箱の鍵が見つかつたんだから」「ええ？」

きょとんと見上げると、由利は呆れて溜息を吐いている。

「ほんと、聰美つてオトボケなんだから。もづ、新しい事が始まつてるじゃない。『絵』つて、正直に『自分』が出てくるし、一気に小林君との『差』なんて無くなるかもよ？」

「そうかなあ…」

「ほり、しつかりしろ…」

軽く頭を小突かれる。温かな笑顔で見守つてくれる由利に、聰美は少しばかんで…だが、しつかりと頷いてみせた。

「……うんっ…」

ところが、それからが大変だった。

落書きをしていたくらいなので、描きたい場面と構図はすぐに決まるのだが、背景や小物がなかなか思い浮かばない。空想の世界なので、くつきりと輪郭が固定されないのだ。

衣装などは、本を調べたり映像を探せば、それなりに相応しいものを選べる。だが、例えば、絵では曖昧に隠されている、その衣装を纏う女性の手袋や靴はどんなものだろう？…背景になる建物や、壁に掛けられた絵画は？…庭に咲く花や木々の姿は？

ほんの些細なことなのに、全く資料が見つからない時には投げ出したくなる。由利もおばさんも、そして陵史自身も雰囲気が含めばいいと言つてくれるのだが…それに甘えたくなかったのだ。折角見つけた引き出しを、聰美は全部開けてみるまで諦めたくはなかつた。

素敵な絵本のように、日常生活が窺える小物を描きたい。恐らく、その多くは誰も気には留めないだろうが…だが、『氣にも留めない』ということは、違和感が無いということなのだ。それは、読み手が空想の世界を『現実』として受け入れる第一歩だった。

(どんな樹があるのかな…)

この世界で同じような気候を探して…事典の中の絵を、こう変形させて…

…最初に借りた冊子の下書きが出来た頃には、もう梅雨も半ばを過ぎてしまっていた。

別に待ち合わせの時間を決めていたわけでもないが、鉛筆書きの下絵を鞄に入れて聰美は図書館へと向かった。

今日、陵史が居るという確証は無い。だが、逢える『時間』には、必ず『彼』と出逢えることを聰美は知っていた。

櫻の緑が、雨に打たれて優しい曲を奏でている。水溜りに描かれる無数の波紋や、傘が披露する陽気な歌声を楽しみながら、聰美はすっかり治つてしまつた足を軽く弾ませていた。

また、以前のように、この『絵』についても言われるかも知れない。だが、別に構わない氣がする。それで、一人が納得するまで互いに言い合えばいいのだ。そうすれば、きっともつと素敵なもののが出来上がるだろう。

まずは、ここに『自分』の想いと考えを『全て』描いてみた。それがもつと素晴らしい方向に変化したり、この中に更に『彼』の想いとを考えを描き込めるのなら、それはとても素敵なことではないか

雨に煙る中、図書館に入り、いつもの部屋を覗く。

そこでは、当然そうであるかのように、陵史が本を読んでいて…

… そつ……待つてくれて……いるのだ……

そつと足を忍ばせたのだが、気付いて陵史が顔を上げる。そして、彼も不思議なことではないかのように、柔らかく微笑みかけてくれた。

この微笑みと優しい瞳……ずっと…ずっと、聰美が見ていきたいもの……

「…いい？」

今でもまだ、胸の鼓動は高まってしまう。

「いいよ」

読んでいた本を閉じると、陵史は静かに隣の椅子を引いてくれた。黙つて、その席に腰を下ろす。

「雨の中、大変だつたろ？？」

陵史が大きな鞄を見てそう言つと、聰美は大きく頭を振つていた。「ぜえん、ぜん！… 隆史君に逢える『時間』が来たんだもん。雨でも雪でも、関係ないわ」

そう、周りがどんな状況であれ、その『時間』には全てが素敵なものへと変わるのだ。

そつと見上げると、彼も少し照れた顔をしている。暫くの間、互いに見詰め合つた後、二人はそつと笑い声を上げた。

「… そうだね。折角の『時間』、大切にしないと」

「そうよ」

聰美は、力一杯頷いていた。

雨の音が、大きな窓越しに聞こえてくる。その心地よい音色の中、鞄に手を伸ばすと、聰美は中からスケッチブックを取り出した。

「もしかして、そんな大きな紙に描いたのかい？」

「つうん。折れないように、挟んできたのよ」

そう言いながら、聰美は自分の決めた挿絵を一枚一枚、丁寧に陵史の前に並べていった。

下絵とは言え、細部まできちんと鉛筆で描き込んである。実は、絵など美術の授業でしか学んだことの無い聰美には、ペンなどを使

うことがとても不安だつたのだ。その不安を少しでも軽くしようと、下絵は必要以上に細かく描かれている。

「うへん…」

「…えりう…」

心配になつて、小さく尋ねてしまつ。そんな聰美の想いに気付いたのだろう、すぐに陵史は素敵な笑顔で応えてくれた。

「とても素敵な絵だよ。本当に…自分の文章が、こんな世界を聰美に見せていたなんてね…」

「じゃあ、これを基にしてもいい?」

再び絵に見入つている陵史の様子に、正直にほつとしながら聰美は言った。

「それよりも、この絵をこのまま使つた方がいいんじゃないかな。鉛筆の優しい線が、素晴らしい雰囲気を出していると思つよ」

「え? そうかなあ…」

そう言われて改めて見てみると、確かにこの下絵の方が『絵』としては生きているかも知れない。鉛筆の濃淡が醸し出す雰囲気は、少なくとも自分にはペンや他の画材で表現することなど出来ないだろつ。

「……そうね。その方がいいかもね」

「よし、じゃあ、決まり。

聰美。まだ絵を描きたいと思つてるなり、今度は童話を頼みたいんだ。子ども達に読む時、絵と一緒に見てもうおうと思つてね」

「紙芝居みたいに?」

「そう。そして、絵本みたいに。今の子ども達には、絵もとても大事な文章だからね」

「うん。やつてみよつよ。

…でも、隆史君つて、本当に、子どものことを話す時、優しい田をするのね…」

「そう…かな?」

照れながら頭を搔いている彼に、聰美は悪戯っぽく笑つてみせた。

「そうよ。私、妬いてるもん」

「おいおい」

そんな言葉に、一人とも顔を見合せると笑い出してしまった。自分で言つたことなのに、頬が熱くなつてしまつ。そんな聰美を見て、陵史は一人、微かに頷いていた。

聰美自身は気付いていないかも知れないが：

……彼女は、今や、陵史の『光』そのものだつた……

夏が始まるうとしている。

陽光は激しく大地を灼き、その煌きは人の目に痛みさえもたらすようだ。黒く感じられるほどのこの蒼穹の下、聰美と由利は木陰に入つて近付く夏休みについて話をしていた。

だが、その時不意に、由利が言葉を止めてしまう。

「ん？ どうしたの？ 由利」

珍しく、はつきりと分かるくらいに頬を上気させている。そんな由利の視線を追つてみると、その先では同じクラスの男の子が急いで背を向けているところだった。

「中川君じやない……ああっ！ 由利！ もしかして……」

「ち、違うわよ！ あっちから手紙を……」

思わず零れ出た言葉を抑えるように、慌てて由利は口を塞いでいる。だが、しっかりと聞いてしまった聰美は、少し脹れて可愛く拗ねてみせた。

「何よ！ そんな話、ちつともしてくれなかつたじやない」

「だつて、今朝もらつたのよ？ …まだ、自分でも何も考えてないし……」

身体を小さくしながら、由利は困つたように照れている。そんな仕草にふつと噴き出すると、聰美は素直な喜びで声を弾ませながら微笑んだ。

「でも、気になつてるんでしょ？ ずっと、田で追いかけてる」ともあつたじやない

「う、……ん……」

「中川君なら、きっと由利の素敵などころ、沢山分かつてくれると思つよ」

「……」

以前のことが…寛とのことが思い出されて、積極的になれないの

は良く分かる。

だが、少しだけ背中を押せば動いていける、そんな由利の強さも聰美は良く知っていた。

「ほら、らしくないじゃない。今度は由利が、新しく変わるので」「…………そうね……」

微かに咳かれただけなのだが、この一言で聰美はすっかり安心していた。例えどんなに小さな声でも、一度告げたことは決して裏切らない。それが由利の素敵なところの一つなのだ。

昼食の弁当を片付けるだけの余裕を見せながら、聰美は嬉しそうに言った。

「大丈夫よ、由利。今迄のお礼に、私だって、全力で応援するからね」

「ありがとう」

赤くなりながらも、由利が顔を上げてくれる。力強く聰美が頷いてみせると、由利もほつとしたように弁当箱を包み始めていた。だが、その手が一瞬止まる。怪訝な表情で聰美が目を上げると、急に由利が悪戯っぽく片目を瞑つてきた。

「ほら、小林君が来るよ」

その一言は、聰美を飛び上がらせるのに十分だった。今度は、聰美の方が胸元まで赤く染めてしまう。

慌てて振り返つてみると、制服姿の陵史が真っ直ぐ自分の方へと歩いてくる。

どう見ても間違いない、聰美を目指しているのだ。

今迄に無い彼の行動にどうしようもなく焦りながら、聰美はそれでも急いで立ち上がつていた。

何も言えずに陵史を迎える聰美の横で、由利は手早く周りを片付けるとベンチを立つていて。

「ちょっと……いいかな」

「え？ あつ、……うん」

恥じらいながらもそつと囁き合つ一人に、由利は笑いながら言つ

た。

「じゃあ、邪魔者は消えるね。どうぞ、『じゅくじゅく』

「由利！」

怒つて振り上げてみせた手の先から、わざと由利は逃げ出してしまった。校舎まで走つて戻る親友の背中を、聰美はむくれながら見送つていた。

何だか、再び陵史の方へと顔を向けることが難しく思える。学校の外でなら、絶対に難しいなどとは思わないのだが……。熱くなる頬の下、それでも、必死に恥ずかしさを抑えて聰美は陵史を振り返つていた。

暫くの間、二人とも何も言わずに立ち向かしてしまつ。

陵史にしても、何から話を始めたらいいのか分からぬのだ。珍しいそんな彼の迷いに気付くと、聰美は自分から小さく声を押し出していた。

「どうしたのよ……学校でなんて、今迄逢いに来てくれたこと、無かつたの……」

「……どうしても……すぐに、聰美に話したいことがあつたんだ」「え？」

その言葉がとても真剣で、深刻で……思わず、聰美は真っ直ぐに陵史の目を見上げていた。

「何なの？」

だが、陵史はまだ口にするの躊躇つている。

結局、聰美の問いに、彼は直接答えようとはしなかつた。

「……ちょっと、歩こうか」

そんなことを言つて、先になつて歩き始めている。

聰美も弁当箱の包みを手に取ると、急いでその後を追いかけた。

何だか、形にならない不安が、胸の中でほんの少しだけ鎌首を擡げようとしている。

だが……それをはつきりと意識する間も無く、温かな黄金色の光は

『影』を飲み込んでくれた。

そう…何を不安になることなどあるだらう…

聰美は、今の一人が『本当』なのだと知っているのだ。

陵史は、一言も口にせず、人気の無い校庭の隅へと歩いていく。近付く高いフェンスのすぐ先は、崖となつて川まで下つており、その向こう岸からは遠くまでなだらかな斜面が伸びている。豊かな緑に囲まれた家々が立ち並び、小さな箱庭のように一つの町が一望に見渡せるのだ。

あの一つ一つの小さな家に、何人もの人人が住み、毎日を精一杯生きている…

そんな想いに満たされることは、聰美のお気に入りの場所でもあった。

陵史も、この一角が気に入つてゐるらしい。そして、どうしても、そんな特別な場所で話したいことがあるのだろう…

だが、一体、何を…？ 話なら、図書館でも構わないではないか…

「ねえ…」

これ以上黙つてゐることに耐えられず、聰美は口を開いていた。

「どうしたのよ。陵史らしくないじゃない…」

その言葉に足を止めると、陵史は意を決して静かに声を押し出していた。

「…今度の夏休みに、引っ越すことになつたんだ」

「ええっ？」

あまりに突然のことだ、何と言えばいいのか分からぬ。そんな聰美に背を向けたまま、淡々と陵史は続けようとしていた。

「…俺は、もつともつと多くのことを知りたい。…そして、そうやつて集めた知識や文化を、子ども達に教えてあげたい。…そう思つていた矢先だよ…

ずっと…この町で…そう思つていたんだけどね…

「…………」

「でも、親父の都合も分かるんだ。

だから……聰美。俺は、この町の大学に通わせる」とを条件に、引
つ越しに賛成したんだよ……」

「……そんな……」

目を大きく見開いたまま、聰美は自分が声を出してこないといふやう
気付かなかつた。

「……そんな……私……」

手紙も……電話だってある。それこそ、毎日声を聞くことも出来れば、貯金をして直接会いに行くことも出来るのだ……

だが、それが分かつていても、受けた衝撃は癒されなかつた。

『彼』が転校してしまえば……

そう、今迄のよつたな『偶然』も、全て叶わなくなつてしまつ……

「聰美……」

陵史は振り向くと、不安に満ちた瞳を覗き込んでくる。

聰美は逸らしもせず、真つ直ぐにその彼の視線を受け止めていた。

「聰美、『偶然』なんて無かつたんだよ」

「……！」

「今なら、はつきりと断言出来る。俺達の『時間』は……『全て』が
『必然』だったんだ。

だから……大丈夫。『出逢う時間』が来れば、俺達は必ず出逢える
んだよ。

「……必ず……」

「陵史……」

瞳が濡れてくるのを、聰美は堪えよつともしなかつた……

……ただ……ただ、『彼』の眼差しを、受け止め続ける……

「俺は、絶対にこの町の……櫻の風が光る、この町の大学に戻つて
くるよ。

そして、卒業してから、この町の同書になる。だから……

「うん……うん……」

「私も、ここに……」

それ以上は、声にならない。

だが、その『言葉』を受け取つて、陵史は続けていた。
「だから…また、今迄と同じように、この町で逢いたい…
そして…ずっと…」

流石に、陵史もその先は口に出来そうになかった。
だが…分かつてゐる…

…それは、いつも聰美自身が望んでいることではないか…
「ずっと…ずっと…一緒に…ね…？」

震える唇が紡ぎ出す囁きに、陵史は真剣な表情で力強く頷いてくれた。

喜びは、涙となつて途切れることなく頬を伝い落ちていく。胸中に満ちる黄金色の光を確かに感じながら…聰美も、一つ、大きく頷いていた。

「…うん…！」

…この町で、待つてゐる…絶対、待つてゐる…

「ありがとう…」

次に気が付いた時には、聰美は『彼』の腕の中にしっかりと抱き締められていた。

なんて温かいのだろう…なんて、力強いのだろう…

「ありがとう…ありがとう…」

何度も何度も、呟きが漏れてくる。

その度に、腕の中で、聰美も小さく頷き続けていた…

『言葉』は『真』となり、風の腕に抱き上げられる。黄金の光は銀の輝きを身に呈し、『時間』の中へと織り込まれていく…

…それ…『時間』の中へと…

机の上のラジオから、聞き慣れた女性DJの声が流れ出していく。

今日は、とても素敵なハガキを戴きました。

いつも、色々な悩みや問題に真摯に応えてくれる、常連の『櫻通りの風遣い』君が、同じこの番組リスナーの『風の小道』さんと結婚されたそうです。おめでとう！『宝の小箱』のリスナー同士が結ばれるなんて、とても凄いことだと思いませんか？

本当に、幸せになつて下さい。これからも、沢山のことが起こるでしょうけど、一人だからこそ、乗り越えられるものもあるんです。人間は、一人が一緒になつてこそ、初めて『安心』を得るのかも知れません。『光』と『影』のようですね。

大丈夫。皆が、『櫻通りの風遣い』君と『風の小道』さんを応援していますよ。

本当に、おめでとう！

白銀の風が、音と化して通り過ぎていく。

何処までも……何処までも……

第一部『宝の小箱』おわり

胸の小匣は宝箱

『夢』と『力』を育みし

金銀鏤む《無限》の舟

誰が其の鍵

誰が夫の鑰

もたらすぞ
もたらすぞ
. .

夏休みまで、残り一週間を切った金曜日の朝。

真琴は乱暴に荷物を机に置きながら、楽しそうに後ろの席の弥生を振り返っていた。

「ねえ、フォンちゃん！ 今日も、行くんでしょ？」

笑顔の先で、物静かな少女が優しくはにかみながら頷いている。ちなみに、フォンとは FAWN を真琴が勝手に読み替えたものだ。弥生の小柄で愛らしいところが、真琴は仔鹿にそっくりだと思っている。

「…うん。…マ」「ちゃんは…？」

「あたし？ へへっ、今日は、ちゃんと読んできたんだから」

弥生にそう言うと、真琴は鞄の中から図書館の蔵書印が付いた本を取り出してみせた。

その時、不意に、登校してきたばかりの朋美が笑いながら顔を覗かせる。

「ほんとに、マゴが本なんて読むの？」

さも、信じられない調子で尋ねる彼女に、真琴もさも憤慨してい るような口調で応えていた。

「失礼ね！ あたしだって、本くらい、読むわよ。そりゃ、フォンちゃんみたいに凄くはないけどね」

「そんな…」

その言葉に、弥生が赤くなつて俯いている。

そんな弥生の様子を見て、朋美は…いや、他の誰しもが思うのだ。気が強くて男勝りな真琴と、こんなにも大人しくて優しい弥生…この一人が、何故これほどまでに気が合つのだろうか、と…

実のところ、真琴自身も、時々不思議に思うのだ。

だが、弥生はとても大切な友達だし、一緒にいるだけで、いつも大事なことを教えてもらっている気がする。中学一年生で同じクラス

スになつて以来、もう一年間と少しになるが、これからもずっと真琴は弥生と友達でいたいと思っていた。

「ほんとだ。マコのなんて、ただの恋愛小説じゃない」

ひょい、と朋美が真琴の手から本を取り上げている。

「こらつ！ 返せえ」

大袈裟に手を振り上げると、真琴は逃げる朋美を追い掛け始めた。あちこちから、そんな一人を見て、笑い声と懐しい声援が飛び始める。その様子に、弥生も嬉しそうに静かに微笑んでいた。教室の窓のすぐ下で、蝉が大きな声で鳴き始めている。

夏が…『本当』の夏が、今、もう、すぐそこまで近付いていた…

制服姿の多い各駅停車の電車に乗つて、二つ目。

隔週で訪れるその駅の見慣れた構内に降り立ちながら、真琴は振り返ると弥生に言った。

「フォンちゃんさ、小学校の時からここまで来てたの？」

「うん…」

この駅では、改札を抜ける人は少ない。無人の自動改札機を通りながら、真琴は恐れにも似た表情を浮かべていた。

「電車賃まで払つて。本当に、本が好きなんだね」

「…お金なんて、気にしてなかつた…だつて…」

恥ずかしそうに俯く弥生に、柔らかな笑みを向けて真琴は続けた。

「それだけ、本を読むことが大切だつたんでしょう？」

「…うん」

こんな表情の真琴は、普段の明るく力強い彼女からは思いもしないほどに優しさを湛えている。

もつとも、真琴自身は少しもそんな自分に気が付いていないのだ

が…

「羨ましいなあ。あたしもね、本当はフォンちゃんみたいにはつきり言える『大切なもの』が欲しいんだ…」

駅前の道を、右手に折れる。

四車線の県道の両脇に並ぶ店先を、一人は軽く覗き込みながら並んで歩いていた。

夏の日差しが、容赦無く照り付けてくる。並木の淡い影を選びながら、光の泡を纏う一人は暫くの間黙つてしまつた。

「…マコちゃん…」

やつとのことで、呟いてみる。

…だが、弥生にはそれ以上続けられなかつた。

ただの一言だ。たつた、それだけのこと……確かに、弥生を知らない人からすれば、『それだけのこと』なのだろう。だが、真琴は違つた。真琴には、弥生の『言葉』の重みが分かつていた。だからこそ、この呟き一つで、再び笑顔を取り戻すことが出来たのだ。

「ありがとう、フォンちゃん」

これからも…そう、これからも話すときは巡つてくるだろう。

「でもね、あたしは負けないわ。絶対に、見付けてみせるんだから」「うん…大丈夫だよ…マコちゃん、強いもん…」

そう呟つてくれる弥生に、真琴はにっこりと笑い掛けていた。その笑顔が嬉しくて、弥生も微笑みを返す。

そして…温かな沈黙へと、一人はそつと身を委ねていた。

周囲の店の雰囲気が、少しずつ変わつてくる。地方なので堅苦しさは無いが、一般の事務所が増えてきているのだ。

蝉の騒がしい鳴き声を押し退けて、自動車のエンジン音が横を滑つて通り過ぎていく。だが、そんな爆音にも負けない、微風にそよぐ緑葉の歌に気付きながら、真琴はぼんやりと遠くの景色を眺めていた。

そう……朋美や他の友達と一緒に時なら、こんな沈黙は我慢が出来なかつただろう。だが、弥生と共に居る場合は違つ。

弥生にとつては、沈黙も優しい『言葉』なのだ：

弥生自身がそれほど多くを語らないためかも知れないが、彼女を

包む静寂はとても多くのことを話しかけてくれる。その穏やかな『言葉』は、真琴にとつて心地好い囁きなのだ。柔らかく、決して他人を傷付けない『言葉』……

だが、残念ながら、声にしなくてはならないこともある。

この沈黙を破りたくはなかつたが……見慣れた脇道が目に入ると、真琴は済まなそうに弥生の顔を覗き込んで言った。

「ごめん、フオンちゃん。ちょっとだけ、いい？」

「うん……」

にこりと笑い返してくれる。真琴も嬉しそうに頷くと、先に立てその脇道を右へと入つていった。

行く手に、ぽつん、と小さな文具店が立つている。可愛らしいその店の裏手はすぐ雑木林になつており、道の先にはこの林の守り手のための祠が祀られていた。

弥生と図書館に来る時は、いつもこの店を覗くことにしている。心做しか逸る足取りで店先に近付くと、真琴はいつものようにガラスの向こうを見上げていた。

「……綺麗ね……」

後ろから零れる声にも、真琴は僅かに頭を動かして応えるだけだつた。そんな彼女を、だが弥生は嬉しそうに見守つている。

この『シルヴィー』と言う名の店先には、いつも一枚の写真がパネルに入つて吊り下げられていた。その写真のどれもが、天体写真を引き伸ばしたものなのだ。

今日、真琴の前に吊られている写真には、モノクロの月面が写されていた。

クレーターに塗り籠められた内部の暗黒と、際立つリム（縁）との対比が不気味に思える。目映い光条は、そんなクレーターを幾つも繋ぎ合わせては、灰色の海を放射状に渡つていく。

月の欠け際の一部分を写しているのだろう。右側の宇宙そのものを思わせるような漆黒の闇から、太陽へと向く左側まで、その写真の柔らかな階調は、見事に月の丸みを示していた。

「凄いよねえ…」

そんな言葉でしか、真琴には表せなかつた。あれほど遠く小さな存在を、ここまでくつきりと写し出すのだ。望遠鏡の原理も、フィルムの高い感度やその粒子の細かさも、知つてはいても、それでも真琴には不思議だつた。

「カランッ…

不意に、小さな鐘の音が聞こえてくる。

慌てて文具店の入り口を振り返ると、一人の女性がドアを開けて二人に笑いかけていた。

「あつ！　えつと、その…」

咄嗟のことで、何と言えばいいのか分からぬ。そんな真琴に、店長らしい女性は優しく頷いてくれた。

「今日も来ていたのね」

「あ、ごめんなさい！」

漸く、大急ぎで頭を下げる。

そんな真琴の後ろへと、弥生はすぐに隠れてしまった。人見知りの激しい彼女にとつては、逃げ出さずについにいるだけで必死なのだ。「気にしないでいいのよ。それより、暑いでしょ？　中に入つて見た方がいいわ」

「え？　いいんですか？」

面白そうに頷く店長を見て、物怖じもせず真琴は店の中へと入つていつた。

何度も店先には来るが、声を掛けられたことも、店の中に入つたことも初めてなのだ。折角のチャンスを逃すような真琴ではなかつた。

ほんの少し迷つていたが、弥生も真琴の後に続く。そして、ぴつたりと彼女から離れずに、一緒に店の中を歩き始めた。

地元の子ども達に人気がありそうな、可愛い小物で棚は溢れている。それらにも興味はあつたが、今、何よりも真琴の心を掴んでいるのは月面写真の方だつた。

店長が、そつとパネルを下ろしてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

思わず、声が弾んでしまう。そんな真琴の正直な口振りに、店長は楽しそうに笑い声を上げた。

「こんなに喜んでくれる人がいると知つたら、あの子も張り切るでしょうね」

食い入るように写真を眺めていた真琴は、その言葉にぱつと顔を上げていた。

「あの、これは誰が撮つたんですか？」

「私の家に来てくれている、家庭教師の子なの。小学三年生の娘に、英語を教えてくれてるのよ」

「そうなんだあ…あたし、てつきり大人の人が撮つてるんだと思つてた」

家庭教師には大人もいるだろうが…真琴にしてみれば、家庭教師＝大学生なのだ。

「大学生なら、こんな素敵なお写真も撮れるかも知れない…」

「二人とも、中学生？」

「はい、二年生です」

「この辺りでは見かけないわね。一週間置きに、何処に行つてるの？」

どうやら、いつもいつも、見られていたらしい。この言葉には、流石の真琴も顔を赤くしてしまった。

「…図書館です」

「そうなの。じゃあ、今日も行くのね」

「はい」

そう答えた時、袖の辺りを少し後ろに引かれた。振り返らなくても分かる。弥生の勇気も、そろそろ限界なのだ。

「あの、あたし…」

慌てて、真琴は周りの棚を見回した。何か買える物があればいい

のだが…

このまま出でてしまつなど、真琴には絶対に許されない気がした。

「いいのよ、私が誘つたんだから」

そんな真琴の仕草に、店長はくすくす笑い出している。

「でも…」

「いいの」

優しい瞳に、真琴はそれ以上何も言わずに頭を下げていた。
そして…厚がましいと思ひながらも、小さな声で続ける。

「あの、また来てもいいですか？」

「ええ、勿論よ」

「ありがとつゝぞこますつ！」

再び勢いよく頭を下げるが、真琴は名残惜しそうにパネルを渡した。

歩み寄つたドアの前で、もう一度、写真に田を向ける。

カラソッ…

その横を、先に弥生は外へと出でてしまった。

「どうも、ありがとつゝぞこました」

「また来てね」

その言葉に喜んで頷くと、真琴もドアを抜け、夏の陽光の中へと飛び出す。

道の先に、少し俯いて待つてゐる弥生を認めて、真琴は急いで駆け寄つた。

「じめんね、フォンちゃん。大丈夫？」

「…うん…私こそ…じめんね…」

もう少し、自分に勇気があれば…

自らを責めている弥生に、真琴は明るい声で言つた。

「そんなの、気にしてないよ。フォンちゃんは、絶対、悪いことなんでしないんだから。そんなに自分を苛めたらダメだよ」

「…ありがと…」

深い感謝を湛えながら、弥生は少し瞳を潤らせてゐた。

そんな彼女に、につこりと笑いかける…

大きな優しさで、知らず弥生の心を抱き締めながら、真琴は彼女の手を取ると歩き出して言った。

「ほら、早く図書館に行こう！」

今日は、なんて素敵な日なんだらう。今日、この瞬間から、『何か』が始まろうとしているのだ…

その予感は、はっきりと真琴の心の中で、黄金色に輝いていた。

柔らかな月明かりが、窓際の机の上へと腕を伸ばしてくる。その斜光の澄んだ波に包まれながら、真琴は顔を俯せて、微かな寝息を立てていた。

右手の指先は、今日借りてきたばかりの本に挟まれている。

夢の中で、新しいページを捲りながら…

…だが、いつしかその映像は『過去』のページを遡っていた…

懐かしい家並みが見えてくる。

すぐ傍に川が流れる古びたマンションを見上げながら、一人、真琴は『何か』を待っていた。

辺りを見回しても、少し先からは漆黒の闇で視界を遮られてしまつていて。

…一体、自分はここで、『何』を待っているのだろう…

（…あつ…）

そうだ…自分は、ここで…

真琴がその理由を想い出した瞬間、場面が一変してしまつ。

…部屋のドアを締め、ベッドに顔を押し付けた自分が見えている

まだ、小さい…小学三年生の自分が、…本当に辛くて…身を震わせて哭いているのだ…

宙から見下ろすようにして、真琴は自分自身の姿を眺めながら瞳を濡らしていた。心臓が、胸の奥で強く握り潰される気がする……

……痛くて……熱い……

「マコ！ 晃君が折角来てくれたのよ？」

「マコちゃん……」

怒っている母に続いて、『彼』の声が聞こえてくる……

その声が、哀しそうで……とても哀しそうで……

……だが、真琴は認めたくなかったのだ……

「入らないで！ 勝手に引っ越すお兄ちゃんなんて、大嫌いっ！」

自分でも、無理なことだと分かっている。どうしようもないこと

なのだと……

だが……だが、大好きな晃のお兄ちゃんだからこそ、別れたくない

つたのだ……

ずっと……一緒に居て欲しい……勝手に引っ越しするなんて……お別

れのプレゼントだなんて……

酷いよ！ ……するいよ、お兄ちゃん……

「……」めん、マコちゃん

（謝らないでよ！）

……『今』の自分が叫んでいる……

「……ここに、置いとくから……じやあ……」

コトシ……ヒ、小さな音がドアにぶつかる。

少しずつ、遠ざかる足音……

「いやあ！ 持って帰つてえっ！ お兄ちゃんのバカああ～！」

自分自身の絶叫が怖くて……真琴は、耳を押さえて体を丸めてしまつた……

再び……場面が変わる。

マンションの大きな門に凭れながら……自分が、手の中の包みを握り締めて待っている……

あの日、ぐずぐず鼻をいわせながらドアを開けると、そこには可愛いうるさくと手紙の入った封筒が置かれていた……だが、それを見

るべ、一層涙が溢れてくるのだ……とも、手紙など読めやつない…

（晃のお兄ちゃんの、バカ…）

結局、今朝になるまで、真琴には封を開けることも出来無かつた

…そして、今…」うして、お返しを手にして待つている…

包みの中には、小さな女の子のぬいぐるみが入っていた。真琴は、必死になつて自分に似た姿のものを探したつもりなのだが…

「あ…」

取り巻く暗闇から、《光》が溢れ出してくる… 黄金色の、温かな

《光》…

「…………」

耳元で鳴り響く田舎まし時計のベルに、真琴は思わず飛び上がつてしまつた。

…触れるまでもなく、頬を濡らしているのが分かる…

平日と同じ時刻にセットされていたベルを黙つて止めると、真琴はじつと机の上を見詰め、身動き一つしなかつた。

どうして、『今』、こんな夢を見たのだろう…

そう思つた瞬間、堪えきれずに真琴は机に伏してしまつた。

…声も上げず…だが、力一杯、泣き続ける…

朝の日差しは、部屋の中を淡い漣で照らし出していく。

悲痛な想いを包み込むよつて、そつと…そつと、《光》は真琴を抱き締めていた…

「一休みしようか、フォンちゃん」

「うん…」

大きな袋を抱えながら、真琴は隣の弥生を覗き込んで言った。光が霞む地下道を、人々の川が流れ過ぎていく。その無情な群衆を少し怯えた瞳で眺めながら、だが弥生は逃げ出しあわせ、真琴の傍で立ち止まっていた。

「大丈夫？」

（ちょっと、まだ早かつたかなあ…）

夏休み最初の週末は、真琴の順番として、買い物に付き合つてもらつたのだ。

来週は弥生の順番になるが、彼女は図書館以外の何処にも行きたがらないので、こうして時々、真琴が人の集まる所を無理に選んでいる。

だが、まだ『人間』に弱い弥生には、今日の短い買い物でも無理だつたのかも知れない。

心配そうな声に導かれて、弥生は顔を上げるとそつと微笑みを浮かべてみせた。

「うん… ありがとう…」

そんな仕草がいじらしくなつてくる。

真琴は見慣れた喫茶店のドアを見付けると、急いでそこまで弥生を伴つていつた。

「いらっしゃいませ」

濃い茶系の薄暗い壁が、この地下では心地好い。淡い光に照らされたテーブルに着くと、その落ち着いた雰囲気に身を委ね、弥生は知らず吐息を漏らしていた。

「いいでしょ、ここ。このお店の紅茶って、美味しいのよ」

緊張を解いて自然と笑みを取り戻す弥生に、正直ほつとしながら

真琴は荷物を隣の椅子に置いた。

店員に、お気に入りのリーフの紅茶を頼む。静かな足音が店の奥へ帰っていくと、真琴は済まなさそうに弥生に目を向けた。

「ごめんね、フォンちゃん。もつそろそろ、人混みにも慣れたと思ってたから…」

そんな言葉を、弥生は大きく頭を振つて遮つた。

「ううん…マコちゃんのおかげで…私も、楽しかったもの…」

優しく微笑む彼女を見ながら、ふと真琴は一年前の出来事を思い出していた。

中学校で同じクラスになつてから、初めて一緒に町まで遊びに来た翌日、弥生は寝込んでしまつたのだ。別に、風邪をもらつたわけではない。ただ、周囲の人々と同じよつに急ぎ足で町を通り過ぎ、それでも押し寄せてくる『人間』の群れに気分が悪くなつてしまつただけなのだ。

頭痛どころか、微熱まで出していた当時を思いながら、改めて真琴は今の弥生の姿を眺めていた。

「…良かつたね。フォンちゃんも、町を歩けるよつになつたし、どんどん、面白い所に連れてつたげる」

勿論、無茶をさせるつもりは無い。一年経つた今でも、弥生には買い物が精一杯なのだ。弥生自身は必死になつて不安を面に出さないようにするだろうが、そんな無理をしていても楽しいはずがない。真琴は弥生の性格を変えたいのではなく、彼女に心から楽しんでもらいたいのだ。

「ありがとう…」

弥生がにつこりと笑い返してくれる。

その時、ジャムとクリームが入つた小皿と一緒に、スコーンが運ばれてきた。ティーポットと温められたカップも並ぶ。

カップの中に金色の液体を満たし、その香りを口に含むとふと真琴は言った。

「ねえ、フォンちゃんも服を買わない？ もつともつと、可愛くな

れるよ」

その言葉に、恥ずかしそうに頬を赤らめながら、弥生は自分の服を見下ろした。

「……これ、……似合つてない……？」

慌てて、真琴は否定する。

「ううん…「ごめんね、そんなつもりで言つたんじゃないの。でも、ちょっと大人しいと思うし、勿体無いな、って」

「…でも…お金もかかるし…」

「とか言つて。本には幾らでも出すんでしょ？」

はにかみながら、小さく頷いてくる。そんな弥生に、真琴は少し真面目な表情をして言つた。

「あたしだつて、本に出すのはこいつよ~。でも、やっぱり、時には無駄遣いもしなくちゃ。

ううん、女の子なんだもん、沢山服を買つても無駄になんてならないんじやない？ それだけ可愛くなれたらいいのよ

「う…ん……」

なんと応えていいのか分からずにこる弥生に、真琴はふつと優しい目で続けていた。

「フォンちゃんね、きっとそれで損してると思うわ。だって、フォンちゃんに彼氏がないなんて、おかしいもん。あたしが男の子だったら、絶対、見逃さないんだけどなあ」

「そんな…」

これ以上無いくらい、赤くなつて俯いてしまう。そんな弥生の様子に小さく笑い声を上げながらも、真琴は本当にそう思つていた。本が好きで、地味な弥生は、少し男の子からすれば近付き難い存在なのだろう。絶対に、損してる…真琴にはそう思えて仕方が無かつた。

「ね？ 今度はフォンちゃんの買い物にしよう？」

「……うん…」

「やたつ…じゃあ、決まり。」

…ね、フォンちゃん。ちょっとだけなら、無理しても好いと思つ
よ

度を越せば毒にもなるだろ？が、真琴にそんなつもりは勿論無い。

真琴は、今の弥生を認め、尊敬しているのだから。

「うん…やつてみる。…でも、私…よく、知らないかい…」

「いいじゃない。流行なんて、気にしなくていいの…」

どうせ、お店には流行ってるものしかないんだから。ただ、お店の中を歩いて、自分に合つてると思つてたみたらいいのよ。あたしだつて、手伝つてあげる」

「うん…」

何だか、声だけでは一方的に話している氣もある。だが、真琴は弥生のちょっとした仕草や表情から、応えを返してもらつてているのだ。どんなことがあっても、強引に話を押し付けたりはしない。

逆に言えば、弥生が口にする言葉は、それだけ重いものだつた。そして、その言葉を含めた『言葉』を最も良く理解してくれるのも、真琴だつた。

柔らかな沈黙が、一人の間に入り込む。

真琴がその静寂にそつと身を浸していると、暫くして珍しく弥生が自分の方から話しかけてきた。

「あのね、マコちゃん…」

「ん？」

「…明日の夜…何か、用事ある…？」

「ううん、別に無いよ」

真琴が不思議そうな顔をすると、弥生は一呼吸置いてから囁いた。

「…あの、…その…お母さんが、一度、マコちゃんに会つてみたい、つて…」

だから、…えと、明日の夜…泊まりに来てくれる…？」

「もつちゅうとつー…そつ聞えさせ、フォンちゃんの家に行くのつて、あたし、初めてなんだ」

「…うん…」

弥生の方は、何度か真琴の家に行つたことがある。そのことも気になっていたのだろう。

確かめるように見上げてくるが、真琴が反対するはずもない。

「絶対、泊まりに行くわ」

「ありがとう…」

本当に嬉しそうに、にっこりと微笑んでいる。

「ねえ、じゃあ、何時に待ち合わせをしようか

「バスの時刻があるから…」

穏やかな喫茶店の暗がりへと、楽しげな少女達の声が広がっていく。

柔らかな光の滴はその心地好い音色に抱かれ、ティーカップの縁で弾けると、二人の笑顔をそつと照らし出していた。

終点の一つ手前の停留所で、バスを降りる。

先に降りて待っていた弥生に、真琴は感心したように言った。

「毎日、二十分も大変じゃない？」

「でも、仕方無いから…」

弥生が住んでいる新しい住宅地には、まだ中学校が開校していないのだ。既に、真新しい校舎は建っているのだが、生徒が思うほど集まらないらしい。そこで、弥生は毎日、真琴の通う中学校までバスで通学していた。

バスのターミナルから、スーパーの脇を通つて北へと向かう。

確かに、辺りにはまだ家は少なく、殆ど野草の密生した敷地しか見えてこない。しかも、その地面が剥き出しになつていて、更地は、弥生の家が近付くにつれて多くなつていくのだ。

雲一つ無い広い空が、茜色に染め上げられている。東の地平線には黒い青が沈殿し始めており、陽光にもそれを払う力は最早残されていなかつた。

「…あそこなの…」

まだ随分と離れているが、指差す先には、何ものにも遮られず新

しい家が見えている。

それにしても、本当にうら寂しい所だ。数十メートルの範囲に、片手で数えられるだけしか家が建っていないではないか。

弥生の家のすぐ傍には、将来を見越してか不釣合に大きな公園が造られているのだが、まだ、街灯も立てられていない。

何もかもが、中途半端なままなのだ。

「ほんと、何も無いんだね」

呆れて咳く真琴に、だが声にならない『言葉』は反対している。

「そうじゃないの？」

その問い合わせに、嬉しそうな笑顔を向けると、弥生は頷いた。

「…沢山の樹が近くにあって…鳥も、よく来てくれるもの…空も星も綺麗だし…」

「ふうん…」

真琴自身は、例えそれらのものがあったとしても、退屈してしまうだろう。だが、弥生らしいと言えば、そう言えるかも知れない。

「…おかしい？」

心配そうに見上げる弥生に、真琴は柔らかな微笑で応えていた。
「ううん。だつて、フオンちゃんにとつて、樹や鳥つて大切なんじょ？ だつたら、それが沢山あって喜んでも、別におかしくなんてないわよ。ただ、あたしには物足りないな、つて思うだけ。でもね、フオンちゃん。あたしだつて、鳥や星のことを知りたいと思ってるよ。意志が弱いから、やろうとしないだけでね」

「…私も…知ってるなんて言えな」…ただ、見たり聞いたりするのが…嬉しくて…」

「でも、それって、知つてることと同じだよ。ただ、知つてることが、名前とか知識じやないだけでね」

「…うん」

弥生の頬が、正直に喜びを映し出す。真琴も頷き返した時、二人は家の門に辿り着いていた。

そつと弥生が門を押し開けると、庭のある裏手から、ダダッ！

つと砂利を蹴散らす愛らしい足音が近付いてくる。田を向けると、不意に黒く小さな仔犬が飛び出し、弥生の足にじゅれついてきた。

「うわっ！ 可愛いいいー」

しゃがんで触ろうとするが、少し身を引いて健気に吠えてくる。真琴はそんな仕草に笑い声を上げると、急に仔犬を抱え上げてしまった。

嫌がつて身を捩つていた仔犬は、だが真琴が田の高さまで持ち上げると、突然大人しくなつてしまつ。

「この子、高い所が苦手なの…」

「そ、うなんだ」

恐怖のあまり硬直している仔犬を慌てて下ろすと、真琴は弥生を見上げた。

「この子、なんて名前なの？」

「ジョリー…」

自分の名前を呼ばれたことが分かつたのだろう、ジョリーは足下でファンツ！ と元気に声を上げた。

「意味はあるの？」

「うん…フランス語の『可愛い』をローマ字読みしたの…」

「へえ。こら、ジョリー！ あたしにも、返事しなさい」

「ファン！ ファンツ！」

とは応えてくれたものの、輝いた瞳が警戒している。それを見て真琴が笑つた時、家の玄関が開かれ、中から声が飛び出してきた。弥生、早く入つてもらひなさいよ

「お母さん…！」

慌てて立ち上ると、真琴は出でてきたおばさんに頭を下げた。

「野坂 真琴です。お邪魔してます」

「ようこそ。いつも弥生がお世話をなつててみたいで…」

「とんでもないです！ あたしこそ、助けてもらつてばかりです」

「…行こ、マコちゃん…」

どうも、恥ずかしいらしい。服の袖を持つて引っ張る弥生に従

つて、真琴はドアの方へと引き摺られていく。

「ゆっくりしていいって下さいね」

「はい」

通りすがりに軽く頭を下げるが、真琴は赤くなっている弥生に逆らわず、家中へと入つていった。

そのまま、一階まで上がつてしまつ。

案内された部屋で一番に目に付いたものは、想像に反して可愛らしいぬいぐるみの群れだつた。本の数はそれ程多くない。もつとも、隔週で五冊も借りていれば、部屋には必要無いだろう。

「…」じめん、散らかつたままで…

「全然、そんなことないじゃない」

実際、何処にも乱れた所などない。白木の机からベッド、棚や額にいたるまで、全てがあるべき所に収まつていてる感じだ。真琴は、今迄にこれほど調つた部屋を見たことが無かつた。

「…飲み物、持つてくるね…」

「うん、ありがとう」

真琴はカーペットの上に腰を下ろすと、弥生の小さな背中を見送つた。

この部屋を見てもそつだが、絶対、自分よりも弥生の方が可愛いと思つてしまつ。自分の好きなものがはつきりと分かつていて、きちんと考へるべきことは考へていて、優しくて、可愛くて。少し近寄り難い雰囲気さえ変えれば、男の子は放つておかないだろう。

自分のことなど考へもせず、真琴は本当に弥生が損をしていろと思つていた。

窓からは、広く西天が望める。金星は燃える夕焼けの帯の上で一際目映く煌きながら、そんな真琴の『自身』を自らの光で貫いていた。

「ん？」

何処か遠くで仔犬が吠えている気がして、不意に真琴は顔を上げた。

「あれ、ジョリーじゃない？」

立ち上がりつてカーテンの傍まで来てみると……間違いない。あの、可愛らしい仔犬の声だ。

「あつ……！ 開けないで……」

カーテンに手を掛けた真琴を見て、慌てて弥生が制していく。きょとんとした表情で振り向くと、弥生はそつと唇に指を押し当っていた。

（…？）

耳を澄ましてみると、甲高い、油を差していないらしい一匹の自転車の音が聞こえてくる。

キーッ、キーッ、と微かな音を立てるその自転車は、暫くすると弥生の家のすぐ前で、不意にブレーキをかけていた。

キキイイーッ！

派手な金属音が響き渡る。

続いて、何かを下ろしていくらしい。ガチャガチャと小さな音が聞こえてくると、真琴は尋ねるように弥生を見詰めた。

「……時々、来るの。……望遠鏡も見かけたから……覗かれたくなくて

……」

「それって、変質者じゃない！ 警察には連絡しないの？」

「だつて……別に、何をするわけでもないみたいだから……」

疑いだけでは、勿論、弥生に通報など出来ないだろう。

だが、だからと黙つて、黙つているのも……

「いつも、この近くに来るの？」

「……うん……公園とか、空き地に……」

少し、話してしまったことを後悔するような目で、弥生は真琴を見詰めていた。

そんな懸念に気付いてはいても、真琴には絶対許せることではなかつた。こんなこと、黙つて見過しすべきではない。

「…よしつ！ あたしが、直接会つてくる」

「え…？ ダメ、マコちゃん…そんなこと…」

慌てて止めようとする弥生の顔を、真琴は真剣な目で覗き込むと言つた。

「こんなこと、許しからダメ。いい気になつて、どんどん、つけ込まれるだけじゃない。」

「大丈夫よ。一人くらい、ビリビリだつてなるんだから」「でも…」

「フオンちゃんは待つといった方がいいわ。危ないから危ないと分かっているなら、行かないで欲しい。それが弥生の想いだつたが、真琴はとてもやめてくれそうにはない。」

随分と大きな決意が、弥生の心に勇気を吹き込んでくれる。

…成程、弥生は大人しく、臆病で、弱いかも知れない。だが、決して卑怯ではなかつた。

「…マコちゃんが行くなら…私も、行く…！」

「フオンちゃん！」

今度は、真琴の方が急いで弥生を止めようとしたが…彼女は、その言葉を声になる寸前で飲み込んでしまつた。

目の前の弥生の瞳は、とても強い光に輝いている…その静かな深みには、真琴にも変えられない重い『言葉』が宿つていた。

「…じゃあ、一緒に行こ」

「うん…！」

嬉しそうに、微笑みが零れ出す。真琴も笑つて頷くと、先になつて部屋を出た。

足音を忍ばせて、階下に向かつ。弥生の両親はもう寝入つたらしい。もう、真夜中なのだ。

（…でも、覗きをするには変な時間ね）

そんな思いが、ふと心を掠める。確かに、灯火の消えた部屋は、どうしたって覗けないだろ？

玄関まで来ると、弥生は下駄箱の隅に手を伸ばし、太い木の杖を取り出した。用心の為に、ずっと用意されていたものらしい。

そつと差し出されるその杖を、真琴は黙つたままで受け取る。

弥生自身は、その震える細い指に傘の柄を握んでいた。そして、続けて下駄箱の中から懐中電灯を取り出す。それを確かめてから、真琴は玄関の灯りを消し、先になつてドアを開けた。

涼やかな夜風が、二人の体を包み込む。

その瞬間、足下でカサッ！ と小さな音がした。

「……！」

びくつ！ と体を大きく揺らす弥生の前で、だが真琴は落ち着いて腰を低く屈めると囁いていた。

「静かに、ジョリー」

彼女自身にも信じられないことに、賢い仔犬は激しく尾を振るだけで少しも吠えようとはしなかった。

月はまだ昇っていないものの、遠くの街灯からの光によるものか、うつすらと闇の中に門が浮かんで見える。

静かに、静かに……だが、どうしても立ててしまつ自分の足音にびくつきながら、真琴はゆっくりと門に近付き、開けていた。

すぐ後ろに続く弥生が、門を閉めようとしている。振り向くその先にある手が激しく震えているのを見て、真琴はそつと自分の手を彼女のそれに重ねていた。

包み込んでくれる温もりに、少しだけ、弥生の体から緊張が夜に溶け出していく。

震えが小さくなつたことを確かめると、真琴はそのまま再び歩き始めていた。

どうやら、相手は家から一番離れた、公園の西の端にいるらしい。姿はまだ暗闇の中だが、時折赤いペンライトが光り、手足が暗がり

に浮かび上がっている。

そのまま、近付いていく。

真琴にしても、恐怖心が全く無いわけではない。だが、今は恐怖よりも怒りの方が勝っていたのだ。それに、相手は一人。少なくとも、いざとなれば弥生だけは逃げることが出来るだろう。

これ以上は静かに近寄れないと判断したところで、真琴は今返すつと握り締めていた手を引き寄せ、弥生の耳元に囁いた。

「いい？ 五つ数えたらライトで照らして」

微かに頷くのが分かる。

そこで弥生の手を放すと、真琴は一人で何歩か更に進んだ。

これで、襲われても弥生だけは護れる…

その時、不意に背後から目映い光の帯が進つた。同時に、真琴も杖を振り翳して怒鳴る。

「ちょっと！ そこで何してるのよっ！」

「え？ あっ、うわっ！」

まだ若い…と言つよりも、殆ど学生にしか見えない男が慌てて立ち上がりつている。

用心深く身構えている真琴の前で、だがその男は身を守らうともせず、すぐに手元のレリーズを切つていた。

「つたく、折角の写真が駄目になつたじゃないか」

腹立たしそうに振り返つたのは、殆どどころか、まるつきりの学生のようだ。自分よりも、少しだけ年上だろうか。大人びてはいても、高校生だろう。

「何よ！ どうせ他人の家を覗いてたんでしょう」

だが少しも気を抜かずに真琴が睨み付けると、その男の子は苦笑いしながら折り畳みの椅子に腰を落として言った。

「そう思われない為に、こんな真夜中に来てるんだけどな。真つ暗になつた部屋は、いくら望遠鏡でも覗けないよ」

「うつ…」

それは、つい先程、真琴自身が思つたことではないか。

びくびくしながら弥生が投げ掛けている揺れる光の中に見えるのは、優しげな男の子の姿だ。その落ち着いた口振りや仕草も、真琴のいきり立つた心を奇妙に静めてしまう。

「ずっと前から知っているような…懐かしい感じじたえする…」

「マコちやん…」

背中に届いた囁きに、真琴は抜きかけていた力を再び腕に入れ、詰問した。

「じゃ、じゃあ、何を撮つてたのよー！」

「木星だよ」

「え？」

平然と答えながら、男の子は西の空に輝く惑星を示している。

「…う、嘘ばっかり！ 木星なんて、そんなに長く露出しなくたつて撮れるでしょ」

「へえ、詳しいんだな」

心から感心している様子に、真琴は何だか怒り続けることが難しく思えてきた。

彼は、本当に星を撮つていただけなのかも知れ…

（…う、ううん！ まだ、まだダメよ）

そう。ここで気を緩めて、もしも襲われたらどうするのだ。

…だが、そんな風に気負つている真琴が拍子抜けするくらいに、男の子は無防備に笑い掛けていた。

優しい、温もりに満ちた笑顔…ずっと、待ち続けていたような…探していたものを見付けたみたいに、思わず真琴も笑みを浮かべてしまっていた。

「俺は、木星の衛星を撮ろうとしてたんだよ。確かに、それでも露出はそんなに長くしなくていいんだけどね」

流石に、真琴も木の杖を下ろしてしまった。すぐ傍まで近付いてくる弥生の気配を感じながら、語調を緩めて真琴は彼に尋ねていた。

「もつと、家から離れて撮れないの？ この子なんて、ずっと怯えてたのよ」

「じゃあ、君があの家に住んでたんだね」

自分の方に向けられた視線に、弥生は慌てて真琴の背に隠れてしまった。

その、幼い子どもを見守るような優しい目が、真琴にはとても印象的だった。

一度と、忘れられない気がする……

「いつも、ここに来るわけじゃないんだよ。ただ、西の空を見る時は、ここが一番開けてるからね。」

怖がらせてしまったのは、謝るよ。『ごめん』

立ち上がって頭を下げる男の子に、弥生は真っ赤になつて首を左右に振つていた。

「…あたしも謝るわ。折角の写真、ごめんなさい」

自分よりも年上だろうが、今更、丁寧な言葉遣いをするのもおかしいだらう。

同学年の男の子に対するように、だが、心から真琴は謝つていた。

「いいわ、仕方無いんだから」

気をよく手を振つて応えてくれる。顔を上げて、そんな彼と目が合つと、真琴は照れたように微笑んでいた。

少しの間、三人とも黙つてしまつ。

何だか、このまま弥生の家に戻るのも情けない気がするが、自分の間違いだったのだ。恥ずかしいが、背を向けるしかないだらう。背中に隠れてしまつている弥生も、遠慮がちに服の裾を引っ張つている。それに応えようと真琴が口を開き掛けた時……

「アーン、アーン」

突然、微かな猫の声が聞こえてきた。

すると、彼は自分のペンライトを点け、赤い光で辺りを探つて呼び掛け始めた。

「おいで、タマー！」

低い囁き声に応えて、純白の可愛らしい猫が光の中に現れる。毛並みも良く、頸には首輪がきちんと巻かれていた。

「あなたの猫なの？」

足下で丸くなっている猫の背を撫でながら、だが彼は頭を振った。「違うよ。」この公園で星を見ると、いつのまにか来るよくなつたんだ

「じゃあ、タマって……？」

「ああ、俺が勝手に付けたんだよ。猫って言えば、やつぱりタマだろ？」

「……なんか、単純」

呆れる真琴に、彼は楽しそうに笑っていた。だがその時、ふと彼は弥生を見て尋ねた。

「君は知らないのかい？ 多分、この近くで飼われてると思つんだ」自分に対する時よりも、彼の声が優しさに満ちている気がして……少し、真琴は口を尖らせてしまった。

「……あつ、……その……」

初めて会つた、しかも年上の男の子に尋ねられて、上手く弥生が答えられるはずもない。

そんな弥生の性格に気付いたのだろう。すぐに微笑むと、彼は言つた。

「ごめん。まだ会つたばかりなのに、無神経すぎたね」「大急ぎで、何度も首を振つて否定している。

そんな弥生に向けられている優しい瞳に、真琴は知らず苛立ちながら言つた。

「もう、帰る。フオンちゃん」

「そうか……じゃあな！」

背を向ける真琴に、彼は少し残念そうに声を掛けてくる。だが、そんな口振りすらも、真琴の心を一層波立たせるのだ。

弥生が、急いで追い掛けてきている。その微かな足音に、真琴は複雑な表情を浮かべていた……

……そう……真琴は、自分を偽るような人間ではない。……分かつているのだ。

……今、自分は弥生に嫉妬している、と……

普通の男の子からすれば、勝ち気で男っぽい自分よりも、愛らしく小柄な弥生の方に好意を抱いて当然だろう。偏見だが、それは真琴にだつて認められる想いだつた。

ただ……そう……『彼』がそんな風に想うことは、許せないので……何処の誰なのか……名前すら知らないのに……奇妙に、心にまとわりついてくる。

部屋に戻り、眠ることにしてからも……真琴には、闇の中の窓の向こうが気になつて仕方が無かつた。

とは言え、弥生の穏やかで微かな寝息と共に、暗闇は真琴の目に砂を撒き……

……やがて、彼女の意識も深い泉に沈み込んでいった。

翌朝、目を覚ました真琴が一番最初にしたことは、カーテンを開けて公園を見ることだつた。

だが、朝日によつて黄金色に縁取られた木々の向こう側には、当然ながら、誰の姿も見えていなかつた。それを認めた途端、大きな悲しみが胸中を締め付けてくる……

それからはあまり多くを語らず、真琴は仕度を整えると弥生と共にバス停に向かつた。

知られないように弥生と話をしているつもりなのだが、敏感な彼女は何かに気付いているようだつた。それでも尋ねてこない弥生に、真琴は正直にほつとしていた。

……まだ、自分の気持ちも理解出来ていないのだ。混沌と入り乱れるこの想いを整理したら、一番に彼女に報告しよう。

それが……そう、例え、真琴の望まない展開になるとしても……嫉妬したからと書いて、真琴にとつて弥生の大切さが変わつたわけではない……

始発のバスに乗り込み、弥生に手を振る。

ずっと見送つてくれる優しい彼女の姿は、そう、真琴にとつて何

よりも大切なもののだ。

弥生の姿も見えなくなり、二十分かけて家の近所へと戻つてくる。すぐにまだ誰も起きていない家に駆け込むと、そのまま部屋に入り、真琴はベッドに倒れ込んでいた。

考えや想いを纏めようとするのだが……複雑なパズルは、組み合わされることなく、真琴を苛立たせ……苦しめてくる。

絶望的な悲しみに身も心も震わせながら……いつしか、彼女の心は眠りの中へと逃げ込んでしまつていた……

「……ありがとひ、マコちゃん」

（……あつ……晃の、お兄ちゃん……）

ぬいぐるみの入った包みを手にして、寂しそうに笑つている。

……そんな顔、しないで……あたし……

「うつ……うつ……」

必死になつて抑えよつとするのに……涙が込み上げてくる。

……もつ……絶対に……逢えないのだ……

（いや……そんなの、いや……）

……『今』の自分が……

もう、戻れないのに……もう、戻れないのに……

「マコちゃん……ずっと、ずっと元気でいるんだよ。

僕は、マコちゃんの笑つた顔が好きなんだ……ほら、笑つて……

「……出来ないよおおーつ！」

（そ、う、よ、つ……！　出来るわけ、ないじやない……！）

わ、と泣き出して、自分は幼い体をぶつけていた。

……『彼』は、五年生とは思えないくらいに、しっかりと……力を込

めて、受け止めてくれる……

「……うそ……そう、だね……」

（……一……お兄ちゃん……）

泣いている…晃のお兄ちゃんが……

……ふっと、場面が変わる……

黒い。

何処までも、黒い幕が、目の前を塞いでいる。

「……？」

まだ、瞳が涙に濡れている。

……『夢』？ それとも……

不意に、幕の上に『何か』が揺れる。

次には、そこには一枚の便箋が浮かび上がっていた。

（あれは……）

『今』の自分には、分かつていた。

あれは……

だが、その瞬間、便箋の文字が闇に霞み始めた。
太く力強い線が、うつすらと淡く、紙の中へと溶け込んでしまつ

（い……いや……消えないで！）

何も、出来ない……こうして、ただ見ているだけ……

（どうして、どうしてよ……！）

どうして……！

……だが、真琴の悲鳴が広がる中……文字は全く失せてしまい……

……ただ、そこには純白の便箋が残っているだけだった……

（いやああーっ！）

悲痛な叫びが、響き渡る……

次の瞬間、真琴は自分の絶叫に飛び起きていた。
濡れた頬を拭いもせずに、机に駆け寄る。

そのまま力一杯引き出しを引くと、倒れる椅子になど構わず、真琴は震える指先で奥を探り始めた。

「…あつたあ…」

しつかりと、手には一通の手紙が握られている。

少しほつとして…だが、真琴はその中の便箋を確かめずにはいられなかつた。

ここ何年かは開いていない。…読めば、哭くに決まつていいのだ…それに、内容はもうすっかり覚えている。文字の一つ一つの形や、位置までも…

これこそ、一番大切な宝物なのだから…

折り畳まれている便箋を抜き出し…刹那、流石の真琴も躊躇つてしまつた。

…だが、その躊躇いも僅かな間だけだつた。

ゆつくりと、開いていく…

次には、真琴は力が抜けたように、ぺたんつ、と床に座り込んでしまつっていた。

見慣れた文字が、確かに、消えもせず残つていたのだ。

極度の緊張と恐怖から開放され、また少し、真琴は涙を零していた。

…何故、最近、『彼』のことばかり想い出してしまつのだらう

…もう、泣くことなんて、ここ何年も無かつた氣がするのに…

(晃のお兄ちゃん…)

逢いたい…逢つて、今の気持ちを伝えたい…

大好きな友達を妬むような…そんな、醜い自分を…

…だが、『彼』は受け入れてくれるだらうか…

(う、ううん…もう…どんなことをしたつて…)

そう、遭えるはずがないのだ…

何度も目を擦ると、真琴は久し振りにその手紙を読み始めた。

マ「ちゅやん、きゅうに引っ越すことになつて、『めん。でも、

お父さんの

仕事のためだし、まだ僕には一人で残ることなんてできないからね。

大好きな友達や家や、学校やお店や、景色やお祭りや……もつともつと

たくさんるものをおじていかなくちゃいけないんだ。

そして、マコちゃんもね。

僕にとって、マコちゃんは本当のいわうとみたいに、ううう、もつと本當

のこもうじがこたとしても、それよりもつと大切だつたと思う。もつと、このマンションを思い出した時、そのどんな場面にだつて、マコ

ちゃんが入つてくるはずだよ。

笑つて、花かざりをくれるマコちゃん。

怒つて、追いかけてくるマコちゃん。

ボールを川に落として泣き出してくるマコちゃん。

はにかんで笑いかけてくれるマコちゃん。

僕はね、マコちゃんの笑つた顔が、とつても好きだつたんだ。やわらかくてね、そつとはにかんでくれた笑顔が、いちばんかわいがつ

たよ。

だから、これからもずっと、マコちゃんには笑つていてほしい。ずっと、ずっと、大好きだつた笑顔でいてほしいんだ。

元氣で、明るくて、みんなを引っ張つていくよ。そして、優しくて。

自分でも何が言いたいのかよく分からぬけど、だから、マコちゃんに

は今までいてほしいんだ。

なんだか、お願ひばかりしてるけど、本当に、そう思つてる。もう会えなくなるけど、ぜつたい、マコちゃんのことは忘れな

いよ。

今まで、本当に、ありがとう。

『めんね、ママちやん。』

(お兄ちやん…)

五年生になつたばかりの『彼』が、必死に頑張つて書いてくれたのだ。

その取り留めの無い想いが、だがそれだけ一層、強く真琴には伝わつてくる。

「…晃のお兄ちやん…あたしね、頑張つてるんだよ……」

だが、どんどん変わつてきて、いるのが分かる。

変わりたくないなんて、ないのに…

真琴は床に座り込んだまま、止め処無く流れれる涙も氣にせず、ずっと手紙を見詰め続けていた。

『時間』は他の全てと変わらず、ゆくゆくと彼女の周りを通り過ぎてこぐ。

ゆくゆくこと…ゆくゆくこと…

真琴が泊まりに来てから三日が過ぎた日の朝、弥生は彼女からの電話で急いで家を飛び出していた。

中学校で会いたいと言つのだ。どうも、あの日以来、真琴の様子がおかしくて心配だった弥生にとって、反対するはずのない誘いだつた。

もつと自分に勇気があれば、もつと早く会えたかも知れないのだが……

足早になつて、バス停に向かつ。待ち合わせの時間にはまだ随分とあるのだが、どうせ家に居ても落ち着くはずがないのだ。
(マコちゃん……どうしたんだろ……)

弥生には、何故、彼女が時々黙り込んでしまうのか分からなかつた。電話の中の沈黙も、少し前なら『言葉』で満ち溢れていたのに……今朝の電話の沈黙には、冷たさと混乱しか弥生には感じられなかつた。

(……わたしの、せい……?)

思い当たる原因は無い。だが、自分で気付いていないだけかも知れないのだ……

どうしても、気分が沈んでしまう。こんなにも空は青く、地上は光と影でくっきりと塗り分けられていても……弥生の心の中は、台風の前の空のように、灰色に霞み、ざわついていた。

バス停の近くになれば、家もそれなりに立ち並んでいる。まだ新しい庭先に植えられた木々の葉が、風に揺れて歩道に光の粒を撒いている。

自らもその泡を纏いながら駆けている弥生の目の前に、突然、純白の猫が飛び出してきた。

「きや……」

小さく叫んで、立ち止まる。そんな弥生を見上げて、小さな猫は

可愛く口を開いていた。

「…アーン」

「…タマ?」

あの日の夜、公園で会った男の子がそつぽんでいた猫に、よく似ている。…いや、首輪や容姿から見て、恐らくタマ自身だらう。

「…この辺りに、住んでるの…?」

そつと囁く優しい声に、再び小さく声を上げる。

だが、次の瞬間、タマはすぐ傍の路地へと走り込んでしまった。

「あつ…」

慌てて、その後を追いかける。角を曲がって、道に飛び込んだ瞬間…

弥生は、一人の男の子の目を真っ直ぐ受け止めてしまっていた。自分と同じ年頃のその男の子の足下で、タマがじゅれついている。だが、そんなことに気付く余裕も無く、弥生は真赤になると体を震わせてしまった。

夢中になつて駆け込んだ後で、今更何処かに身を隠すわけにもいかない。今まで会つたこともない男の子にじつと見詰められて、弥生はどうすればいいのか分からず、泣きそうになつていて。

(マコちゃん…どうしよう…)

思わず助けを求めてしまつが、真琴が来てくれるはずもない。

「…お前か？ ブランを変な名前で呼んでるのは」

その乱暴な口調に、びくつ！ と体を震わせてしまつ。

(だつて…だつて…)

自分は、タマと言つ名前しか知らなかつたのだ…

泣きそうな顔で、俯いてしまつ。

そんな弥生に気付いているのかどうか…男の子はその場でしゃがみ込むと、猫をそつと抱き上げていた。

「なあ、ブラン？ お前も、大変だな。今度はタマだつてさ

「アーン」

立ち上がりつて、近付いてくる。その足音に気付いて、逃げ出そう

と思つたが……最早、弥生の足は恐怖で少しも動いてはくれなかつた。

きゅつと、目を閉じてしまつ……

「ほら、橘。抱いてみるか？」

思いがけない言葉に、流石の弥生も思わず驚いて顔を上げてしまつた。

すぐ目の前で、彼が小さく笑いながらブランを押し付けてくる……その柔らかく温かな毛並みを、弥生は知らず受け取つていた。

「……あの……名前……」

（どうして……）

どうして、彼は自分の名前を知つてゐるのだろう。弥生の方は、全く彼を知らないのだ。

彼女の微かに震える囁きに、彼は少し赤くなりながら、にやつと笑うと片目を瞑つてみせた。

「さあ、どうしてだろ？」

そう言われても、弥生には見当もつかない。

じつと問いかけてくる弥生の真剣な眼差しに、彼は照れたように小さな猫の頭を軽く叩きながら言つた。

「こいつ、俺の家じやブラン、って呼んでるんだ。だけど、すぐ何処にでも行つてしまふから、あちこちで違う名前を貰つてゐるらしい。タマも、その一つさ」

違う。そんなことを、訊いたのではない。

真つ赤になりながらも、目を離さない弥生に、彼は根負けして白状した。

「……本当は、ずっと前から気付いてたんだ。ほら、毎朝、バスで学校に行つてるだろ？だから、その……可愛いな、って。家がすぐに分かつたから、表札を読んで……だけど、別に変なことはしてないよ

「……！」

自分でも、ブラウスの下まで赤くなつてゐるのが分かる。顔を上げていられなくて……思わず、きゅつ！ とブランの小さな体を抱き

締めてしまつていた。

「ア～ンッ！」

少し、むずがつてゐる。だが、どうしてもこの胸の鼓動を聞かれたくなかつた弥生は、ブランを放そうとはしなかつた。

今まで、こんな風に言われたことが無かつたのだ。自分は大人しくて、小さな子どもみたいだし……他の人と、話なんて全く出来ない。ましてや、男の子と話すことなど、弥生に出来るはずもないのだ。そんな自分を可愛いと思つてくれる人がいるなんて、弥生は思つてもみなかつた。前の買い物で真琴にからかわれたが、あれだつて、冗談だとばかり思つていたのだ。

……突然のことで、どうすればいいのか、分からない。出来るなら足が動くなら、ここからすぐにでも逃げ出したい……

そんな二人の沈黙の間に、不意にバス特有の重いエンジン音が割り込んでくる。

はつと顔を上げる弥生に、彼は急いでブランに手を掛けると言つた。

「急ぐんだな？」

大きく、頷く。そんな弥生に頷き返すと、ブランを受け取つて彼は続けた。

「俺、たかおか高岳たかおか 雷あずま。また、会おうな」

どんな返事をすればいいのか、分からない。

だが、自分でも驚いたことに、弥生はしつかりと口を開いていた。

「……うん」

ぱつ！ と駆け出してしまう。

背中に愛らしい猫の鳴き声を聞きながら、弥生はバス停へと曲がり、走り出そうとしていたバスに慌てて飛び乗つていた。

荒い息の下、定期券を見せる。席に座つてゆつくりと落着きを取り戻した時、改めて、弥生は恥ずかしそうに頬を染めてしまつた。（どうしよう……どうしよう……）

そればかりが、頭を巡る。

泣きそうにならながら、弥生はずっと助けを求め続けていた……

「……？ フォンちゃん？」

遠くからとぼとぼと歩いてくる弥生の様子に、真琴は慌てて立ち上がっていた。

ずっと悩み苦しんでいたことなど、思わず忘れてしまつ……

「……マコちゃん……」

真琴の声に気付き、弥生が顔を上げる。次の瞬間、弥生は走り出すと、力一杯、真琴に抱きついていた。

わつ、と泣き声が进る。

そんな弥生を、だが少しだけ落ち着いて、真琴は受け止めていた。ついさっきまで、今日は自分のことを話すのだとばかり思つていたのだが……

「……フォンちゃん……」

小さな体を、力を込めて抱き締める。

柔らかな笑みを頬に映しながら、真琴は優しく弥生の髪に顔を埋めていた。

首の後ろで束ねた髪を、風が悪戯をして持ち上げる。蝉は近くの校舎の壁で騒ぎ立て、陽光も無遠慮に真琴の背中に僅かな影を焼き付けていた。

それでもじつと、真琴は待ち続けていた。

弥生の苦しげな泣き声だけに耳を澄ませ、ずっと、待ち続けていた……

……どれだけの時間が流れたのだろう。

漸く弥生の涙も頬を濡らすことをやめ、僅かに肩だけが、まだ上下に震えている。

「……大丈夫？」

「いくんつ、と小さな頭が頷く。

そこで初めて、真琴はきょろきょろと辺りを見回すと、校舎の陰にあるベンチを見付けて言った。

「ほー、あのベンチに座る？」

ゆづくと、俯いたままの弥生を胸元から離す。

そつと彼女の体を抱きながら、真琴は並木に隠れるベンチの方へと歩き始めた。

先に、弥生を座らせる。

少し間を置いてその横に自分も腰掛けると、真琴は暫く遠くの景色をぼんやりと見詰めていた。

優しい『時間』が、二人を包み込む。沈黙は温かな腕で一人を抱き締め、そつと囁いてくれていた。

その囁き声が、刹那、時を知らせる。

その時になつて初めて、真琴は弥生に顔を向け、尋ねていた。

「どうしたの？」

そんな真琴の言葉に押し出されるように、弥生は先程の出来事を話し始めていた。

何度も途中で詰まりながら…時には涙を浮かべながら、それでも最後まで話し終える。

全てを聞いてしまつと、暫く黙り込んでから、真琴は弥生に笑い掛けていた。

「良かつたじゃない、フオンちゃん」

「マコちゃん…」

全然、良くなんかない…そう言いたげな弥生に、真琴は少し真面目な顔になると続けて言った。

「折角、好きになつてもらつたんだから。そのチャンスを、しつかり掴まないとダメよ。

フオンちゃんだつて、又、一回くらには会つてもいいな、つて思つてるんでしょ？」

「…えつと…その…」

正直に言えば、弥生にも分からぬのだ。

ただ、自分でも赤くなるくらいには、彼のことを気にしていると気付いている。

「ね？ いいじゃない。気に入らなかったら、それはそれで、もう会わなかつたらいいだけだよ。大丈夫。断る時には、あたしも一緒にいてあげるから」

「…………うん…………」

何だか、少しだけ落ち着いて考えられる気がする。バスに乗つている間は思つてもいなかつた方向に、心は傾いているのだが…「ねえ、フォンちゃん。今度、新しい服を買いに行こ？ 絶対、無駄遣いじゃないことが分かるから。その雷つて子、びっくりするわよ」

「そんな…………」

ますます顔を赤らめると、弥生ははにかんで俯いてしまつた。

だが…………心の隅で、少し、期待している部分がある…………

一度くらいなら…又、会つてもいいかな…………少しづつ微笑を取り戻している弥生を見ながら、ふつ…と真琴は厳しい表情を面に浮かべていた。

「…………？」

その沈黙に気付いて、弥生が目を上げる。

澄んだ美しい瞳を迎えられずに……思わず、真琴は視線を逸らせてしまつた……

「…………フォンちゃん、ごめん…………」

…………あたしつつて、なんて酷い人間なんだろ？ ね…………「え？」

心配と戸惑いで、自分の想いなど忘れてしまつ。

そんな弥生の前で、真琴は苦しそうに言葉を押し出していた。

「あたし……フォンちゃんの話を聞いて……本当は、ほつとしてるんだ

あ…………

「マコちゃん…………」

「こ」の前、公園で星を撮つてた人がいたじゃない？ ……あたし、あ

の人のことがずっと気になつて……

……若しかしたら、『好き』になつちゃつたかも知れないの……名前も、年齢も、学校も知らないんだけどね……

「……！」

思いもしなかつた告白に、弥生は何と言えばいいのかわからなかつた。

……しかも、寂しそうに続いた言葉は、弥生を一層、驚かせるものだつた。

「……でも……ね。あの人、フォンちゃんのことを気にしてたみたいで……ずっと声も優しかつたし、笑顔だつて柔らかくて……

フォンちゃんとあたしなら、……やっぱり、みんな、フォンちゃんを選んでも当たり前だ、つて……

……でも……でも、ね……ごめんね、フォンちゃん……あたし、あの人だけは取られたくないくて……

あたし……ね……フォンちゃんに、妬いてたんだよ……」「……

いつも明るくて元気に充ちている瞳が、僅かに濡れている。

自信と優しさに溢れていた声が震えるのを、弥生は初めて聞いた。

「ごめんね……あたし、酷い奴だよね……」

きゅっ！ と唇を結んでいる。泣きたいのを、必死になつて我慢しているのだ……

そんな真琴の姿に、弥生は胸の奥を冷たい氷の手で握り潰された気がした。

「……マコちゃん……ごめんなさい……私が気付いていれば……」

こんなにも、真琴の心を苦しめずに済んだのだ……

涙を流す弥生の呟きに、だが激しく真琴は頭を振つていた。

「謝つたり、しないで！ あたし、自分を赦しそうになつちやう……」

両手を膝の上で強く握り締め、瞳を閉じる真琴に……弥生はそつと、

囁いた。

「……赦してあげて……マコちゃん……」

自分でも驚いてしまうほど、静かに、そして力強く言葉を紡ぐ……

「……そんな風に、自分を責めないで仕方無いんだもの……」

「……」

「……本当に、『』めんね。私、全然気付かなくて……」

「……ありがと、『』みちゃん。話してくれて、私、嬉しい……」

「……ありがと、……こつも、私のこと、きちんと考えてくれて……」

「……」

「……『本當』に、マ『』ちやんと友達になれて良かった……」

「……ありがと、……」

ゆつくつと、一言一言を区切りながら、沈黙と共に囁き続ける。正直に話してくれた真琴の言葉が、ショックでなかつたとは言えない。

だが、それだけ真剣に悩んで……そして、告白してくれたのだ。弥生にとって、そのことは何にもまして嬉しいことだった。

そんな気持ちを伝えたい。

もつと、沢山の『言葉』で……

今まで、こんなにも長く話したことは無い。だが、どれだけ囁いても、弥生には少なく思えるのだ。

「……フォンちゃん……」

目を開けるその先には、『全て』を赦し受け止めてくれる優しい微笑みが揺れている。

真琴は、最早抑えきれずに、そんな弥生の肩に顔を押し付けていた。

悲しみに満ちた想いが、夏の陽光に溶け出していく。光の泡に囲まれながら、初めて見る真琴の涙を、弥生はしっかりと抱き締めていた……

「折角買つたのに、着ないの？」

いつものように右手の脇道に折れながら、真琴は弥生を振り返つていた。

「うん…まだ、ダメ…」

照れたように、本の入った鞄を抱き締める。そんな弥生の仕草に、真琴は明るい笑い声を上げていた。

昨日、真琴に服を選んでもらつたのだが、弥生には少し明るすぎる気がするのだ。スカートも、短く思える。確かに可愛いと思つたが、どうしても、着るには決意が必要だった。

「そうよね。どうせなら、初めてのデートに着たほうがいいわ」

「アーチャーん…！」

どうしようもないくらいに、自分が赤くなっていることが分かる。あの日以来、雷とは会つていながら…そのことを喜んでいいのか悲しんでいいのか…未だに、弥生には自分の心が分からずについた。

行く手では、見慣れた文具店が夏の光に輝いている。

真琴は少しだけ足を早めると、その『シルヴィー』の店先で立ち止まつた。

思った通り、一週間前とは写真が変わつていて。今度吊り下げられたのは、散開星団だ。

「…M44？」

写真の白文字を、小さな声で読み上げている。そんな弥生に、真琴はパネルから田も逸らさずに声だけで頷いていた。

「うん、プレセペだよ…本当、綺麗だよねえ」

ぽんやつと丸みのある光の粒が、白黒の世界に浮かび上がつている。

望遠レンズによる、頃合の拡大率で、プレセペは上手く星団らしく見えるように仕上げられていた。

一つ一つの星を辿つていいくと、奥行きを感じてくるから不思議だ。日映い光が脳天に降り注ぎ、蝉の声と熱気に満ちる大気の中で、真琴の心は夜の静けさを彷徨つていた。

カラソッ…

小さな鐘の音が、随分と遠くで聞こえる。

「いらっしゃい。丁度今ね、あなた達の話をしていたところなのよ」服の裾を引く弥生の『言葉』と店先からの声で、真琴は我に返るか慌てて振り向いていた。

店のおばさんが、優しく手招いてくれている。

遠慮などせず、真琴は素直にその招きに従つていた。

「なんだ、君達のことだったのか」

店の中に足を踏み入れた途端、飛び出してきた声に、思わず歩みを止めてしまう。

あれは…あの声は…

(でも、まさか…ね)

少し高鳴る鼓動を抑えて、店の奥を見てみると…

…最早、間違いなかつた。弥生の家の前の公園で、あの夜出逢つた『彼』なのだ。

なりたくもないのに、どうしても頬の辺りが赤くなつて熱を帯びてくる。

そんな真琴の様子に気付いているのかいないのか、『彼』はおばさんに話し掛けていた。

「ほら、変質者に間違えられた時、僕を棒で殴りうつしてはいたのが彼女なんですよ」

「まあ、そうだったの」

「それにしても、まさか中学生だとは思わなかつたよ。あの勢いは、てつくり高校生だと思っていたんだ」

そんなことを言つて、にこりと笑い掛けてくる。

思いがけない展開に、真琴は珍しく言葉を失つていた。

『何か』を言いたいのだが…一体、何を言えばいいのだろう…

「これ、見るかい？ ちょっと、自信作なんだよ」

自らパネルを下ろして、渡してくれる。

震える手でその作品を受け取りながら、真琴は不意に怒ったよう

に咳いていた。

「……するによ……」

「え？」

「するよ、って言ったの！」

きよとんとしている『彼』に向かって、火照る頬のまま、真琴は怒鳴っていた。

「あたし、家庭教師をしている人だ、って……だから、大学生なのかな、って……

……あたし、あなたに逢いたかったけど……でも、こんな形でなんて思わなかつたわよ！」

自分でも、何を言つているのか分からぬ。だが、冷静になつたところで、やはり何も伝えられなかつただろう。必要なのは文脈ではなく、『言葉』だつた。

「マコちゃん……」

心配そうな囁き声に、真琴は急に黙り込んでしまう。

『シルヴィー』のおばさんがここにこと見守る中で、『彼』はふわっと柔らかな笑みを浮かべると、手を差し出してきた。

「突然だつたことは、確かだね。だけど、『偶然』でもいいじゃないか。又、こうして逢えたんだから。

……俺も、もう一度、君と逢いたかったんだよ」

「……！」

流石に、何も言えずに俯いてしまつ。真つ直ぐに見詰めることなど、出来ない。

ましてや、手を握るなど……

思わず、強くパネルを抱き締めてしまつ。

だが……ここで逃げてしまえば、後悔することになるかも知れない

……そつと……僅かに、手を前に出す。

その細い指先を、『彼』はさつと握り締めてくれた。

「……ありがと」

掠れる声で、真琴は小さく咳いていた。

静かに、沈黙が流れ込んでくる。その温かな流れの中で、『シリ
ヴィー』のおばさんは真琴に話しかけていた。

「彼はね、私の知り合いの子なの。高一だけど、英語だけは凄く上
手だから、娘の家庭教師になつてもらつたのよ。

ごめんなさい、私がもつと詳しく話していればよかつたわね」

「そんなこと、ありません！」

慌てて、真琴は頭を振つていた。一つに束ねられた髪が、左右に
大きく揺れる。

「そうですよ。おばさんの御蔭で、こんな『偶然』に巡り会えたん
ですか？」

「『偶然』なんてもんじやないわ！　あたし、まだ死にそつなくら
い心臓がどきどきしてるんだから」「

「う～ん、そこまで言われると、やつぱり照れてしまつなか
本当に少し赤くなりながら、『彼』が苦笑している。

その様子に、真琴も一層頬を上気させてしまった。

そう、いつのまにか自分の想いを、それも殆どストレートに『彼』
に伝えてしまつてはいるではないか。

何もかもが思つてもみなかつた方向に流れ始めていたことに気付
いて、真琴は泣きそうになつていて。

自分が、これほどまでも泣き虫だと思わなかつたが……『彼』に関
することでは、自然と涙も込み上げてくる。

目頭が熱くなつてくるのを感じ、真琴は大きく深呼吸をしていた。
カラ～ン、カラ～ンッ！

不意に、店のドアが勢いよく開かれる。

驚いて恥じらいも涙も飲み込んでしまつた真琴の視野に、次の瞬
間、小さな女の子が飛び込んできた。

…「この子が、教え子の、小学三年生の女の子なのだ。」
女の子は、嬉しそうに叫びながら『彼』の腕の中に駆け込んでいる。

「アキラのお兄ちゃんっ！」

「…え？ …あっ、…………ええっ！」

（晃のお兄ちゃん？）

不意に、自分自身が小学三年生に戻ってしまった気がする。
そんな真琴を、『彼』は…アキラはきょとんとした表情で見上げていた。

（まさか……）

いや、そんなことはあり得ない。そんな『偶然』など、起じるはずが無いのだ。

…だが…心の隅で少しだけ期待している自分に、真琴は気が付いていた。

もしかしたら…

「今日はね、ちゃんと勉強したんだよ？ 偉い？」

「そうか、偉いぞ」

くしゃくしゃつ、と頭を撫でてもらつている。

自分も、晃のお兄ちゃんには、よく同じことをしてもらつたものだ…

自分の中の晃と、田の前のアキラを深く重ね合わせてみると、田の前のアキラを深く重ね合わせてみると、真琴は驚きと恐れを感じてしまつていた。

…違う…自分は、『彼』を、『過去』と同じ名前だから好きになつたのではない…

…こんな気持ちのままでは、『彼』を傷付けてしまつ…

…そう…真琴は、田の前に居る『アキラ』が『好き』なのだ…

…
「ほら、先に上がりつて待つてくれないかな。お兄ちゃんは、もう少しこの人達と話をしているからね」

「…だあれ？ この人」

今、初めて気が付いたように、女の子が真琴を振り返つてくる。その小さな肩を優しく抱きながら、アキラは困った顔で応えていた。

「お兄ちゃんも、名前は知らないんだ。でも、大事な人だから、悪戯しちゃダメだよ」

「ええ～っ！ お兄ちゃん、恋人がいたのぉ？」

がっかりしている女の子の言葉に、真琴もアキラも素直に赤くなつてしまつ。弥生までもが、釣られて俯いてしまつっていた。

「でも、美咲ちゃんのこと好きだからね」

「うん！」

ぱつ、と腕の中から飛び出していく。

店の奥まで行くと、一度振り返り、美咲はアキラに向かつて大きく手を振つた。

『彼』も、手を振り返している。その応えに安心すると、女の子はそこにあつたドアを抜けて見えなくなつてしまつた。

「…えっと…」

その後ろ姿を見届けた後、『彼』は真琴に視線を戻すと、少し息を吸い込んで、言った。

「恋についてに、つて言つたら怒られるかも知れないな。でも、どうだろう。明後日、あの住宅地で又写真を撮るつもりなんだ。場所は公園じゃないんだけど、もしよかつたら、一緒に星でも見ないか？」

「いいの？ あたし、何も知らないわよ」

小さく呟く真琴に、アキラは笑い出していた。

「星は、見るだけでいいものだよ。何も知る必要なんて無いし、知ることなんて出来ないものなんだからね」

「…うん！ ジャあ、お願ひ」

「君もどうかな？」

アキラが自分に誘い掛けてくるのを、弥生は勇気を出して頭を振つて答えていた。

やはり、まだ口を開くことは弥生には難しい。変質者扱いにしてしまったことも、彼女の人見知りに輪をかけてしまっていた。

「遠慮はいらないよ？」

「…………ううん……いい……」

やつと、それだけを押し出し、弥生は真琴の腕をぎゅっと握り締めていた。

真琴はパネルを小脇に抱えると、その震える指先に手を重ねる。

「そりゃ……じゃあ、明後日の二十時に、例の公園で」

「うん、分かった」

しつかりと頷く真琴に笑みを返すと、『彼』は奥のドアに向かおうとした。

「あっ、あたし、野坂 真琴！ 今度逢つたら、ちやんと名前で呼んでよね！」

「…………今、すぐにでもいいよ。ありがとう、真琴」

ドアの前で一瞬足を止めた後、アキラは顔だけを後ろに向けて片目を瞑つてみせた。

だが……何かしら、その面に大きなショックの痕を認めて……

ふと、真琴は息を止めてしまつ……

その間隙を縫つて、『彼』はドアの向こうへと消えていつてしまつた。

天を駆ける金色の風は、複雑な影絵を薄暗い光の幕に描き込んでいく。その葉陰は幾重にも重なり、真琴の心を柔らかく、そつと抱き締めていた……

「やあ！ 来てくれたんだな」

柔らかい宵闇の中で、アキラが嬉しそうに手を振つている。

真琴も弥生から借りたバスケットを持ち上げて応えると、公園の中に入ろうとした。

だが、『彼』は自転車を留めた公園の入り口に向かつている。

「あ、そつか。今日は違うんだっけ」

慌てて公園を出でている真琴に、アキラは楽しそうに笑い声を上げた。

「すぐに忘れるんだな。まあ、今夜のことを覚えていてくれただけでも、よしとするか」

「忘れたりしないわよー。朝から、フォンちゃんの家に来てたんだから」

望遠鏡や、三脚を括り付けた自転車を押して、『彼』は東に向かつて歩き始める。

どうやら、油を注したらしい。以前の、耳障りな錆びた音が聞こえない。

そんな些細なことを考えながら、『彼』が背負う大きなリュックに隠れるように、真琴は少しうつくりと付いていた。

「フォンちゃん、って言つのは変な呼び名だな」

歩調を緩めて、振り返ってくれる。

顔が火照るのを必死になつて抑えながら、仕方無く、真琴は横に並んで歩き始めた。

「本当は、フォーンって発音するみたいよ

「成程、『仔鹿』か。ぴったりじゃないか」

少し驚いたが、そう言えば『彼』は高一ながら家庭教師を請われるくらいに、英語が得意だつたのだ。

「アキラ君もそう思うでしょ？ あたしが付けてあげたのよ」
年上なのだが、今更、丁寧に話しかけるのも不自然だらう。

それに、アキラも全く気にしていないようだ。

「ふうん。で、その名付け親の為に、彼女は一生懸命手伝ってくれたんだな」

悪戯っぽく笑いながら、『彼』が手にしているバスケットを指差していく。

少しばみ出している水筒の蓋が薄明かりに煌き、被せた布の下からは甘いクッキーの香りが立ち上つている。

「失礼ね！ あたしが作ったのよ？」

唇を尖らせると、ぷいっ！ と横を向く。

そんな真琴の仕草に快い笑い声を上げると、アキラは片手を瞑つて続けていた。

「本当かい？ ほらほら、正直に白状しり」

「…本当はね。随分、手伝つてもらつたんだあ～」

大袈裟に、溜息をついてみせる。

次の瞬間、二人は顔を見合わせると噴き出していた。

実際のところ、真琴の家にはオープンなど無いのだ。今迄に、料理ならともかく、菓子類など作ろうともしたことの無い真琴にとつて、今日は本当に大変な一日だった。

弥生に手伝つてもらつたとは言え、この手の中にあるものは、実は三回目の作品だ。

「何か、温かいものもいるんじやないか、つて。この水筒にも、紅茶を入れてくれたのよ」

「へえ、随分、気の利く子だね」

『彼』の言葉に、真琴は心から嬉しそうに頷いていた。

ふと、そんな自分に向けられる柔らかく優しい瞳に気付いて、真琴は頬を赤らめると、大急ぎで顔を前に向けてしまった。

沈黙が、穏やかに横たわる。だが、その静寂の、なんて温かなことだろう。

目に見えるほどの『言葉』が、自分の胸の中に入り込んでくるのを、真琴は確かに感じ取つていた。

少しづつ、藍色の天蓋に星が生まれていく。

厳しさの失せた夏の大気に抱かれながら、真琴は軽く、深呼吸をしていた。

「…あたしね、今、とつてもわくわくしてゐる。ねえ、今日は何を撮るつもりなの？」

「今日はM-13だよ。さあ、ここだ」

そう言つて急に自転車を止めると、『彼』は荷物を解き始めた。

その横で周りを見渡してみるのだが、この辺りは整地した区画が階段状に並んでいるだけらしい。所々に黒々とした穴が見えているのは、コンクリートの車庫だらうか。

「…」んな、道の真ん中で見るの？」

「まさか！ 家は無いけど、車は通るかも知れないからな。 そこの中に入つて行くんだよ」

整地しているとは言え、勿論、区画の中は丈の低い草が一面に生い茂つている。

アキラの指先に従つてそのままそこへ入つてこいつとするとい、『

彼』は落ち着いた声で真琴を呼び止めた。

「ちょっと待つてろよ。

：ほら、これに火を点けてくれないか

見れば、蚊取り線香を二つ手にしている。

「あ、そうよね。でも、何だか夢の無い香りじゃない？」

『彼』から借りたライターで灯す赤い炎と独特の香りに、真琴は少し残念そうに言った。

そんな言葉に、アキラが笑い声を上げている。

「夢を見たいなら、少しは代償を払わないとな」

力を込めて屈折望遠鏡と三脚とを担ぎ上げる『彼』の前に立つて、真琴は手にした懐中電灯を頼りに草の中へと分け入つた。

（フォンちゃんの言つた通りだわ。パンツにしてよかつた）

耳障りな羽音に、眉を顰めてしまう。

以前、公園で逢つた時には気にする余裕も無かつたが、確かに今、自分達は虫が支配する世界に入り込んでいるのだ。

「もうちょっと右だよ。ほら、そこが少し空いてるだらう~」

そう言いながら、今度はアキラが先になつて歩き出す。

やがて、田的の場所に辿り着いたのだらう。荷を下ろし始めている。

そこは、空き地とも呼べないくらいに狭い空間だ。

『彼』は慣れた手つきで三脚を据えると、リュックを開いて折り

置み式の椅子を取り出し、渡してくれた。

「え？ でも、アキラ君はどうするの？」

「心配いらな『』よ。もう一つあるから」

「ふうん。アキラ君も、よく気が利くのね」

遠慮無く受け取る真琴に、アキラは苦笑いしながら言つた。

「俺は、フォンちゃんつて言う子とは違つて、体験から学んだものばかりだよ。蚊取り線香だつてそつそ」

「虫除けスプレーなんかは？」

「あつ、俺、その類は苦手なんだ。それに、そんな風に自分の身体を変えてまで、自然を拒むつもりもないしね。こんな所に来ておいで、虫達に怒るのは本末転倒もいいところだよ。ここは、彼等の領域なんだ。俺達の方が侵入者になるんだからな」

何気無くそう言いながら、望遠鏡を組み立てているアキラに、真琴は思わず噴き出してしまつた。

「凄い考え方ね！」

「変かな？」

その問い掛けが、とても真剣に聞こえる。

真琴はゆつくり首を左右に振ると、そつと、静かに言つた。

「つうん。あたし、その考え方、好きよ

「ありがとう」

光の輪の中に、嬉しそうな笑顔が浮かぶ。

真琴も、そんな『彼』に柔らかな笑みを返していた。

「さてと。その大きな懐中電灯は、もう消してくれないか。少しずつ、田を慣らさないとな」

「そうね」

ぱつ、とスイッチを消す。

同時に、『彼』が手にしたペンライトから、赤い光が細く流れ出した。

ふと頭上を見遣ると……知らず、真琴は唸つてしまつていた。

……こんなにもたくさん、星はあつたのだろうか。

白鳥座があれほど大きなものだと、真琴は今、初めて気が付いた。東天に架かっているあの美しい十字を、星図だけで表すことなど出来ないと思つ…

本の中でしか…写真の中でしか知らなかつた星の世界…それが広大無辺な『宇宙』に接したこと、見事に崩れ去つてしまつた。

唖然としている真琴の様子をちらりと見ると、望遠鏡の極軸を合わせながら、アキラは楽しそうに言つた。

「驚いたかい？ 壓倒されるだろ」

「凄い…凄いよね…」

それだけしか、咳けない。

デネブを覗いて目盛環の赤緯と赤経を合わせると、アキラは黙つてモーターのスイッチを入れていた。

低いモーター音に耳を澄ませた後、静かにアキラは瞳を真琴に向つけた。

…その柔らかな光の奥に、微かに…羨望と諦めの渦が巻く。

そんな『彼』の視線に気付いて、漸く真琴は目を落としていた。

「俺にも、今、真琴が味わつたような想いで星を見ていた頃があつたんだよ」

その口調が深い寂しさに満ちてゐるのを感じて…真琴はそつと尋ねた。

「…今は、違うの？」

つと目を逸らせてしまつ。

そんな『彼』の横顔を、真琴は悲しい瞳で見守つていた。

…やがて、ぽつりと、咳きが漏れる。

「…少なくとも、同じではないよ」

「そんなん…」

「真琴は、俺の『写真』を気に入つてくれただらう？ だけど、本当の星はあんなに綺麗なものでもないし、あんなにはつきりと見えるものでもないんだ」

静かに、感情を押し殺したように咳きながら、彼は星表でM13の位置を調べている。

「……」

息苦しさを感じて……『何か』を口にしたいのだが……

だが、声は少しも音になつてはくれなかつた。

目盛環を使って、『彼』は調べた位置まで大きく望遠鏡の筒先を動かしている。

大凡の向きが定まると、接眼レンズを覗きながら微操作で目標を探し始めた。

「……今の技術は凄いよ。俺が今しているような操作はしなくとも、パソコンと繋ぐだけですぐにこの瞬間の映像をモニターに出したり、座標を入力するだけで目標の天体を導入出来るんだから。裸眼では見えないはずのものも、光の蓄積で見えてくるんだ。本当の話、望遠鏡だけ外に出して、自分は部屋の中で快適に天体を観ることも可能なんだよ。

「……ほら、見てごらん。これがM13だよ」

何も言い出せないまま、真琴は『彼』の言葉に従つてレンズを覗き込んでいた。

中央に、何かうつすらとした雲が見えている。だが、じつと見つめ続けると、薄く、淡くなつてしまつようだ。

「少し、視線を逸らせてごらん。その方が良く見えるから」

確かに、視線を視野の端にもつってきた方が、雲は存在感が増している。

思つていたよりは中心部が明るい。そして、大きい……

だが……

「口径が8センチの屈折望遠鏡でも、これがやつとなんだ。星を見慣れている俺の目でも、やつとそのぼんやりとした雲の周りに、ぽつぽつと星の粒が見え隠れするくらいだよ」

目をレンズから離すと、真琴は正直に頷いていた。

確かに明るく、大きい。だが、これは『星』には思えなかつた。

煙か何かのようだ。写真で見る彗星のコマに似ているだろ？

眼視と写真では、見え方が違う。それは言葉としては知っていたものの、ここまで違うとは思わなかつた。

写真のM-13は、どれも立派に星の集まる、表面のぎらぎらした球体に写つてゐるのに…球状ですらないではないか。

「…技術はね、それなりに使いこなせば、簡単に素晴らしい映像を俺達に与えてくれる。俺にしても、写真を撮る度に、今度はこうして、もつといいものを撮ろう…そんな風に工夫を続けているんだ。でも…最近は、いい写真を撮る度に、どんどんと星から離れてしまつてゐる気がするんだよ…

違う。『本当』の星は、こんなものじゃない…ってね…「カメラを固定してバラストを調整すると、ピントを確かめてレリーズを押している。

手元の赤い灯りで、ノートに黙つて時刻を書き込み…

…ずっと…ずっと、黙つて真琴はそんな『彼』を見つめていた。何を言えばいいのだろう。

自分に何が言えるだろうか。

『彼』の呟きの一つ一つが、真琴に衝撃を与えてくる。

あの、店先のパネルからは想像も出来ないくらい、『彼』自身は真剣に悩み、迷つていたのだ。

「……………ごめんね…」

「え？」

「…あたし、そんな風にアキラ君が思つていたなんて、ちつとも分かんなくて…」

写真を見て喜ぶ自分の姿に、『彼』は複雑な気がしていただろう。落ち込んでいるそんな真琴を覗き込むと、だが『彼』は優しく笑い掛けてくれた。

「いいんだよ。今日、真琴の御蔭で俺も新鮮な気持ちになれたんだから。

初心を忘れるな、なんて言葉があるけど、それを今くらい実感し

たことは無いよ」

「……あたしもね、フォンちゃんやアキラ君みたいに、何か『大切な物』が欲しいな、って…そう思つてたのよ。

でも、さつきの話を聞いてたら、『大切な物』を『大切』なままでいることって、とっても大変みたいね…」

アキラは腕を組むと、静かな声で言った。

「…そうだね、大変には違いないよ」

そんな言葉が、とても重く、大人びて聞こえる。

『兄』のよくな『彼』の言葉に、真琴はただ耳を澄まし、想いを委ねていた。

「ただ、大切にし過ぎていいのかも知れない。

近頃、星を見ようと/orする時、《義務》のように感じることもあるんだ。楽しんで見ようと/orするんじやない。見なくてはならない気がして、見るんだよ。

これじゃいけない、俺は星が好きで、どんな代償を払つてもいいから見てみたい…だから、趣味にしていたはずなんだ。もつと、昔のよくな楽しんで星を見ていたい…

だけど、そう思えば思つほど、楽しめない自分がいつもいるんだよ。

もう、星を見ることに冷めてしまったのかも知れない…

…真琴、俺は今、趣味を失おうとしているところかも知れないんだよ…

「そんな…！」

励まそうと、急いで口を開く。

だが、やはり声が出ないのだ。想いは先走るのに、それを文章に出来ない。

それに…一体、何を言えばいい?

『大切な物』を探している者が、それを失おうとしている者を、どうして慰めることなど出来るだろう。だから、真琴は素直に呟いていた。

「…」めん。アキラ君… あたし、こんなに励ましてあげたいのに… 何も出来なくて… 折角、話してくれたのに…

あたし、何も出来ないのよ…

自分の力の無さが、情けなくなつてくれる。

「いや…」

柔らかな眼差しが、優しく微笑み掛けてくれる…

「真琴は、もう十分、俺の為に色々してくれたよ。真琴の姿や仕

草の一つ一つが、俺を変えてくれる気がするんだ…」

「…あたし、そんなの許せない。あたし、やっぱり、あたしの意志でアキラ君の力になりたいんだから…」

激しい口振りで真つ直ぐ見つめると、『彼』はその先で重く頷いていた。

「…ありがとう。本当に、嬉しいよ」

「あつ…」

今になつて、慌てて照れてしまつ。暗くて見えないだろ？が、自分では頬を真っ赤にしていることがよく分かる。

急いで俯く真琴の仕草に笑みを戻した瞬間、アキラは自分がシャツターを開いたままにしていることを思い出した。追尾も、モーターに任せっきりになつている。

「うわっ…」

慌ててレリーズを切るが、時計を見ると『彼』は苦笑いしていた。

「うーん、随分、予定以上に露出してしまつたな」

ノートに撮影終了時刻を書き込むと、今日の予定をもう一度組み立ててみる。

『彼』の手の中で、ペンは小指と薬指の間に挟まれたかと思うと、次にはくるくるっと大きく振れて指の間を移動していく。人差し指の手前まで来ると、そのペンはターンして出発点へと戻つていた。

「…あつ…」

そんな『彼』の動きに気付いて、真琴は思わず息を飲んでしまつた。その気配に気付いたのだろう、アキラは目を上げると少し困つ

たように言った。

「ああ、これが出来なくて、随分と練習したんだ。御蔭で、すっかりクセになつてるよ」

「……」

真琴は沸き起る悲しみを必死に胸中に押し込むと、不自然に微笑もうとしていた。

……あんな風にペンを回すことが、少し不器用だった『晃のお兄ちゃん』には出来なかつたのだ……

そう……まだ、真琴は『彼』を重ね合わざるにはいられなかつた……方に一つも無い期待が、今も、じつして心の隅を占拠している……

だが、田の前でその甘い期待は完全に否定されてしまった。

感じてはいけない……だが、感じずにはいられない悲しみに襲われ、真琴は激しく心を乱していた。

……『お兄ちゃんにも、出来ない』ことあるんだねえ』……

(やめてっ!)

そんな『晃のお兄ちゃん』を応援していた自分の『過去』の声を消そうと、真琴は強く心の中で叫んでいた……

……自分は、なんて酷いんだろう……田の前の『彼』を、『彼』自身として『好き』になつたはずなのに……

「大丈夫かい？ 真琴！」

心配そうな声にはつと我に返ると、真琴は急いで足下のバスケットを持ち上げて誤魔化そうとしていた。

言えない……絶対に、こんなこと、言えない……

「そうだな。もう今夜は、写真も止めよ。

さてと、じやあ、真琴の手作りのクッキーをもらおうかな

気にしているはずなのに……それ以上気付かない振りをしてくれるアキラの優しさに、真琴の心は哭きながら謝り続けていた……

「はい」

やつとの思いで声を出し、水筒の口シップを渡す。

バスケットの中でもクッキーを広げた途端、不意に真琴は飛び上がつてしまつた。

すぐ近くの茂みで、カサコソと草を踏む音がしたのだ。
誰かがいるのだろうか…まさか、本当に変質者でも…
だが、一瞬鋭く瞳を細めたアキラも、その揺れる草の音に耳を澄ますと、表情を緩め、次には小さく呼びかけていた。

「おいで、タマ

「アーン…」

愛らしい鳴き声と共に、純白の毛並みが赤い光に照らされる。
見覚えのある猫の姿に一気に力を抜くと、真琴は大きく溜息を吐いてしまつた。

「脅かさないでよ。ああ、びっくりした」

「おいおい。俺の時は凄い剣幕だつたじやないか」
からかうアキラの言葉に、頬を膨らませる。

「今はいいの！ あたしだつて、女の子なんだから。守つてもらいたいな、つて秘めた願望があるのよ」

「大丈夫、守つてやるさ」

何気無く応えてくれる言葉に、とても多くの想いが籠められていく。

思わずはにかんで、それでも嬉しそうに真琴は頷いた。

「…うんっ！」

こんな時には、ふと女の子らしい可愛い表情に戻る。

改めてそんな彼女の様子に目をやると、次にはアキラは視線を白い猫に流してしまつた。

「ほら、タマもクッキーをもらつか」

『彼』が照れているのに気付いて、自分も恥ずかしくなつてくる。
だが、それでも真琴は微笑みながら、クッキーをアキラに手渡していた。

「その猫、本当はブランって言つらじいわ」

「なんだ、じゃあ、何処の飼い猫か分かつんだな」

少し残念そうな『彼』の顔に、くすくすと真琴は笑い出していた。
「その飼い主がね、フォンちゃんに告白したのよ？ 前から、狙つてたみたい」

「で、大丈夫だったのかい？ 彼女は、そんなショックに耐えられないだろ？」

心から心配しているアキラに、真琴はふつと柔らかく微笑んで言った。

「優しいのね、アキラ君つて」

「そう言つ真琴だつて、彼女の『姉さん』みたいに笑うんだな

「え？」

まさか、自分がそんな風に見られているなんて思いもせずに、真琴はきょとんとしてしまった。

その様子に、アキラが思わず噴き出している。

「なんだ、全然気付いてないんだな」

「だつて、あたし…そんなこと、思つてもみなかつたわ」

困つた表情でそう言つと、一層『彼』の笑い声が大きくなる。

「もうつ！ そんなに笑わなくてもいいじゃない」

唇を尖らせる真琴の足下では、クッキーを催促する声が上がつてくる。

「アーン、アーンッ！」

煌く光点が鏤められている空の下、愉しい言葉が行き交つては風に抱き止められていく。

やがて東天も白み、月がその波で彼女達の頬をそつと照らしていくことだらつ…

「じゃあ、いじで」

「うん！ 今夜はありがとう」

門の向こうでは、ジョリーが一生懸命に尾を振つてゐる。
仔犬が走り寄る足音に気付いて、弥生も玄関から顔を覗かせていた。

今夜は、弥生の家に泊まるのだ。アキラもそのことを知っていたので、いつもより早めに切り上げていた。

「彼女も、一度連れてってあげようか。真琴に見捨てられたと感じるかも知れないからな」

「そうね……」

そんなつもりがなくても、僅かなすれ違いで友人関係を壊した友達を、真琴はたくさん知っていた。

（でもね、きっと大丈夫よ）

そう、絶対に、自分と弥生の関係が崩れることなど無いだろう。確証など、無い。だが、彼女はそうであることを知っていた。

「ほんと、フオンちゃんのことになると、優しいのね。声まで柔らかくなってるじゃない」

「なんだ、妬いてるのか？」

「そうよ。あたし、本当に、それで泣いたんだから……」

しんみりとした告白に、アキラは真剣な光を瞳に映すと静かに言った。

「彼女に話したのか？」

「……うん」

「そうか……ありがとう。そんなにも想つてもらえたなんて、嬉しいよ。たつた一度の、しかもあんなにも短い出逢いだつたのに……」

「時間の長さなんて、意味無いじゃない。」

あたしにとつては、全然、『短く』なんてなかつたわ。一瞬でも、それがどれだけ大切かで、時間の価値なんて決まるのよ

「そうだな。親友を裏切りそうになるほど大切な想いを、俺が受けに相応しいかは分からぬけど……」

俺だつて、あの時に『大切なもの』を見付けたんだ。

「俺の前には、今、一筋の道が見えてるよ。その小道が、『シリヴィー』の店先で俺を真琴へと導いてくれたんだ……」

「アキラ君……」

「これからも……いや……今迄にだつて、その光の小道は真琴に繋が

つていたのかも知れない。

「俺は、その小道を、ずっと歩いていたいと思つてゐるよ」

静かな言葉に、小さく、何度も頷くことしか出来ない。

そんな自分に笑い掛けてくれた後、『彼』は自転車に跨つた。

「ほら、あの子が待つてるよ。

じゃあ、お休み！」

たくさん荷物を積んだ車輪が遠ざかっていく。

その後ろ姿を、月の銀光の下で、真琴はいつまでも……いつまでも、見送り続けていた……

暑かつたにも関わらず、昼の間に眠つてしまつたからだろうか。夜更けになつても、真琴は少しも疲れそうになかつた。

……いや。昨夜のアキラの言葉が、心に残つたまま離れないのだ。こんなにも、自分が無力だとは思わなかつた。弥生の悩みには、結構、真剣に応えることも出来るのだが……

真琴は、趣味として星を見ることも面白そつだと思い始めていた。月食・日食の素晴らしさから、光害の問題。流星の傳さから、惑星の模様の変化まで。『彼』からは色々と、少しずつだが聞かせてもらつたのだ。そのどれもが不思議さと計算式が入り交じる、奇妙な……そして、だからこそ、わくわくするようなことばかりだつた。

だが……アキラ自身は、その趣味を失おうとしている。……決して、それを望んでなどいないのに……『彼』は、『大切な物』を見失つてゐるのだ。

……真琴が共有したいと願う、『大切な物』を……

深い溜息が、机の上を滑る。

……弥生なら、何と応えるだらうか。彼女も、読書という『大切な物』を失いかけたことがあつたのだらうか……

電話をすれば、すぐにでも確かめられるのだが、何だか真琴は気が進まなかつた。

この問題に、そんなにも簡単に答を出していいのだらうか……？

確かに、弥生なら心から心配して答えてくれるだらう。だが……

『大切な物』を探す自分にとつて、この悩みは一人で考えるべきなのかも知れない……

今、ここで考えなくては……自分が折角『大切な物』を見つけ出しても、すぐに失つてしまふかも知れないのだ……

あまり考え方得意ではない真琴は、落ち着かずに椅子の上で体を搖すると、目で『何か』を探してゐた。

夜中に、じつじつ一人で考えている」とが、何だか苦痛に思えてくる。

…逃げているのかも知れない。どうしても見つけ出さなくてはならない落し物が見つからず、パニックを起こしそうになっているのだ…

ふと、本棚の上のラジオが目にとまる。

洋楽の新譜の情報を聞くくらいで、もっぱらレンタルに頼つている真琴にとつて、ラジオは縁の遠い存在だった。

だが、今は何でもいい。少なくとも、人が話している声を聞くだけでも、落ち着けるはずだ。

机に下ろして何気無く電源を入れると、AM放送が流れ出す。何かをぶつけて、FMから切り替わっていたらしい。FM放送を聞き慣れた耳にはぐぐもつて聞こえる女性DJの声が、白い光の中へと溢れ出していく…

今週も、『素敵』なことに巡り会えたでしょうか。

こんばんは、水口 真結です。

今日は、早速、先週の悩みに対する応えを読んでみたいと思います。本当に沢山のハガキが届いたのですが、その中でも、やっぱり『櫻通りの風遣い』君のものが一番まとまっている気がするので、代表して彼の手紙を読んでいきます。

(何よ、この番組)

今迄に聞いたことの無いDJの声だ。内容も重苦しいものらしいので、真琴はFMにチューナーを合わせようとして…

大好きだったはずなのに、趣味を楽しめなくなつた…

先週、『銀の月』さんはそう書かれていましたが…

「えっ！」

思わず手を止める、真琴はラジオを凝視してしまった。
硬直したまま動けずにはいると、静かな女性の声がゆっくりと耳の中に流れ込んでくる……

…同じような思いは、本当に『大切』な趣味を持つ人なら、誰でも体験するものだと思います。

『銀の月』さんは、自分自身が悪いのだと責めていましたが、決してそうではありません。

僕自身の経験が適切かどうかは分かりませんが、一つの例だと思ってください。

僕は、童話やファンタジーを書くことを趣味にしています。それこそ、本当に大切で、何ものにも代えられないものです。

ですが…それだけ『大切』だからこそ、僕も一時期ですが、「執筆」に囚われてしまつたことがあります。

誰の目も気にせず始めたはずなのに、目には見えない『何か』が気になつて、途中で止めることが出来なくなつてしまつたのです。今になつてみれば、それは『趣味』が僕を使って童話を書かせていたんだ』と言えることが出来ます。

趣味を持つことは素晴らしいものです。それは『自分』を自身に示してくれるものですし、その『自分』を一層確かなものへと育ててくれるものです。

ですが…ここで、はつきりとさせておくべきことがあります。

それは、『僕が趣味を持っている』ということです。

趣味を大切にし過ぎた為に、主従関係を逆転させてしまつた時、人は趣味に囚われ、『自分』を見失う倦怠感の中へと押し流されてしまつたのです。

まいます。

『銀の刃』さんも、『大切』だからこそ、悩んでいるのです。それは誰を責めるべきものでもなく、ましてや自分自身を追い詰めるべきものでもありません。

…そして、これを乗り越えてこそ、得られる『大切な物』もあるのです。

「……」

さゆうー、と口を一文字に開き結んだまま、真琴は黙り続けている。

この手紙の一言ひととこを聞き漏らすまいと、『全て』の心で、女性だから届く想いを受け止めていく…

…その倦怠期は、ほぼ一年間、僕を苦しめました。

どうして、それを克服出来たのか…少しでも彼女の慰めになるなら、数少ない経験の一つですが、ここに書いてみたいと思います。

まず僕は、今まで書き続けてきた長編を、何が何でもそのまま書いていこうとしました。毎日毎日、必死になつて言葉を押し出しては、文章に繕つうとしたんです。

ですが、勿論、そんな文章に自分が納得出来るはずもなく、何度も同じ箇所を直そうとしては、結局一番始めの文章に戻つたりしていました。

そして…とうとう、文章を書くのが嫌になり、僕は完全にペンを置いてしまったのです。

(…えつ…)

思わず、身を乗り出してしまう。

それでは……『大切なものの』を見捨ててしまつてはなるのではな
いか。

……『シルヴィー』の店先に掛けられた写真パネルと、アキラの
顔がラジオの前に浮かび上がつてくる……

……まるで、救いを求めるように、真琴は耳を傾け続けた。

一ヶ月くらいいでじょうか……僕はまるで文章を書く氣になれませんで
した。

ですが、その間にも、自分の中から何かが出てこいつとするのです。
『大切なものの』を失つた悲しみが、その『何か』にじがみつこいつと
して……

……僕は、本当に迷つていました。ですが、分かつてもいたのです。
『まだ、『時』は来ていない。今、ここで甘い汁に手を触れた瞬間、
僕は趣味の奴隸になつてしまつのだらう』と。

正直に書けば、誘惑に負けてペンを走らせたこともあります。けれ
ども、すぐに苦しくなつて、続けることは出来ませんでした。

それがある日……『何か』のきっかけで、もつ一度書こうと思つて立
つたのです。

残念ながら、その印象を具体的には書けそうにありませんし、その

きっかけは決して『銀の月』さんの例にはならないと思います。

心が真つ白になつた時、自分の好きな存在が、その中へと入り込み

……そして、『何か』に触れるのです。

薄墨の雲を背に広がる黄金の光と淡い虹に励まされるのか、素敵な
雨音と子ども達のはしゃぎ声に背を押されるのか……

……そのきっかけは、無意識的な『偶然』によつて『えらぶるもので
しょう。

その瞬間、趣味を得たいという願いが激しく泡立つことを止め、不
意に胸中に風が訪れ……そして、『本当』の存在を得ることが出来
るのです。

『銀の月』さん。

趣味は、忘れてしまつてもいいのです。絶対に、自分を責めてはいけません。そんなことをすれば、再び訪れてくれるはずのものも、現れなくなつてしまします。

大丈夫、『本当』に『大切な物』は、貴女の許へと必ず帰つてきます。

長期間になるかも知れません。

ですが、必ず、戻つてくるのです。

趣味とは、『自分』の心なのですから……

時間の関係で少し短くさせてもらいましたが、内容は傷付けていな
いつもりです。

他にも、もう一つ別の趣味を探し出して交互に楽しんでいる人や、
同じ系統でも少しだけ違うものを……例えば『櫻通りの風遣い』君で
言えば、ファンタジーではなくミステリーを書いてみる……そんな風
に解決している人もいました。

私が驚いたのは、こんなにも沢山の人達が、趣味のことに悩んだり
努力したり……そして、それを自分自身で乗り越え続けてきたという
ことです……

「…………ふう…………」

流れ続けるラジオから身を引くと、ゆっくりと椅子に凭れて、真
琴は全身から力を抜いていった。

……今の話を、『彼』にも伝えたい。

（今度逢つたら、何か別のことでも勧めてあげようかなあ……）

（そうだ！　プールや海でもいい。今度、逢つた時にでも……）

「ああーっ！」

夜中であることも忘れて、思わず真琴は力一杯叫んでしまった。

……何処か、悲鳴にも似ている……

「どうしたの？」

隣室からかけられた声に、慌てて真琴は返していた。

「う、うううと、何でもない」

「…そう」

ドアの閉まる音がある。

ほつと胸を撫で下ろすと同時に、先程思い出した事実に、真琴の心は再び激しく乱れてしまった。

今度逢おうにも、よくよく考えてみれば『彼』の名前も電話番号も知らないのだ。何処の高校で、何処に住んでいるのかも分からない……逢えるはずがないではないか……

途轍も無い絶望感に襲われてしまつ。

…だが、不意に希望が湧き上がつてくる。

そう、あの『シルヴィー』のおばさんに頼めば、教えてもらえるだろう。他人のことをそつそつ簡単に話してもらえるとは思えないが、電話番号くらいなら…せめて名字だけでも…駄目なら、自分の電話番号だけでも渡してもらえたら……

幾つもの小さな思い付きに縋り付きながら、真琴はラジオの電源を切ると、机の灯りも消した。

そのまま、ベッドに倒れ込む。

…待つほどもなく、すぐに眠りは真琴を静かな闇の淵へと誘つていた……

「本当にじめんね、フォンちゃん。まだ、本読めてなかつたでしょ？」

図書館の手前で右手に曲がり、いつも脇道へと入り込む。

行く手に見慣れた店が現れると、真琴は辛そうに弥生の顔を覗き込んでいた。

本当なら、一週間に一度しか図書館には行かないのだ。当然ながら、弥生もその計画で本を借りている。本が好きだからと言つて、読むのが早いわけではない。それどころか、どちらかと言えば、弥

生はじつくりと集中して物語を読んでいく。そのことをよく知っている真琴は、自分の想いに彼女を引き込んだことを、本当に済まないと思っていた。

だが……弥生にも話しておきたかったのだ。あの夜に打ち明けられたアキラの悩みや、偶然耳にしたラジオからの応え。自分が『彼』と連絡すらとれない」とまでも、真琴は弥生に話していた。

「……ううん、……読み終わったものもあつたから……」

につこりと微笑む仕草が、一層真琴を落ち込ませる。

今になつて考えてみれば、店のおばさんに『彼』の電話番号を尋ねるくらい、自分一人でも出来るはずだ。

ただ……別に、はつきりとした理由があるわけではないのだが……真琴は、そうすることが嫌だつた。

……若しかしたら……今でも、弥生に嫉妬したことを探しているのかも知れない……

『彼』との関係を秘密にすることは、真琴に裏切りに似た想いを抱かせるのだろう。

「『めんね。今度、絶対、お詫びするからね』

「……」

優しく、そつと頭を振ってくれる。

だが、その柔らかな面が不意に震むのを見て、思わず真琴は足を止めてしまった。

弥生も立ち止まると、黙つて足下へと視線を落とす。

「……マコちゃん……そんなにも、逢いたくなるの……？」

「……え？」

思いがけない咳きに、一瞬、絶句してしまつ。

だがすぐに、その言葉の意味に気付くと、真琴は遠慮がちに聞き返していた。

「フォンちゃん……若しかして……」

残された沈黙の中に『言葉』を認め、弥生は「くんつと頷いた。

「……会つた場所まで来たら……走つて通り過ぎてるの……周りを見な

「いよいよにして……」

「あ～あ……」

思わず溜息を吐いてしまうが、弥生の怯えた目を見ても無理強いや説得も躊躇われてしまつ。

「……会いたくないの？」

「……分からぬ……ただ……怖くて……」

両手を握り締めると、弥生は胸元に強く押し付けていた。

「きつとね……それが、逢いたい、つてことだと思うよ。

相手の子も、それで怒るような奴なら、捨ててもいいんじやない？ フォンちゃんを、フォンちゃんのままで『好き』になつてくれ

る人の方がいいもんね」

「……」

同意も否定もせず、弥生は複雑な表情を浮かべている。

（迷つてゐるなんて……）

柔らかく、そつと目を細めてしまつ。

弥生自身も、変わりつつあるのだ。黄金の光に満ち溢れた小道を前にして、戸惑いと不安に襲われているのだろう。そして同時に、期待と憧れも感じているのだ。

その小さな背中を少しだけ…ほんの少しだけ、押すだけでいい。だが、それは真琴の役目ではなかつた。それは雷と言う名の男の子自身の役目であり、他の誰にも彼の代わりは出来ないのだ。

光の小道……真琴自身は既に、その道に先を見詰め、喜びと共にその上を歩き始めていた。

今日も、白い雲は地平に湧き上がる程度で、澄み切つた青空が全てを光と影に分けている。くつきりと裂かれた境界が風の愛撫に搖れ動き、斑な絵柄が路上の二人を包み込んでいた。

「……ほら、フォンちゃん！ 大丈夫、焦らなくともいいんじやない？」

『その時』は、望んでなくても勝手に来るもんよ

そう言つてゐる自身も、少し焦つてここまで来ているのだが…

思わず、心の中で苦笑してしまう。

「……うん……ありがとう、マコちゃん」

弥生の微笑みに頷くと、真琴は再び『シルヴィー』に向かって歩き始めていた。

店先に近付くにつれ……だが、何かが足りなくなつた気がする。

「……あれ？」

大きなウイングの向こう、薄暗い店先を背にして掛かっているはずの写真パネルが……

……無くなつていて……

「ええっ！」

思いもしなかつた状況に、様々な憶測と共に衝撃が胸を突く。

一体、『彼』はどうしたのだろう……家庭教師を辞めたのだろうか……

「マコちゃん……！」

弥生の言葉も聞かずに、ぱつーと走り出す。小さな鐘が下がるドアを押し開けると、真琴は飛び込みながら叫んでいた。

「おばさん！ あのパネル……」

高ぶる声が、次第に小さく……すぐに途切れてしまう。

弥生がそつと後ろから覗くと、真琴の前では『シルヴィー』のおばさんが驚いた顔をして立ち去りしている。そして、その横には……

「どう……どうして、アキラ君がここに居るのよつ……」

そう、アキラが嬉しそうに小さく手を振つて二人を迎えていたのだ。

「それに、どうして？ どうして写真を吊らないの？」

自分の想いを持て余し、少し怒つた口調で問い合わせている真琴に対し、アキラは全く動じずに笑い声を上げていた。

「星を撮るのは、暫く止めることにしたよ。『大切な物』に、少し休暇をあげよつと思つてね。

近頃は、俺を主人と言つよりも手足として扱つていたし、ちゃんと間を置いた方がいいと思うんだ」

『彼』の言葉に、真琴は思わず肩を落としてしまった。

それこそ、真琴が『彼』と逢つて勧めようとしていたことではな

いか。あのラジオ番組を聞いた話をして…

「……あつ！ アキラ君、ひょっとして……」

「ん？」

「それ、ラジオか何かで聞かなかつた？」

きょとんとしていたアキラの表情が、不意に驚きと喜びに満ち溢れる。

「じゃあ、真琴も聞いていたのか。確か『宝の小箱』だつたよな」何だか嬉しくなつて、力を込めて頷いてしまう。あの夜が明けてすぐ、番組表でチェックしたタイトルが『宝の小箱』だつたのだ。

「ずつと聞いてるのかい？」

「ううん。たまたま電源を入れたら、流れてきたのよ」

「俺もなんだ。普段はFMしか聴かないのに、あの夜だけは違つたんだよ」

互いの言葉に、顔を見合わせてしまつ。

次の瞬間、真琴もアキラも明るい笑い声を上げていた。

「へえ、こんな偶然もあるんだな」

「ううん、違うわよ！ あたし、偶然なんて信じないんだから」

真琴の言葉に、『彼』は片目を瞑つてくる。

「そうだな。偶然なんかじゃない。ここに逢えたのも…」

不意に頬を赤らめながら…それでも、真琴は悦びと共に頷いていた。

「…ねえ。だつたら、明日にでも何処かに行かない？ 趣味が帰つてくる前に、他のことも楽しんでみないとね」

「ううん、そうだなあ。何処がいいだろ？」

腕を組んで考え込むアキラに、真琴は提案した。

「水族館なんて、どう？ ほら、時津湖の畔に大きいのがあるじゃない。あたし、ここに引っ越してきてから、まだ行ったことが無いのよ」

本当は、弥生と一緒に行くつもりでいたのだが…

また少し、後ろめたくなつて、真琴は急に言葉を止めてしまった。

「それでいいじゃないか」

温かく、優しく笑い掛けてくれる……

（…「めんね、フォンちゃん。…でも、あたし……）

この笑顔を見ていたいのだ。ずっと、こんな風に一緒に居たい……

きっと、『彼』は自分に『大切な物』を運んできてくれるだろ……

勿論、弥生は自分のこんな嫌な思いを否定してくれるだろう。だが、真琴はそれに甘えたくはなかつた。

……『彼』を大切にするなら、その分、もっと弥生も大事にしていこう。

それが、今の真琴の想いだつた。

「じゃあ、時津湖の駅の改札に、明日の九時半でどうだい？」

「うん！ いいわよ」

「よし、決まりだな」

アキラはそう言つと、ちらりと視線を真琴から弥生の方へと移していた。

その柔らかな眸に気付いて、弥生ははにかみながらも頭を振る。弥生は、自分が無視されているなどとは少しも思つていなかつた。逆に、一人の間に入つていく方が、彼女にとつては苦痛だつただろう。

弥生の精一杯の仕草に謝るよつな色を瞳に映すと、アキラは真琴に言つた。

「ほら、真琴！ そろそろ図書館に行つてあげたらどうだ

「え？ …あつ！」

彼女のことを気にしていながら、会話からはすっかり外してしまつていて。

真琴は慌てて振り向くと、佇む弥生に謝つていた。

「ごめん、フォンちゃん！」

「ううん……」

すっかり自分とアキラの世界を作ってしまったのだ。ここまで引っ張り出された弥生にしてみれば、迷惑に思つどころか怒つてしまつても仕方の無いことだらつ……

優しく返される微笑みが、真琴には一層辛い。罪悪感にがつくりと肩を落としてしまつた真琴の背中を、『彼』はそつと押してくれた。

「ほら。悔やむのは、後ににするんだよ。今は、彼女の為にも、楽しんでくればいい」

「……そうね……」

「じゃあ、なー！」

「うん」

弾む『彼』の言葉に何とか笑顔で応えると、おばさんにも頭を下げて真琴は店を飛び出していた。

その指先は、しつかりと弥生の手を掴んでいる。

ドアを抜け、明るい陽光に身を曝すと、真琴は弥生に頭を下げていた。

「フオンちゃん、『めんつ！』あたし、本当に我儘だね……」
嫌われても、仕方無いかも知れない。アキラと出逢つてから、どれだけ彼女を粗暴に扱つてきたことか……

「ううん……とつても素敵なことだもの……」

「フオンちゃん……」

「……マコちゃん……アキラ君と出逢つてから、とつても輝いてる……」
私も、とつても嬉しいの……本当に、とつても嬉しい……

にっこりと微笑んでくれている面には、偽りの入り込む余地など全く無い。

純真な喜びが自分に向けられているのを全身で感じながら、真琴は思わず彼女の小さな体を抱き締めていた。

「ありがとう……ありがとう……」

厳しく照り付ける光の槍は、路上に一つの影をくっきりと描き込んでいる。その藍色の影は、やがて並んで、風に揺らぐ葉群の中へ

と溶けていった。

バス停から少し戻つて、横断歩道を渡る。

まだ新しい壁をしているスーパーの脇を抜けて一つ目の角が見えてくると、弥生は心なしか足を早めようとしていた。

ここで、以前、あの男の子と出会つたのだ。

まるで、その彼を探すかのように辺りを見回しながら、だが怯えた表情で駆け足に……

次の瞬間、足が路面に凍り付いてしまつた。

目の前に、その雷本人が立ち塞がつているのだ。ずっと、弥生のこと待つていたらしい。

ぎゅっ！ と手を握り合わせると、弥生は震える胸元を強く押さえ込んでいた。

（…どうしよう…）

まだ、逃げ出したい…逃げ出したいのに…なのに…

「なあ、橘」

厳しい目が、じつと見詰めてくる。その強い口調にびくつと体を震わせると、弥生は諦めたように俯いてしまつた。

「…俺のこと、そんなに嫌いなのか？」

「え…？」

その言葉に恐れ、思わず弥生は雷を見上げていた。

（…違うの…私…）

胸中で弦くそんな自分の言葉に気付き、弥生はひどく驚いてしまつた。

…『自分』は、嫌いではないのだろうか…

「俺、いつも橘が走つていくから、てっきり急いでばかりいるんだと思つてたんだ。けど…そうじやないんだろ？」

「…」

淡淡と、必死になつて感情を抑えて語る彼の言葉に、弥生は泣きそうになつていて。

彼は、ずっと自分のことを気にしてくれていたのだ。そして、今も…自分を傷付けないよう、に、頑張ってくれている…

「俺、やつと分かったんだ。橘が俺を避けてるんだ、って。

もう、会いたくないのか？ 橘、はつきり言つてくれないか

静かな問いかけは、だが弥生が応えるには難しそう。

このまま、何も言わなかつたなら…

…『彼』に、嫌われるのかも知れない…

(…嫌…それは…嫌…)

優しい瞳に、うつすらと涙が幕を張る。

嘘も吐けずに、正直に弥生は想つていてことを告白した。

「…分からぬの…」

「え？」

「…分からぬの…ただ…」

「…ただ？」

「…怖かつたの…」

「…！」

雷の面に、驚きが走る。

弥生は目を閉じると、そつと囁き続けた。

「…私、分からぬ…逢つてもいいと想つのに…嫌われたくな
いのに…」

でも、ここまで来たら…いつも、…怖くなつて…」

弥生にしてみれば長い声の連なりに、雷は真剣な表情で考え込んでしまつた。

「…そうか…」

黙つて俯いてしまう弥生に、一瞬躊躇つた後、雷は優しく尋ねて

いた。

「…なあ、橘。明日、何か予定はあるか？」

「…」

少し間を置いて、小さな頭が左右に振れる。

「だったら、二人で何処かに行かないか」

赤くなりながら、乱暴な口振りで告げてくる。

その言葉を聞いて弥生が怯えたように身を引くのを感じ、雷は急いで付け加えていた。

「心配するな。町には行かないから」

「……」

答えない弥生に、雷は一人、呟くように続けた。

「俺、私立の中学校に通ってるんだ。だから、橘と同じ学校に行つてる奴等に、色々と教えてもらつて……あまり他人と話が出来なくて、それどころか、橘は他人と一緒に居るのが怖いみたいだ、て……俺、分かつてたんだ……いや、分かつてるつもりだったんだよ……」

自分を責めるような口調に、弥生はそつと雷を見上げていた。

『彼』はその視線を捉え、柔らかく言葉をかけてきた。

「けど、俺、こんな風にしか話せなくて……」

「ごめん……だけど、頼む。……一度だけでもいいから……」

その言葉を、弥生は途中でそつと頭を振つて止めさせた。全身の力を使って、必死に雷を正面から見詰めてみる。

「……うん……ありがとう……」

聞き取るのもやつとの囁きに、雷は大きく目を見開いた。赤くなりながら、それでも嬉しそうに笑みを浮かべる。

そんな『彼』の様子に、弥生もこれ以上無いくらいに頬を染め……すぐにその赤みは胸元にまで広がつていった。

「……だが、嬉しいのだ……『本当』に、嬉しいのだ……」

「じゃあ、明日……」

「こくんっ、と頷く。

だが、この応えまでが、弥生の限界だつた。

「……ありがとう……」

そう呟くと、逃げるように走り出してしまつ。

自分のものではないような応えを続けたことで、胸の動悸は恐ろしこまでに早まつてゐる。

…「そのまま、ここに居れば…きっと、心臓が破裂してしまつて違いない……

突然の弥生の行動に一瞬遅れながらも、雷は小さな愛らしさの背中に向かつて叫んでいた。

「バス停に、十時だからな！」

その声は蝉の合唱に溶け込み、何処までも広がる青空へと消えてしまつ。

……だが、黄金の光に満ち溢れた優しい胸に、その『言葉』は素敵な想いと共に、いつまでも…いつまでも、響き続けていた……

「ええ～っ！」

階段を上った瞬間、「改装中」の立て看板が目に飛び込んでくる。「うーん、先に調べておくべきだったかな」

軽く笑うアキラの横で、真琴はがっくりと肩を落としていた。道理で、人が少ないはずだ。雨の中でも行列が出来るほどなのに、曇天でここまで客が激減するはずがない。

「…ねえ、これからどうする？」

自分でこの場所を提案したのだが、見学する以外は殆ど何も考えていなかつたのだ。

（折角、お気に入りの服、着てきたのに…）

前髪だつて、何度も何度も気にして直したのだが…

やはり、このまま帰るしかないだろう。時津湖の周辺は、まだまだ店が少なく、あつたとしても、その質は真琴から見れば随分と酷いものだ。ここで喫茶店に入るくらいなら、何処かで缶ジュースでも買った方がいい。

涼やかな風が水族館を包み、そのまま湖へと流れ込んでいく。

その見えない道を目で追うと、『彼』は真琴に湖畔を示して片目を瞑つてみせた。

「ここまで来たんだから、ちょっと散歩でもしていいのか？」

見ると、道を挟んだ岸辺から、木の板が水際や水面に渡され続いている。湖の周りを巡る、遊歩道になつていてるらしい。

「ただ、あの湿地の上を歩くと、頭の上に蚊の大群が集まつてくるだろうけどな」

「あたしは平気よ。そうね、ちょっとでも一緒に…」

正直に飛び出そつとした言葉を、赤くなりながら慌てて飲み込んでしまう。

そんな真琴に、『彼』は柔らかな笑みを向けて優しく続けてくれ

た。

「そう、少しでも長く、一緒に居たいからね」

「…『はじめんね。あたし、まだそんな風に言えなくて…』」

車をやり過ごして道を渡ると、真琴は恥ずかしそうに小さく呟いていた。

「いいじゃないか。照れた真琴も可愛いよ。それに…『言葉』はよく伝わってくるからね」

「でも、あたしだって言いたいのよ！」

打ち寄せる水の囁きに身を浸しながら、真琴は少し脹れてアキラを見上げた。

…『彼』も、真つ直ぐに見詰め返してくれる。その視線が温かくて…

「…ありがとうございます…」

苛立つ心を静めながら、真琴はそつと囁いていた。

「焦らなくてもいいんだよ。無理に押し出した声には、嘘が入り込むかも知れないからね。

俺は、いつでも待ってるよ

「…うん」

だが、今すぐにでも、口に出してみたい。

勇気はある。この想いが《本当》だという自信もある。

だが…それでも、『彼』には話せないのだ。無意識になら平気なのだが…

『彼』からは、何度も自分の想いを告げてもううてこる。…これ

も、経験の差なのだろうか。

不意に、胸中に不安が沸き起つてくる。

…今まで、『彼』は何人くらいの女の子と、こうして並んで歩いてきたのだわ。

自分など、その中の「たった一つ」なのかも知れない…

ちらつと、アキラを一瞥してみる。だが、隣を歩く『彼』は辺りの風景を楽しそうに眺めているだけで、こんな自分に気付いていない

い。

そんなアキラの態度が、一層、真琴の心に靈を投げ掛けていた。

「…ね、え…アキラ君…」

「ん?」

振り向いてくれる『彼』に、だが上手く切り出せない。こんなことを気にする自分の醜さを知られたくない…

…だが、不安でもあるのだ…

「どうしたんだい?」

「…うん。あのね…アキラ君、今まで、誰かと…その、付き合つたことって、ある?」

怒られることも覚悟している真琴に、だが返ってきたのは柔らかな問い掛けだった。

「気になるかい?」

「うん」

正直に頷き、真琴は続けた。

「こんなことにこだわるなんて、あたし、嫌な女の子だね…」

「そんなことないさ。嬉しいよ。そんなにも真琴に想つてもううれて」

…自分が許せなくなる。『彼』を『晃のお兄ちゃん』と同一視したことや、『彼』の想いに不審を抱いてしまうこと…全部、自分が悪いのだ…

「確かに、付き合つたのは真琴が初めてじゃないよ」

そうであつても不思議ではないと思いつながらも、その一言はショックだった。

「でも、俺は真琴が『好き』なんだ。口ばかりで、信じてもうえないかも知れない。だけど、『本当』に、俺は真琴と一緒にいたいと思っている。

初めての、そして唯一の、光の小道の共有者なんだからね

「…『めんね、あたし、アキラ君が『好き』なの…なのに、好きになつてから、どんどん醜くなつてゐるのよ、

頬を染めながら、弱気な口調で呟く。

そんな真琴の言葉に、アキラは暫くの間黙り込んでしまった。

虚ろに響く足音が、せせらぎと葉擦れの合間を縫つて広がっていく。流れる灰色の雲は一人の上に光と影を描き出し、涼風がそれら全てを等しく愛撫しながら通り過ぎていった。

「…真琴は、自分が本当に醜くなつたと思つのかい？」

「うん…」

漸く聞こえてきた声に、真琴は微かに頷いた。

「それは、幼い頃と比べて…？」

「…うん…」

静かな『彼』の言葉を、真琴は悲しみと寂しさを抱いて受け止めていた。

『晃のお兄ちゃん』と一緒にいた頃の『自分』と変わりたくないのに…

…それが、『彼』の望みだつたのだ…

「真琴、俺は真琴自身が醜くなるなんて思わないよ」

「…え？」

「誰だつて、新しい問題に直面すれば、変わつていくんだよ。

真琴は、昔の自分から見て、醜いと思える方向に変わつたのかも知れない。でも、若しそうだとしたら、それは、そうすることが必要だつたからなんだ。

…いや…きっと、『真琴自身』は変わらうとしないからこそ、その表面が一部だけ、醜い方向に変わつてしまつたのかも知れない。『知りたいのに、知りたくないような嘘は吐きたくない』…その正直さを持ち続けようとするからこそ、俺が女の子と付き合つたかどうかにこだわつて尋ねたんだろう？『こだわつてなんかない』なんて、嘘を装つことに比べたら、こだわりそのものは少しも醜くなんてないよ

「アキラ君…」

「大切なのは、変化そのものじゃなくて、その行き先、方向を間違えて、しかもそれに固執してしまうことなんだ。

誰だつて、迷つて、悩んで、そして道を間違えることがある。若しかすると、今、真琴は間違つた先で固執してしまつているのかも知れないな……

「……大丈夫。そんなにも自分を責める必要なんてないよ」「だつて！……だつて、あたし……大切なフォンちゃんにだつて、あんなに酷いことをして……」

「それだけ、真琴が『真剣』なんじやないか」「そうだけど！……だけ……」

必死の表情で訴えてくる真琴を、アキラは足を止めると真っ直ぐに見据えた。

「真琴。もう一度、言つよ。

『真琴自身』は少しも変わつてなんていないんだ。俺も彼女も、そんな『真琴自身』が好きだから、許せたんじやないか。

……大丈夫。真琴は少しも醜くなんてないよ
なんて優しくて、深い想いなんだろう、……

……でも……

「……やつぱり、ダメ。あたし、そんなことで、納得出来ない。

『ごめんね、素直じやなくて……』

嫌われてしまつかも知れない……だが、納得出来ないことを「出来る」と言つことは、真琴には無理だつた。

『彼』には嘘を吐きたくない……真琴に出来るとすれば、隠すことだけだらう……

『晃のお兄ちゃん』のことを隠していいように……

ますます、落ち込んでしまう。足下の小さな流れや草木の囁きに抱かれながらも、真琴の心は一つも晴れそうになかった。

折角の、一人きりなのに……

……だが、一方で、こんなことを話せる『今』を喜ぶ心もあるのだ。

『真琴は、本当に素直だと思つけどな。ただ、納得出来ないのなら、その理由……いや、真琴自身の考えを教えてくれないか』

「……」

アキラの静かな言葉に、真琴は難しい顔で腕組みしてしまった。
「だつて…あたし、アキラ君やフォンちゃんから、とっても大切に
想つてもらつてるし……裏切られたり、酷いことなんてされてない
もん」

少し歩いてから、真琴は漸く言葉を紡いだ。

その傍へと歩み寄りながら、『彼』は重く声を押し出していた。

「…そう思つのかい？」

「…え？」

驚いて振り向く先から、静かな視線がじつと自分に向けて注がれてくる。

「俺だつて、不安や心配にはなるんだよ。あの小柄な、優しい少女だつてそうだらう。

誰だつて、その心の表面に醜い泥を持つようになる。それが『大人になる』ということなんだ。

真琴は凄いと思うよ。俺には、とてもそんな風に、素直に自分の心を相手に告白したり出来ないからな。自分ばかり責めてる真琴を見ると、俺は何て酷い奴なんだらうな、って思うよ……」

「そんな…」

「…『真琴自身』が変わらなければいいんだよ。俺がこんなことを言つてるのは、諦めかも知れない。妥協かも知れない。

だけど、こゝも言えるだらう。

俺は『真琴自身』を『好き』になつたんだ。真琴の本当の姿を…今はまだ、きっと少しだけど…好きになつたんだ。そんな、表面の泥なんて包み込んでしまつくらいに……な…」

「…ありがと…」

知らず、涙が溢れてくる。

…立ち止まっている真琴の前で、『彼』も微動だにしなかつた…

…そう、人を『大切』にすればするほど、変わつてしまつところがある。だが、それらをも受け入れ、その方向を…標を違わずに歩んでいけばいいのだ。アキラにも、弥生にも、汚点はある。

決して、「自分だけ」ではない。

「…ねえ、アキラ君。

本当に、こんな我儘なあたしでも…『好き』になつてもらつてい
いの…？」

少し赤くなりながら、それでも正面から真つ直ぐに『彼』を見詰
める。

濡れている瞳を見返し……『彼』はゆっくりと頷いてくれた…

「真琴こそ、こんなに頑固で口煩い奴で構わないのかい？」

「勿論よ！ あたしだって、『アキラ君自身』を『好き』になつた
んだから」

…ふつと黙り込んだ後…柔らかな微笑みを、互いに交える…

やがて、二人は並んで再び湖畔を歩き始めていた。

水鳥達が岸辺に群れ、差し込んできた夏の陽光も水面に銀の粉を
敷き詰めている。雲は去り、太陽は持てる力の全てを黄金の光に変
え、等しく大地を煌かせていた。

バス停が近付くにつれ、歩みが遅くなってしまう。

弥生はもう一度、確かめるように自分の服を眺めていた。

もう、幾度こうして見たことだろう。何回見ても、やはり自分に
は似合っていない気がする。可愛い服だとは、思うのだが…

昨夜、真琴に電話した時、約束などしなければよかつた。

だが、弥生には断ることも出来ないのだ。

勿論、真琴はそれも分かつていて、それでも勧めてくれたのだと
う。

他人から見れば、変ではないのかも知れない。

（雷君は……）

どう思うのだろう？ それが分かつていれば、こんなにも苦しん
だりしないのだが…

今日、初めて袖を通したブラウスに光を遊ばせながら、弥生は一
大決心と共に建物の陰から姿を現していた。

「やつた！ 来てくれたんだな」

途端に、嬉々として弾む声が耳に飛び込んでくる。

弥生もすぐに『彼』の姿を捉えると、はにかみながら、それでもきちんと歩み寄っていた。

その雷が、じつと自分のことを見詰めている。

少しだけ瞳を大きくする『彼』を見て、弥生は恥ずかしそうに頬を上気させると囁いていた。

「……やつぱり……おかしい……？」

慌てたように、急いで首を振っている。

心なしか赤くなりながら、『彼』は応えてくれた。

「全然、おかしくなんてないよ！ すっごく可愛いから、その……うわあ、なんかドキドキしてきた」

正直に浮つく『彼』の褒め言葉に、弥生はこれ以上無いくらいに赤くなってしまった。俯いた頬から胸元までが、美しく染め上げられている。

……こんなにも、胸が大きく鳴らなければいいのに……

互いを前にして、黙り込んでしまった二人の間へと、やがてバスのエンジン音が滑り込んでくる。

少しほほとした表情で、雷は改めて弥生を見て言った。

「ありがとう。俺、正直言つて、来てくれるかどうか自信が無かつたんだ。

「……本当に、嬉しかったんだぜ？」

「……うん……」

二人の横で、バスが停まる。

雷は何気無く弥生の手を取ると、先になつて乗り込んでいた。

「あつ……」

今まで、男の子と手を繋いだことなど無いのだ。

泣きそうになりながら、それでも弥生は逃げ出さずに『彼』の後に続いていた。

……『彼』の手から、温かな何かが流れ込んでくる気がする……

(… マ「ちやんみたい … …)

少し、違う温もりだが … … ずっと身を浸してみたい、 黄金色の光の海だ。

… そつと … … 本当に、そつと … …

弥生は気付かれないように、その手を握り返していた … …

「ほら、こっちだ」

電車を降りてからも、ずっと、雷が一人で話しかけてくれる。その勢いに少し困りながらも、弥生は嬉しそうに『彼』の言葉に耳を傾けていた。

ずっと握り合ったままの手を引いて、『彼』は大きな道を外れて右手の森の中へと曲がろうとしている。

人の手のあまり入っていないだらう木々が、頭上に複雑なアーチを描き、その下では夏の陽光も厳しさを弱めていた。

つつすらとした涼気が、静けさと共に弥生の体を抱き止めてくれる … …

「ここは、まだ人が多いんだ。こっちに入ろう

そう言つて、すぐにまた、右手に折れてしまう。

弥生はただ、導かれるままにその後に続いていた。

剥き出しになつた大地には、小石一つ落ちていない。足下の道幅は狭く、両側は少し立ち上がりつて森の黒土へと繋がつていた。

二人が歩む左右には、薦や苔を纏つた巨木が立ち乱れている。薄暗い青葉闇を背に、所々で光が斜めに射し込んでは流れていた。

心地好い静寂を、そつと優しく受け止める。自分を包んでくれている大気そのものが、町や住宅地のものとは違うのだ。

今、弥生が深く吸い込んだ空気は … 素敵な『何か』に満ち溢れた『自然』 … それ自身だった。

「よかつた。気に入つてくれたみたいだな

喜びに彩られた声に瞳を向けると、弥生はしっかりと頷いていた。

こんなにも、自分みたいな人間の為に頑張ってくれる … …

……だが、自分はそんな『彼』に何をしてあげられるのだろう……ふつ……と瞳を翳らせるが、弥生はそっと口を開いていた。

「……ありがとう……でも、私、何も、出来なくて……」

「何かをしてもらおう、なんて少しも思ってないさ。ただ、橘に喜んでもらいたいだけなんだ。俺、橘がずっと傍に居てくれるだけで、夢みたいに思えてくるんだからな」

「そんな……」

だが、実際に、弥生には黙つて傍に居ることしか、今はまだ出来ないだろう。

……きっと、無理をしても『彼』は喜ばないに違いない。

弥生ははにかみながら小さく頷くと、しつかりと『彼』の手を握り締めていた。

彼女のそんな一生懸命な応えに雷は顔を輝かせると、ぎゅっ！と力一杯手を握り返して急ぎ始める。

「もう少ししたら、俺の気に入つた場所があるんだ。俺、町や人に疲れた時、よくここまで来るんだよ。前に住んでた香篠町にも、よく似た場所があつて……」

「……！」

思わず、足を止めてしまう。そんな弥生に、雷は驚いて言葉を切つてしまつた。

「……どうしたんだ？ 橘」

振り返る『彼』を、弥生は瞳を大きくしながらじっと見詰めていた。

「……橘？」

「私、も……」

震える声が、やつと流れ出していく。

「……私も、……香篠町に、住んでいたの……」

「ええっ？」

今度は、雷の方が啞然としてしまつた。

二人とも、暫く何も言えずに、ただ互いの視線を受け止め続けて

いた。

「何だか、胸元に温かな波が押し寄せてくる。

弥生はその波に素直に応えながら、みるみる瞳を濡らしていった……

「橋……」

「嬉しいの……」

『たつた一つ』の『偶然』だ。

だが、弥生にしてみれば、それはとても大きな『偶然』だった。今、確かに、『彼』を自分のすぐ傍に感じることが出来る……。頬を流れ落ちる涙を拭おうともしない弥生に見詰められて、雷は照れながらも呟いていた。

「驚いたなあ。俺、前には橋のことなんて、ちつとも気付かなかつたのに……」

「……」

弥生は黙つたまま、頬を染めると視線を落としてしまう。

「よかつた……」『彼』に気付いてもらえて、『本当』によかつた……

「行こうか」

「うん……」

何を言つていいのか分からず、雷は取り敢えず再び歩き始めた。

それ程進まないうちに、小道の行く手が少しだけ広がつてくる。やがて、一人は森の中に佇む小さな空間に立ちつくしていった。何年もの時間をかけて降り積もつた枯れ葉が、地面を等しく覆っている。入つてみると思ったよりも広く感じられるその空き地は、緑葉の厚い天井が頭上に張られており、小さな欠片となつた青空がその所々に覗いていた。

空間の中を鋭い切れ込みが走り、その先からせせらぎの微かな調べが聞こえてくる。深く優しい音色のすぐ傍には丸太が無造作に転がつており、『彼』はそこまで弥生を誘つてくれた。

「ここまでは、滅多に誰も入つてこないんだ。こんな場所なら、平氣だろ?」

「うん……ありがとう……」

「にっこりと微笑む先で、『彼』が照れて目を逸らしている。

そんな仕草に、弥生は一層微笑を深めていた。

並んで腰掛けると、『彼』は大袈裟に伸びをしてみせる。

「俺、やっぱり信じられないや。自分の秘密の場所に、橘と一緒に居るなんて」

「……」

「あつ、橘、気にしないで本を読んでくれても構わないからな。その小さなカバンの中に、入ってるんだろ?」

雷の言葉に、正直に弥生は頷いていた。

「今日は俺、もう何も話さなくてもいいや。橘も、無理しなくていいからな。

少しずつでいいから……その……これからも、逢ってくれるなんら
……だけ……」

返事を気にして、『彼』がちらりと自分に目を向けたのが分かる。弥生は自分でも驚いたことに、しっかりとした口調で『彼』を見上げて応えていた。

「うん……これからも、ずっと……」

「橘!」

弥生の一言は、とても重いものだ。

雷は思わず立ち上がり、空き地の中を意味も無くただ歩き回っていた。嬉しくて、何をしたらいいのか分からぬのだ。じつなどしていられない。

そんな『彼』を見てくすくす笑い声を上げると、弥生はそつとカバンから文庫を取り出して読み始めていた。

すっかりと緊張の解けた弥生を、一筋の光の幕が照らし出す。

夏の陽光は彼女の全身に光の粒を撒き散らし、途切れない道筋を青葉闇にいつまでも描き続けていた……

……いつまでも……

湖畔でアキラと逢つたその日の夜、真琴の夢の中へと『過去』が再び忍び寄り、彼女はそこに幼い『自分』の姿を認めていた。

泣いている…又、必死になつて、泣いている…

近頃、随分と泣き虫になつた気がする。

この小学三年生の自分も、そんな『今』に呼応して、泣いているのだろうか…

「いやあ！ あたし、絶対、引っ越しなんてしないんだからあ…」

暗闇に広がるその言葉に、『自分』を見下ろしていた『自分』は、両手を強く握り締めてしまつ。

…胸の奥が、熱い溶岩で満たされ…力一杯、唇を噛む…

そう…小学三年生の二学期…自分は、初めて引っ越すことを見られたのだ…

…痛い…体の芯が、痛い…

宙に浮かびながら、『今』の真琴は体を丸め、両手で自分自身を抱え込んでしまつた。

(…嫌…聞きたくない…)

次に『自分』が叫ぶ言葉は、よく分かつてゐる…もう、一度と思いつつ思い出したくない言葉だ…

小さな『自分』が、幼い口を開いている…

きゅっ！ と口を開じても…

…見えるのだ…一生懸命に叫びつと/orしてゐる『自分』が…

「やめて…」

そう、怒鳴つたはずだつた…

だが…意志に反して、真琴は『過去』に会わせて、同じ言葉を

叫んでいた…

「ひどいっ！ みんな、ひどいよお…

勝手に、晃のお兄ちゃんを取り上げて… 今度は、大好きな友

達や町まで、あたしから持つてくの？

あたし、あたし…『大切な物の』、全部、失くしちゃうじゃない

…！」

全身の力を込めて、絶叫する……

その『言葉』はいつまでも胸中に響き渡り…真琴は、大声で哭き出してしまった……

…ピッ…

…パンッ…

『過去』に…『今』に、細かな鱗が入っていく…やがて、映像は破片となつて飛び散り…

…『全て』は、闇へと戻つてしまう。

その闇にただ独り残され…真琴は、いつまでも涙を流し続けていた……

窓から射し込む朝の光が、濡れた頬を照らし出す。乾く間も与えられずに光の粒子を弾き続けた、その幾筋もの流れに漸く温もりが宿り始める頃…

…ゆつくりと、真琴は瞳を開いていった。

溢れる涙を拭いもせず、不意に跳ね起きると黙つたまま机に走り寄る。

大きな引き出しを無造作に引っ張ると、真琴は中から銀行の通帳を取り出していた。

中を見て、充分な金額があることを確かめると、そのまま急いで身支度を整える。

長い髪を首の後ろで束ねるのもどかしく、真琴は通帳だけを握り締めると、部屋から飛び出してしまった。

まだ、誰も起き出してはいない。

朝食を摂ることなど頭に浮かびさえもしなかつた。

洗面所で少しだけ立ち止まつた後、真琴はすぐに早朝の町の中へと飛び出してしまう。

……ずっと、黙り込んだまま。

心も、何も考えようとはしない……

ただ一つの思いだけが胸を占め、それを成す為だけに、真琴は足を早めて駅の構内に駆け込んでいた。

……生まれ育つた町まで帰る。……

ずっと……『晃のお兄ちゃん』のことを想い出してばかりだ。

今戻れば、断ち切るどころか、一層、胸中に残り続けてしまうかも知れない……

……だが、それでも構わない。

……『過去』は、『今』の自分を探しているのだ……

その呼びかけに、どうしても答えなくてはならない気がする……

(アキラ君……)

一瞬浮んだ名前に、心臓が握り潰される。

電車の中で腰掛けながら、真琴は強く瞳を閉じてしまった。

今していることは、『彼』への裏切りになるのだろう。……自分は、『過去』を見付け……そして、もう一度、『晃のお兄ちゃん』を取り戻すつもりなのだから……

……だが……

『今』のままでは、いつまでも同一視を繰り返してしまう。『全て』の『大切なものの』を、もう一度と、失いたくはない……もう、決して、あんな想いはしたくない……

だから……『過去』へと戻るのだ……

途中で一度電車を乗り換え、大きな駅の構内へと入る。

お金を引き出した後、真琴は新幹線の切符を買って、そのまま乗り込んでいた。

ずっと……ずっと、黙り続けている。

……自分は、『過去』と『今』、どちらを選ぶのだ？……？

……どちらかを選択しなくてはならない。

ただ、それには呼びかけてくる『過去』に応え、『今』と同じ位置まで引き上げなくてはならない。

近頃の『夢』は、そのことを自分に訴えているのだろう。

いや……『過去の自分』が、『今の自分』に訴えているのだ……

……今なら、分かる。

……自分は、『晃のお兄ちゃん』を、生まれた時からずっと『好き』だったのだ。

アキラと同じくらいに、『好き』だったのだ。

別れてからの反動などでは決してない。

『本当』に、自分は『彼』を『好き』なまま、失つてしまつたのだ……

(お兄ちゃん……お兄ちゃん……)

……今まで、『大切な物』は人ではないと思つていた。

勿論、趣味を始めとする、多くの存在を示してはいたのだろうが……だが、それは無意識のうちに事物へと視線を逸らせていただけにすぎない。

最初から、そこにあつたのだ。

最も『大切』だからこそ、絶対に失いたくないからこそ、逃げていた存在……

……それは、間違いない、『彼』だった。

そんな自分の前に、アキラが現れ、最も『大切な物』になろうとしている……

(お兄ちゃん……あたし、どうしたらいいの……?)

……どちらを選べばいいの……?

……分かつている。

『過去』を選んだ時、自分は光の小道を失い、そして……

……そのまま、『今』を生き続けることも難しくなるだろう……

だが……分かつてはいても、捨て去れないのだ……いや、捨て去れなかつたのだ。

『全て』は、今日、決まる。

真琴にはそれが解つていた。

ふと気付けば、いつのまに数時間もの『時間』が流れ、新幹線は目的の駅へと入っている。

慌ててホームに飛び出すと、真琴は二両しかない小さな電車に乗り換えていた。

あと、一時間だ。

最後尾に座りながら、窓の外に見覚えのある景色を認め、真琴は唇を噛み締めていた。

どちらを選んでも、後悔はしない。

線路脇のトウモロコシ畑が目に飛び込んでくると、真琴は静かに席を立つていた。

気付けば、朝から今まで一言も口に出していない。

だが……『言葉』は『何か』を求め、彷徨い続けているのだ……

派手な音を立てて、ドアが左右に開く。

懐かしい空気に触れ、穏やかな風の中へと降り立つた時……

……真琴は、ホームの行く手に、もう一人、同じ電車から降りた人がいることに気が付いた。

こんな小さな町に、珍しい……そう思いながら、前を行く人の背中に目を止めた瞬間……

……真琴は、見覚えのある服装に、思わず足を止めてしまった。

……間違えるはずがない。

そう……『彼』だ。

だが……どうして……

真琴は驚きに心を激しく乱しながら、それでも声を掛けようとしていた。

「ア、キ……ラ……」

その時、背中のリュックに視線が吸い寄せられる。

そこに吊られているものを見て、真琴は息を飲み、言葉を失った。あれは……

……あの、ぬいぐるみは……

真琴の声に気付いたようだ。『彼』は振り向くと、急いで背中を隠そうとしている。

だが…

…だが、真琴の目には、はっきりと小さな女の子のぬいぐるみが焼き付いていた。

…そう…あれは…自分が…

「…やつぱり…やつぱり、そつだつたんだ…

やつぱり…やつぱり…

…そつだつたんだ…

あれは…『晃のお兄ちゃん』に贈ったものなのだが…

がくがくと、膝が震え出す。

全身から不意に力が抜け、真琴はその場に頽れてしまつた…

慌てて駆け寄ってきた『彼』が、力強く支えてくれる。

…そのまま、力一杯、『彼』は抱き締めてくれた…

『彼』の胸に縋りつき、強く額を押し付けると声を絞り出す…

「…あたし…疑つてた…

でも…そんな自分が嫌で…

…でも…でもね、…願つてたのよ…?

…ずつと…一緒だつたら、…つて…

…『お兄ちゃん』…

次の瞬間、真琴はわっと哭き出してしまつた。

声を上げ、必死になつて…

…全身で、真琴は哭き続けていた…

…ずつと…ずつと、哭きたかつたのかも知れない…

『彼』の腕の中で、哭きたかったのかも知れない…

…《全て》の想いをぶつけながら…真琴は、いつまでも、涙を流し続けていた…

頭上から降り注ぐ夏の眩しい光の中、銀の風に抱かれ『言葉』が

『時間』の流れへと滑り込む。

『過去』と『今』を貫く小道は、その《真》の想いに日映く煌き

…『大切な物』を『未来』へと敷き詰めていた……

想いを噛み締めるような沈黙の後、女性DJは静かに続けた。

谷口 晃君の手紙には、最後にこう書かれています。

「僕は、『シルヴィー』の店で彼女の名前を聞いた時から、彼女が『大切なマコちゃん』であることに気付いていました。ですが…僕は、彼女の『兄』ではなく、『恋人』になりたかったのです。

こんな手紙では書き切れない…口にすることすら出来ないほどの葛藤がありました。

それでも、自分の想いに嘘は吐けなかったのです。

『大切な人』を忘れるほど、不幸なことはありません。偶然という名の必然が与えてくれた機会を、僕は想いに従つて受け止めることにしたのです。

今では、僕もそれで良かったのだと断言出来ます。

彼女に、僕が『過去』の人間だと知られても、別に構わなかつたのです。

彼女がそうであつたように、『僕自身』も変わつていなかつたのですから…

彼女にとつては、始めから選ぶものなど無かつたのです。そして、それは僕にとつても同じでした。

『兄』と気付き、認め、『過去』を選んだ時…今迄に何度も重なつていた小道が、平行に並んでしまうかも知れない…同じ方向へと伸びるだけの、交わることの無い、ただの一本の小道に…

…それは、僕が望んでいた一本の小道ではありませんでした。

ですから、彼女と『一本の光の小道』を共に歩むには、『過去』を棄てなくてはならない…僕は、そう信じていたのです。

ですが、僕は『彼女自身』を愛していました。

それは、始めてから『一つ』でしかありませんでした。光の小道は、いつでも、『ただ一つ』でしかなかったのです…

今、僕達は『大切なものの』を一人で少しずつ増やしていくことをしています。その中には、きっかけの一つを『教えてくれた、この番組も加えられているのです。

長い間、こんなにも拙い文章を読んでいただいて、本当にありがとうございました。

これで、僕達の話を終わりたいと思います。
これからも、頑張ってください。応援しています

柔らかなBGMだけがラジオから流れ続け、緩やかな音色が一層の静寂を醸し出す。

その一瞬後、彼女はそっと囁いていた。

…いいえ、話は終わってなんていません。

今から、始まるのです…

白銀の風は星達を瞬かせ、遙かな無限を目指して虚空を遠く滑つていく。

『時間』の流れになど囚われぬまま…
…何処までも…何処までも…

第一部『光の小道』おわり

光る小道は『歴史』の路

今と久遠を編み込みし

銀光綴る黄金の舟

誰が其の軌

誰が夫の途

定むるぞ
……

マグカップから立ち上る、コーヒーの豊かな香りの向こう側。小さなラジオのスピーカーから、柔らかな女性の声が流れ出している。

今週も、『素敵』なことに巡り会えたでしょうか。

今は、水口 真結です。

今夜は早速、気になるハガキがあつたので、読んでみたいと思います。

大阪市に住む、『茜色の夕風』さんからのハガキです。

「今日は、どうしても聞きたいことがあつてハガキを書きました。私は中学一年生なのですが、いつも周りのみんなからは子どもだ、子どもだと言われています。背が低いことも原因かも知れませんが、それよりも、私の考えが幼稚なんだそうです。

確かに、私には他のみんなよりも《ロマンチスト》などこりはあります。

白馬の王子をまではありませんが、赤い糸や《偶然》を今でも信じてるんです。

だって、不思議だと思いませんか？

これだけの人の中から、たつた一人だけを選んで一緒になるんですよ？

私には、それはとてもスゴイことに思えるんです。でも、みんなは言います。

《偶然》なんて待つってても、恋人は出来ないよ、って。たくさんの恋人を捨てて、それから結婚するんだ、って。

私には、分かりません。

どうして、そんなに何人もの人を『好き』になれるんでしょう？

私は、『たつた一つ』でいいんです。

：でも、きっと、こんなことを疑問に思つから」ハセ、みんなが子供も扱いするんでしょうね。

お願いです。水口さん、教えてください。

『たつた一つ』の『偶然』、奇跡や運命はあるんでしょうか。そして、それを夢見てもいいんでしょうか。

お願いします。どうか、水口さんの意見を聞かせてください。変な文章で、『めんなさい』

消え入るように、声が途切れる。

暫しの間、闇の中を穏やかなBGMだけが満たしていた。

： 私なら、『偶然』も、奇跡も、運命もあると思います。

ずっと一緒に暮らしていく人と出逢いを言えば、それは確かに『たつた一つ』ですし、更にもっと多くの『偶然』が、あらゆるところで、毎日積み重ねられています。

これからするお話は、随分と長くなるので電波に乗せていいのかどうか、迷い続けたのですが……私は、今夜から何週間かに分けて一つのお話をしたいと思います。それが嫌だと思われた方は、局の方までどうぞ抗議のハガキを出してください。私自身、まだ迷いがあるので、そのご意見は大切にしたいと思っています。

このお話は、実は私自身のことなのです。

これが直接『茜色の夕風』さんへの応えになつているかどうかは分かりませんが、その手がかりにでもなつてくれればと願っています

……

不意に、一陣の風が窓ガラスにぶつかつてくる。

一瞬の静寂の後、彼女の話は始められていた……

昨日までの細雪は、小春日和の暖かな日差しに照らされ、その儂い身を大地へと還している。

天蓋には青く澄んだ中空のみが広がり、風は白雲一つ遊ばせず、緩やかに地平を目指して通り過ぎていった。

「ほら、真結。これが『大塚の櫻』よ」

その風に、まだうら若い母親の声が乗る。続いて、赤ん坊の愛らしい笑い声も、大気の中へと溢れ出していた。

母親は、そんな首の据わっていない真結に、黒く汚れた立て看板を見せている。

墨が流れる木板の向こう……そこに、巨大な櫻が聳え立っていた。
……本当に、大きい。大人が三人がかりで、漸く囲えるほどの大
きな幹だ。

「ここにはね、昔から神様が住んでいらっしゃるそうよ」

優しく真結に話しかけながら、母親は立て看板を回り、巨木の根元へと歩み寄つた。

陽光が柔らかな敷布を広げる根の間に、小さな祠が祀られている。その前には、今でも毎朝、新鮮な草花がそつと静かに添えられている。

た。

「……でも、まだそんなこと言つても、分かんないわよねえ」

同意を求めて覗き込む母親に、赤ん坊はきゅつ！ と握り締めた手を僅かに動かしてみせる。

そんな仕草一つが愛らしく、美しい微笑みが頬に浮かぶ。

果てなど無い蒼穹から届く冬の光は、櫻にしては粗雑な木肌に、斑の影を描き込んでいる。

赤ん坊が見上げる遙かな先では、細やかな枝の霞が、残った枯れ葉と共に青い空を無数の破片に区切り取つていた。

高さは、凡そ二十一メートルはあるだろうか。何処までも太く真つ直ぐな幹が支えているのは、軽く被さる枝葉の傘だ。その微細な枝の影によるものか、凹凸の激しい幹であつても、その荒々しさよりは柔軟な曲線に目が留まる。

見事な樹へと惜しみない感嘆の視線を送りながら、母親は暫く黙り込んでいた。

だが、不意に腕の中に動きを感じ、慌てて赤ん坊に手を落とす。見れば、真結が櫻の裏手に首を向けようと、身を伸ばしている。だが、寂れた村はずれにある『大塚の櫻』の裏手は、すぐ山の裾野へと繋がっており、藪以外には何も無いはずだ。

「真結？ 何かいるの？」

母親は櫻を囲む堀に沿つて裏へと周り、少し辺りを見回してみた。だが、別に何も変わった様子は無い。

隣接する慈光寺の前の僅かな草地から、その先へと続く家並みまで…自分達以外には、誰も見えないのだ。道を挟んである公園にも目を向けてみるが、走り去る背中さえ見当たらない。

「…まさか、森に入るなんてねえ…」

いや、この辺りの子どもならあり得ることだ。何より、自分がそうだったのだから…

「…ジユツ！ ムン…」

唾と共に吐き出された声に、母親は自分の宝物を見下ろしていた。胸元では、赤ん坊がその小さな手を、必死に櫻まで伸ばそうとしている。

「どうしたの？ 触りたいの？」

細く柔らかな指先が広がり、『何か』を掴もうとしているのだ。愛らしい紅葉が、開いたり閉じたりを繰り返す。

きょとんとした表情の母親に抱かれて……今、真結はその大きく円らな瞳で、風に遊ぶ豊かな黒髪を認めていた……

温かな幹に背を預けた少女は、そんな赤ん坊にそっと微笑みかけてくる……

「ツチユ、グツ、ブウ…」

言葉にならない『言葉』で尋ねているのに、少女は嬉しそうに『言葉』

大塚の櫻』を見上げるだけで、応えてはくれない。

……ザザツ！

突然、櫻の幹が黄金色の泡に包まれ、少女は夏の陽光に輝き出す。梢から葉擦れの波が途切れることなく届けられ、赤ん坊は未だ知るはずのない存在に囮まれながら、思わず澄んだ瞳を閉じてしまった。

「あら、もうねんねするの？ ジャあ、初めてのおんもはこ今までね」

母親の言葉に、真結が目を開けてみると…

……最早、そこには、冬の青く澄み切った空しか見つからなかつた…

あの少女も消えている。

覗き込む、母親の柔らかな笑みに、先程の少女の微笑を重ねながら…

…本当に、赤ん坊は小さく欠伸を零していた。

きゅつ、と手が丸く閉じられ…やがて、ゆつくりと心地好い眠気が赤ん坊を満たしていく。その黄金色の海に身を委ねながら、真結は母親の胸に頬を寄せていた。

銀色に煌く風が、美妙な枝の隙間を抜けていく。

『未来』の青葉を波立たせながら…いつまでも…いつまでも…

腰の辺りまで真っ直ぐに伸びた黒髪が、曇天の薄日に淡く輝いている。

中学生も一年目になつた少女は、車の多い表通りをケー・キ屋の前で左に折れ、薄暗い路地へと入つていた。

夏休みになつたばかりだと言うのに、空も心も、なんて冴えない悲しみに満たされているのだろう。円らな瞳で足下だけを見つめる真結には、夏の熱氣や蝉の声も、今は騒がしい嫌悪の対象でしかなかつた。

一本目の脇道を、目も上げずに通り過ぎる。

夏休みになるまでは、美鈴と、何処に出かけるのか、そればかり相談していたのに……

……そり、自分も美鈴も、夏休みをこんな惨めで悲しい時間にするつもりなど、少しも無かつたのだ……
だが……どうすることも出来ない……真結には、それもよく分かっているつもりだった。

古びた銭湯を右に見ながら、路地は一筋目の小道へと突き当たる。その時になつて、漸く、真結は漆黒の澄んだ瞳を灰色の空へと向けた。

右手に、寺や家並みの瓦を大きく抱き込みながら、鮮緑の屋根が天に広がっている。浅緑は白い風に優しく愛撫され、無数の枝葉によつて柔らかな波紋を描いていた。

その天蓋は威圧感など決して面に出さず、それどころか、纖細なまでの慈愛を醸し出している。

温かな緑葉の波を目にした途端、真結は胸元が熱くなるのを感じていた。

(ううん……まだ……まだよ……)

そう……まだ、涙は見せたくない……

きゅつ！ と下唇を噛んで真結が足を早めた瞬間、狭い小道の上に黒く大きな点が一つ生まれる。

その点は次第に数を増やしていき、やがて、真結の上にも天の涙は降りかかっていた。

自らの想いを代わってくれた小雨に身を包まれながら、真結は慈光寺を過ぎると、すぐさま左手に飛び込んでしまう。

十四年間通り続け、すっかりと見慣れてしまつた巨木の根元まで来ると、雨粒も翠の天井に遮られ大地までは届かない。

僅かに息を切らせながら、そのまま真結は『大塚の欅』の裏手へと回った。

鬱蒼と茂る森の木々を前に見ながら、柔らかな欅の肌にそつと寄りかかる。

優しく背を受け止めもらつた瞬間、初めて、真結はその頬に涙を零していた…

想いを我慢することも、周りを気にすることも無い。

いつも、この木の許で真結は心のままに振る舞つてきた。

…そして、今も、大きな悲しみを泪と共に訴えていく…

やがてゆつくりと膝を折り、地表に波打つ根の間で、真結は顔を伏せてしまつた…

苦しげな嗚咽が、美しく調つた唇から溢れ出す。

大地を叩く雨になど負けない重さで、悲痛な想いは風に運ばれ…全ての存在へと静かに受け止められていた…

どれ程の時が流れたのだろう。

しゃくりあげる声も、ゆつくりと潮のように引いていき…やがて

一つ、真結は小さく深呼吸をした。

欅にしては凹凸の激しい太い幹へと頭を預けると、掠れた声でそつと囁き始める。

「…あのね…今日、みっちゃんに急に呼び出されたの… 夏休みにな、何処かに行こう、って相談してたから… 日程でも決めるのかな、

つて……そつ……思つてた……

再び、頬に煌きが宿る。

頭上から零れる優しい雨音に励まされ、瞳を閉じると真結は静かに続けていた。

「……急にね、……カナダに引っ越すんだ、つて……

みつちゃんも泣いてたのよ……

私、……何も言えなかつた……

そう……あの時は、何も言えなかつたのだ。

……こんなに辛くて、悔しくて……悲しい想いも……

「……あなたに、分かるかな……カナダが、どれだけ遠い所なのか……

電話も、手紙もある。会うことだって、不可能ではない。

だが、そのどれにも「費用」という名の化け物が立ち塞がつてくるのだ。中学生の真結にとって、その化け物は乗り越えて行くことが難しいものだつた。

いつしか雨は音を消し、時折、天蓋から雨が滴り落ちてくる。『大塚の櫻』に護られた小雨の壁の小部屋で、真結は素直に想いを綴り続けた。

「……でもね、私より……みつちゃんの方が辛いはずなの……

大好きな人や、町や、お店や、学校や……

……とっても沢山のものとお別れするんだもん……」

『言葉』は途切れる事無く、櫻の中へと溶け込んでいく。『音』になるものも、そうでないものも、『全て』を受け入れながら、櫻の樹は温かな懷に真結を抱き留めていた。

「……きっと……みつちゃん、負けそうになると思つたの……だから、ね

……？……私、絶対に手紙を書くから、つて……

……大人つて、気楽よね。……新しい経験が出来るじゃない、つて

……若いから、すぐに言葉だつて覚えて……向こうでも、友達が出来るよ、つて……」

そんなことに、一体、何の魅力があるのだろう? 真結や美鈴にとって大事なことは、今、この瞬間から『大切な物』、その『全

て』の存在を喪失することなのだ。『寂しさ』などと、たつた一言で片付けられるものではない。

十四年もの間、ここで、この地で、育ててきた想いを失うのだ……

「みつちゃんね……泣きながら、呟いてた……

『眞』があたしに、お前なんて死んでしまえ、つて言つてくるみたいなのよ。『つて……』

言葉を押し出した瞬間、胸の奥をぎゅっと握り潰された気がして、眞結は、思わず身を縮めてしまった。

ふと、豊かな黒髪に柔らかな指先が触れる。

吹いていない風に導かれ、眞結は少しだけ目を開けると、顔を上げた。

天を貫く樹冠の先で、広くて優しい枝葉が細やかな想いを籠めて、さ緑の光を送り届けてくれる……

「……」

溢れ出す『言葉』を暫く見つめた後、眞結は木肌にそっと頬を寄せた。

「……ありがと……いつも、励ましてくれて『

触れている想いの確かさを感じながら、眞結は面にゅっくりと微笑を浮かべていった。

「……うん、……負けたりしない。私も、みつちゃんも……

『気持ち』つて、距離や回数じゃないもんね……

『本当』つて、そんなもんじやないもんね……

再び、風が応えてくれる。静かな葉擦れの囁きも、そつと眞結を包んでくれる。

「……あなたが居てくれて、『本当』によかつた……ありがと……、いつも、私を慰めてくれて……」

そう、どれだけこの櫻に助けてもらつたことが……

濡れた視線の先には、懐かしい一本の根が見えている。

それは丁度、土から出た部分が平らになつて、横に伸びていた。

幼い頃、独りの時に、よくあの根をテーブル代わりにしてままご

とをしていたものだ。お気に入りの黄色いプラスチックの器を持ち出しても、厚く積もつた枯葉と土を混ぜ合わせ、見えない誰かに食べもらっていた。本当に誰かに食べもらっている気がして、嬉しくて仕方がなかつたことを覚えている…

ままごとをしようとも思い付けないくらいに悲しい時には、ただこの樹の根元まで駆けて来ると、今、こうして座り込んでいるこの場所で、丸くなつて泣き続けていたものだ。

たつぱりと昼の光を吸い込んだ枯葉は温かく、ふわっとした香りでいつも真結の小さな体を優しく包み込んでくれていた。かさかさと服の下で動く落ち葉のくすぐつたさにも慣れてしまうと、そのままいつしか眠つてしまつたことも度々だつた。

大好きな『大塚の欅』の下でぐっすりと眠ることほど、辛い出来事を忘れさせてくれるものは無かつたのだ…

…様々な過去が、この欅と結びついて真結の目の前に繰り広げられていく。

なんて素敵な思い出だらう…

「…『本当』に、ありがとう…」

この言葉の中に、どれだけの想いが含まれていることか…

その時、不意に、恐ろしい未来を思い浮かべ、真結は心の底からぞつとしてしまつた。

…美鈴は、突然、この町と別れることになつたのだ。

それが…若しも、自分だつたなら…

「…ね、え…私、も…いつか、…あなたと、お別れ、するのかな

…」

深い絶望感に襲われる…

絶対に、そんなことになりたくない。

…だが、悔しいことに、自分だけではどうにもならない『力』があることも、真結には分かつていた…

…またも、頬を涙が伝い始める。

夏休みも始まつたばかりだというのに、どうして、いつも暗く悲

しことばかりが心を過ぎつていいくのだらう。

暫く音を消していた雨も、再び強さを増したようだ。

自分の想いに呼応するかのよつた雨音に、真結は一層激しく櫻の幹に縋り付いてしまつた。

「…へえ、これが『大塚の櫻』か。本当に、大きいんだな…」

(…え?)

雨粒が傘で弾ける音と共に、小道の方から不意に声が聞こえてきた。

思いもかけない出来事に頬を上げると、真結はそつと静かに櫻の向こう側を覗き見た。

…ザツ、ザザアア…

遙か頭上の緑葉が、風も無いのに騒ぎ出す。

降り注ぐその音色に包まれて、小さな立て看板の傍に一人の少年が立ち尽くしていた。

…自分と同じくらいの年だらうか。

傘と雨の為に、はつきりと顔は見えない…

(あつ…!)

直後、真結は真つ直ぐ、彼の黒く澄んだ瞳を見つめ返してしまつていた。

少年にしては、大きな瞳をしている。

綺麗な輝きを宿すその双眸に見つめられて、真結は知らず指先に力を籠めると、櫻の幹に縋り付いてしまつた。

胸の奥では、まだ葉擦れの音が続いている…

…いや。…その歌声は更に一層力強く、速く…そして、温かく胸中を満たしてくれていた。

どれくらいの時間が流れたのか…よく分からない。

互いの瞳の奥を覗き込んだまま、二人は共に、その深奥で黄金と銀の海を認め合っていた…

だが突然、その彼の瞳が、ふつ…と翳る。

真結が気付いた時には、既に彼は自分の畳の前で軽く腰を屈め、ハンカチを差し出してくれていた。

「え？ あつ、あの……

…ありがとう……」

そう言えば、ずっと哭き続けていたのだ。…随分と、酷い顔になつていることだろう。

恥ずかしさで頬を上氣せると、慌てて真結はハンカチを受け取つていた。

この巨木の下では、雨も降りかからないのだが…彼は、黙つて傘を差し掛けてくれている。

そんな彼の気遣いを、真結は素直に喜んでいた。

急いで頬の涙を拭うと、立ち上がり、微笑みかける。

「ありがとう……」

もう一度、今度は落ち着いて『言葉』を紡ぐ。

長く美妙な黒髪を背に流し、嬉しそうな微笑みを浮かべた真結の姿に、初めて彼も照れた顔で口を開いていた。

「よかつたよ。怪我をしたわけじゃないんだね

「うん……」

柔らかな口調に応えながら、改めて真結ははにかんだ瞳で畳の前の少年を眺めていた。

こうして立つてみると、自分よりも少しだけ背が高い。肩幅もわりとあって、大柄な感じを受けるのだが…Tシャツから覗いている腕は、細く、筋肉質に締まっている。

それに…何よりも、その柔軟な表情と優しい声がとても印象的だった。

…何故か、先程よりも話し辛くなつて…貸してもらつたハンカチを両手で握り締めると、真結は僅かに俯いてしまつた。

「えつ、と…この樹、凄いね。傘もいらないんだな…」

無理に話題を作るよつに、彼が傘を閉じながら咳いている。

「…気に入った？」

今、初めて逢つたばかりで……本当に、初めてなのに……

……まだ少し、『彼』と一緒にいたい……

何故だろう……？

円らな瞳で彼をもう一度見上げると、真結は分からままにそつと話しかけていた。

「ああ、とつても。

俺、欅の樹がこんなにも大きくなるなんて知らなかつたよ。ガイドブックだけだと、やっぱり分からることもあるんだね」
彼がこの『大塚の欅』を気に入つてくれたことが、無性に嬉しい。その想いの儘に、真結の頬には笑みが溢れていた。だが次の瞬間、きょとんとした表情で彼に尋ねる。

「ガイドブックに、載つてたの？」

地元に住んでいても、知らない若者は多いのだ。祠に花を添えるのも、真結以外には近所のお年寄りばかり。ましてや、観光で来る人など、真結は今迄に見たことも聞いたことも無かつた。

「そうなんだ。ただし、二十年前のものだけね」

「え？」

物問いたげな視線に照れながら、それでも彼は頷き返してくれた。

「両親が子どもの頃のガイドブックなんだよ。

今はもう、無くなつてしまつた道や風景も多いけど、新しいガイドブックには無い、隠れた宝物も見付けられるからね。

この『大塚の欅』みたいに……

穏やかな視線が、頭上を彷徨う。

「悩んでいる時に、こんな素敵な宝物と巡り会えることくらい、嬉しいことは無いよ。この気分が忘れられないから、またこのガイドブックを広げて歩き回るんだ……」

「ふうん……」

同じくらいの年頃で、そんな旅をしている人がいることに、真結は素直に驚いていた。

だが、そんな想いで一人そぞろ歩くことも、素敵なものかも知れ

ない。

きっと、彼にとつてその楽しみは、自分がこうして欅に励ましてもらつていることと同じくらい、大切な意味を持つてゐるのだろう。

「…やつぱり、変かな、俺」

沈黙を誤解して呴く彼に、大急ぎで真結は頭を振つていた。

「つづん、御免なさい。本当に素敵だな、って思ったから…」

「ありがとう」

再び笑顔が戻り、自分を優しく見つめてくれる。

その瞳に応えるように頬を赤らめながら、真結も微笑を深めて言った。

「じゃあ、この『大塚の欅』も宝物になるのね」

「…一番の宝物になると思つよ。

来年は高校受験で嫌になるくらい苦しむだらうし、きっと、何度もここまで来るだらうね」

「あつ…」

それなら、彼は自分と同じ中学一年生なのだ。

…たつた一つのことを知るだけで、心が弾んでくる…

もつと、もつと『彼』のことが知りたい…いや、知りずに…このまま…

「どうしたんだい？」

自分の想いに戸惑う真結へと、心配そうに声を掛けてくる。

「う、ううん。…何でもないの。私も、来年は受験生だから…」

「そ、うなんだ。じゃあ、君も一年生なんだね」

心から嬉しそうに笑つている。

『彼』も、自分のことを知つて喜んでくれているのだ…

高まり、響いてくる胸中の黄金色のうねりに負けそうで…真結は、一層、彼のハンカチを握り締めてしまった。

二人とも、暫く黙り込んでしまう。

その沈黙もまた、優しくて…真結はそつと瞳を閉じてしまった。今、気付けば、雨音が小さくなっている。

風も出てきたようだ。

黒髪に指を絡め通り過ぎる白銀の乙女達に背を押されながら、真結はそっと心のままに囁いていた。

「…ありがとう……」

瞳を開けて見上げると、彼は驚いた顔をしていたが…すぐに優しい微笑みを浮かべ、そつと…静かに返してくれた。

「俺の方こそ…ありがとうございます」

大きな手が差し出される。

真結は躊躇いもせず、その手の中に指を滑り込ませると、しつかりと握り締めていた。

「俺、今日はもう、帰らないといけないんだ。

でも、必ず、またこの『大塚の櫻』に戻つてくれるよ」

「うん…」

口にはしなくとも、真結にはよく分かっていた。

また、いつかここで遭える…

…必ず…

「それと…どんな悲しみが君を苦しめているのか、残念だけど、俺には分からない…

…でも、…こんなことしか言えないけど…元気を出して、微笑んでいて欲しいんだ。

大丈夫…どんな悲しい時にも、君にはこの樹が居てくれるんだからね」

「…ありがとうございます」

真つ赤になつて、少し俯きながら…真結は胸の中で続けていた。

(…あなたも、居てくれるんだもんね…)

「それじゃあ…

「…うん!」

互いに笑みを交わらせる。

切れ始めた雲間から射す斑な光を背に負いながら、二人はもう一度、しつかりと手を握り合つていた。

温かな指先が…ゆっくりと、離れていく。

…少し、寂しい気がする。

（ううん！ 大丈夫…）

そう。この『温もり』は、決して離れたりしないのだ……
不意に聞こえてきた蝉の声と、暑さを刻一刻と取り戻す陽光に抱かれながら、彼が遠ざかっていく。

思えば、名前すらも聞いていない。

だが、出逢いそのものに比べれば、名前など、真結には些細なものに思えるのだ。

駅へ向かって道を折れる直前、彼は一度だけ振り返り、大きく励ますように手を振つてくれた。

嬉しくなつて真結が応えるのを見届けて、彼の姿は視界から消えてしまつ…

ふと気付くと、しつかりとまだ、彼のハンカチを握り締めている。飾り気の無い、だが優しい想いに満ちたこの手の中の温もりも、再会を約束してくれている気がして…

…そつと、真結はそのハンカチを胸元に押し付けていた。

…ザザツ、ザザアア…

大きな波の音が、緑の天井から零れ落ちてくる。

無数の色合いに染まり、所々では閃光を放つていてる天蓋を見上げながら、真結は小さく囁いていた。

「…本当ね…『彼』、あなたみたい…」

その言葉に、ただ、櫻は葉擦れで応えるだけだった…

緩やかな静寂は、BGMによって更に深みを漂わせる。温もりと想いに満ちた静謐の《時》……

やがて、穏やかな女性の声が電波に乗り、闇の中へと滑り出していた。

それから、私は毎日『大塚の檸』の下で『夢』を見ていました。

彼の名前は、何と言うのでしょうか？あのハンカチには、イニシャルもありませんでした。……ええ、ハンカチはきちんとアイロンをあてて、仕舞い込んでいます。いつか、また逢えた日に返せるように……

普段から空想好きだった私は、果てることの無い夢を、密かに見続けていたのです。

『大塚の檸』のように、太く強い芯を持つていながらも、枝葉の先のように纖細な思いやりを示してくれる……そんな『彼』のことばかりを、私は毎日、心の中に想い描いていました……

私は『茜色の夕風』さんのように、奇跡を特別信じていたわけではありません。確かに彼との出逢いは『偶然』でしたが、次に再び逢えることは『必然』だと思っていたんです。そんな想いに、私は少しも疑問を抱きませんでした……

……今ではもう、どうしてそこまで信じていられたのかは分かりません。『大塚の檸』という、話を聞いてくれる存在が傍に居てくれたからでしょうか。それとも、いつも観ていた『夢』のためでしょうか……

でも、『茜色の夕風』さん。

これだけは、今の私にも言えるんです。

信じていた『夢』……それが『本当』だつたんだ、つて……

『彼』との再会は、私にとっては『当たり前』の出来事だったのだが、特別な感じはしませんでしたが、確かに、あれは『偶然』であり、奇跡であり、運命だつたのかも知れません……

淡淡とした、それでいて豊かな感情を秘める声は、再び過去を語り始める。

ガラス窓の向こう、金色の星が優しく瞬き、風に揺らめいている。眩い星辰は、流れる女性の声に合わせ、皿うちもそつと囁き出していた。

中学も二年生になつてから、今日、初めて息をすることが出来た
気がする。

真結は深く椅子に腰掛けなおすと、大きく伸びをしていた。
やつと、夏休みになつたのだ。

夏期講習も始まり、毎日決まつた分だけ勉強しようとは思つてゐるもの……学校に行かないだけでも、十分、気休めになるものだ。
「ほんと、みんな、人が変わつたみたいなんだもん」

少し、頬を膨らませる。

なにも、休み時間にまで、参考書を広げる必要は無いと思つのだ。折角、学校に通つても、何だか背中を押され続けているみたいで息が苦しくなる。

全てが自分の周りで勝手に流れ始め、その川の中で必死に手足をばたつかせているのだ。

美鈴がいない今、すっかり真結は学校嫌いになつてしまつていた。とは言つても、進学を取り止めるほどの勇気も無い。そもそも、

将来…いや、今でさえ、何をやりたいかななど分からぬのだ。逃げでもいい、『何か』を見付ける為だけに、真結は進学を選んでいた。そんな真結にとつて、進学先の学校の選択など、それほど重要なものではない。

やつてみたいクラブがあることと、周りに木が多いこと。

そして何より、大好きな『大塚の櫻』から離れずに済むのであれば、学校など何処でも同じだった。

そんな考えなので、一学期最後の面接でも、担任の青木先生から呆れたように言われたのだ。

「水口は、本当に欲が無いなあ」

その口調を真似て声に出した後、真結はつんつ！ と澄ましてしまった。

大学進学率の高い、自分とほぼ同じ偏差値の学校に行くことが『欲』なのだろうか。

どんな学校でも、入つてからの自分次第で、勉強も生活も変えられるのだ。

あの学校だから、こんな生徒になるだらつ…そんな考え方は、酷い偏見だと思う。

「嫌だなあ…どうして、受験なんてあるんだらつ？」

滅多に愚痴などこぼさない真結も、近頃は棘のある言葉ばかりを口にしてしまう。

それに気付いている自分も、それを抑えられない自分も、また嫌なのだ。

元来、真結はそれほど勉強が嫌いなわけではない。新しい知識を自分のものにしていくこと、そして、それを誰かに伝えられること…それは、とても素晴らしい力だと思う。だが、偏差値を目標とするだけの勉強は、どうしても好きになれなかつた。

もつとも、そんな自分の偏差値など、真結は見たことが無い。模擬試験には出席させられるが、いつも本気で問題を解いたことも無い。その為に、校内では上位の真結も、模擬試験の結果はかなりの

下位になっていた。

そんな真結を面白がつたり、不思議そつに見るクラスメイトもいる。

「いや、殆どクラスメイトが、そんな目で見てくるのだ……」

「ああ～つ！ もう、イヤッ！」

何だか、友達のことまで悪く言つてしまいそうだ。

全ての気持ちを振り払つかのよひ、勢によく真結は立ち上がり、いた。

そう、楽しいことを考えよう。

何と言つても、八月のお盆には美鈴が一度戻つてきてくれるのだ。去年の夏休みに悩んでいたほどには、彼女も苦しんではいるらしい。一週間に一度届く手紙や、電話の内容も、最近は明るく楽しいものになつてきている。

『本当』に寂しさから解放されたのか……、それは、絶対に思わない。一度受けた傷は、やはり『傷』のままで残るのだ。だが、それを少しでも忘れられる時間が持てるのなら……

近頃の美鈴の様子は、真結にとってとても嬉しいものだった。窓から覗く綺麗に晴れ渡つた青空も、そんな自分に悦びの笑みを向けてくれる。

熱いくらいの風と虫達の騒々しい声を全身で受け止めると、真結は一人大きく頷いていた。

少し早いが、『大塚の櫻』に逢いに行こう。

今日は、もう勉強など出来そうにない。こんな時に机に向かっていても、何も出来ないことは真結自身が一番よく知っている。

「それに、私が勉強するのよ。勉強が、私にそれを押し付けるんじゃないの」

茶目っ氣を出して机の上のノートに怒つてみせると、明るく笑い声を上げて真結は部屋を飛び出していた。

お気に入りの靴を履いて、玄関の戸を引く。

もわつ、とした真夏の空氣に抱き込まれながら、真結は光に溢れ

る道の上を駆け始めた。

庭に並ぶ木々のどれもが、それぞれの緑で光と影を描き出している。全てが強い日射でくつきりとその姿を浮き立たせ、白雲一つ遊ばない蒼穹の下、真結の周りに流れていった。

いつもの小道にぶつかる頃、左手に大きな欒の葉群が見えてくる。色褪せた屋根瓦と白塗りの土塀を丸く覆いながら、その枝葉は『全て』を優しく抱え、護つてくれていた。

……ふと、足を止める。

風の乙女たちが描いている緑と白の波模様の中に、刹那、『何か』が重なった気がしたのだ。

……いや、確かに、胸中から黄金の海が溢れ出していく。その、水面には……

(…あつ！)

間違いない。

一年前に出逢った『彼』が、笑いかけてくれているのだ……

「……逢えるかな……」

その眩きは、疑問ではない。期待でも願いでもなく……『真実』だつた。

小道を折れた途端、『大塚の櫻』の前に、リュックを背負った一人の少年の姿が飛び込んでくる。

……絶対に、見間違えたりしない。

少しも変わっていない、『彼』だ……

本当に、一年間も逢わなかつたのだろうか。つい昨日、別れただかりのような気がする……

真結は喜びに胸を震わせながら、歩調を緩め、そつと静かに微笑んでいた。

その時、まだ遠くの自分を見付け、『彼』が大きく手を振つてくれてくれる。

……こんなにも離れているのに、柔らかな笑顔が見えるよつだ……『彼』も、自分を探してくれていたのだろうか。

もう一度、逢いたいと想つてくれていたのだろうか…
手を振り返して応える真結に、『彼』は何度も頷いてくれている。

「やあ、また逢えたね」

近付くと、優しい瞳が迎えてくれた…

「うん。一応は、一年ぶりなのにね」

真結の言葉に、そつと瞳を細めてくれる。

「本当に、まるで昨日のことみたいだ。

あれから何回かここに来たけど、一度も会えなくて…君のことを、
櫻の精だ、って思ったことまであったんだよ。

だけど、こうして逢えたなら…そんな一年間もの時間なんて、何処
かに消えてしまつてるんだ」

「私も、そう。泣いてたのが、昨日のことみたい…」

そう言つと、ふと気が付いて、真結は恥ずかしそうに頬を染めて
しまつた。

「その…『じめんなさい。ハンカチ、まだ返してないね…』

「いいよ。また、いつか逢えた時で、ね」

「うん…」

嬉しくなつて、大きく頷いてしまう。

その勢いに、思わず顔を見合わせると、次には一人とも嘆き出しつ
ていた。

（そうよね…まだ…まだ、これからもきっと逢えるもんね…）

明るい声が、夏の眩しい大気の中へと溶け込むと、『彼』は少し
悪戯っぽく真結に片目を瞑つてみせた。

「何だか、君と逢つと愚痴も零せないな。

本当は、俺、今日はこの櫻に慰めてもらつつもりだつたんだ。

受験勉強や、受験そのものが作り出す流れに、ちょっとうんざり
してたからね」

「私も、そうなの。何だか、周りにいる人を皆、悪く言つてしまい
そうで…慌てて、参考書とノートから逃げ出してきたのよ」

真結の言葉に、『彼』は頷いて言つた。

「俺もだよ。何だか、どんどん性格が悪くなりそうなんだ」「そうなの？ でも、あなたの性格が悪くなってる頃には、きっと私なんて極悪人になってるわ」

大袈裟に溜息を吐く仕草に、再び笑い声が沸き起る。

頭上から零れてくる、無数の光の泡を身に纏いながら… 一人は心からの笑いを楽しんでいた。

…久し振りに、笑った気がする。

何でもない小さな言葉でも、同じ想いがあれば、それは黄金の光を帯びて輝き出す…

…本当に…この一瞬、同じ想いで『彼』と笑い合えるなんて…なんて素敵なんだろう…

真剣な顔に戻り、真結が口を開きかけた時…『彼』はそれを遮る」と先に『言葉』を紡いだ。

「ありがとう…また、逢つてくれて…」

黒く澄んだ瞳が、真っ直ぐに自分を見つめてくる。

その想いを正面から受け止めながら、真結も静かに囁いていた。
「私こそ…ありがとう…」

それ以上は何も言えず、二人は共に、そつと静かに手を差し伸べていた。

細い光が揺らめく中で、指先はしっかりと互いの手を握り締める。

…『彼』の指先から、温かな『言葉』が流れ込んでくるのを、真結は喜びと共に受け止めていた…

『真』の喜びは、一人の面に美しい微笑を映し出す。
いつまでも、いつまでも…

二人は立ち尽くしたまま、手を重ね合わせていた…

『出逢い』つて、本当に不思議なものです。

小さなラジオから流れてくる声には、彼女の《全て》の想いが込められていた。

たった一度だけのものであつても、それが《特別》なものなら、人はその出逢いをいつまでも想い続けるんです。

悲しくて辛い時、楽しくて嬉しい時…どんな瞬間にも、心に浮かび上がる『出逢い』があります。

人はいつも出会いと別れを繰り返しているのですが、擦れ違った瞬間や視線を交えた時に、その出会いが《特別》なのか、或いはそうでないのかは、はつきり分かるものだと思います。

私にとっては、『彼』との出逢いこそが、まさにその《特別》なものでした。

…ええ、私にとっては、その出逢いこそが『たった一つ』のものだつたんです。

僅かに、沈黙が滑り込む…

その夏の日に再会してから、結局、私は『彼』とは遭わずに受験を迎えてしました。

でも、どんなに苦しい時でも、あの夏の日…たった半日の会話を想い出す度に、心は温もりに満ち溢れてくるんです。

そう、たった半日の出逢い……でも、その『力』は『永遠』です。勿論、これは恋愛だけに結び付けられるものではありません。男女の間以外にだって、沢山の『出逢い』はあるんですから。

……私と『大塚の櫻』のように……私と『宝の小箱』のように……ね……

壁に掛かった時計の針が、沈黙の中を泳ぐように、そつと音を立てて流れしていく。その規則正しい音色が、BGMと入り交じった瞬間、風が声を高め……

……そして、話は始められていた。

「あ～あ……結局、眠れなかつた……」

カーテンが、しらしらと朝日に照らし出されている。

ベッドで横になりながら、うつすらと明るくなつていいく部屋の天井を、真結は円らな瞳でじつと見続けていた。

今日は、受験結果の発表日なのだ。第一志望の私立高校で、通学に一時間半もかかる所だが、受験当日の雰囲気が割りと気に入っている。

それだけに、今日の発表が心配になつていて。

試験そのものは思つてはいたほど難しくなくて……全力を出し切れたとも思うのだが……

今になると、あの問題はこいつ書けば良かつた……などと後悔する部分も多い。

今更悔やんだところでどうしようも出来ないのだが……それでも、やっぱり、悔やまずにはいられないのだ。

昨日の夜には、美鈴も心配して電話をかけてくれた。懐かしい美鈴の声に励まされている間は、安心出来たのに……朝に

なつてしまつと、その力も半減している。

…結局、何度も寝返りを繰り返すだけで、一睡も出来なかつたのだ。

すっかり冷えてしまつてゐる毛布の下から手だけを伸ばすと、電気ストーブのスイッチを入れる。

（誰か、代わりに行つてくれないかなあ…）

そんな弱気なことを考へてゐる自分に氣付いて、思わず真結は苦笑してしまつた。

「…ん？」

ふと、誰かの声が聞こえた氣がして…真結は瞳を閉じ、息を止めた。

…柔らかな…優しい声が、する…

…大丈夫だよ。全力を出し切つたんだから、自信を持つてもいいんだよ。

俺、何も出来ないけど…でも、こんな俺でもよかつたら、一緒に行つてあげるよ。

胸中で、『彼』が黄金色の海を背景にしながら、そつと微笑んでくれてゐる。

（…うん！…ありがとう）

『彼』が何も出来ないなんて！

寒い部屋の中も氣にせずベッドから抜け出ると、真結は机に向かい、黙つたまま引き出しを引いた。

董色の小さな宝箱を取り出し、ゆっくりと蓋を開ける。

鮮やかな緑に染まる絹に囲まれ、そこには『彼』から借りたままになつてゐるハンカチが、きちんと折り畳んで仕舞い込まれていた。一年半も前から、アイロンを当てられ、ハンカチは小箱の中に納められている。

この、たつた一枚のハンカチこそが、今の真結にとつて最も『大

切なもの』なのだ。

……まだ、名前すら知らない『彼』との出逢いの証……

「……今日、また逢えるのかな……」

何故か、そんな気がする……

細い指先で静かにハンカチを取り上げると、真結は胸元にそつと押し当て、瞳を閉じていた。

……体の中へと、『何か』が流れ込んでくる……

……その黄金に輝く温かな『言葉』は、確かに想いとなつて真結の心に安らぎと勇気を与えてくれた。

「……うん！ 大丈夫、…

でも……」

ゆっくりと瞳を開く。

真結は、尋ねるような視線をハンカチに送っていた。

……一瞬の沈黙の後、ハンカチを鞄の中へと丁寧に仕舞う。

そう……やつぱり、『彼』にも付いてきて欲しいのだ。

お気に入りの服に着替え、豊かな黒髪に櫛を入れる。

朝食を終えるまでに、普段の倍もの時間をかけた後、漸く真結は靴を履き玄関に手をかけていた。

「行つてきます！」

ハンカチが入つてゐる辺りをしつかりと押さえながら、明るい声と共に外へと飛び出す。

「寒いっ……！」

不意に、北風に包まれてしまつ。

その冷たい指先を避けるように、真結は駅へは遠回りになる細い道へと、小走りに駆け込んでいた。

そのまま、朝早い光に美しく輝いている『大塚の櫻』の許へと向かう。

見上げる枝先が、黄金色に燃えて霞んでいる。天に浮かぶ雲が金色に染まる中、『全て』を等しく覆う陽光を受けて、櫻はいつにもまして力強く……そして、優しく真結を迎えてくれていた。

「…行つてくるね。…あなたに笑われないよう、しっかりと、自分の目で見てくるからね。」

落ちよつとしない枯れ葉と共に、細かく岐れた枝先が柔らかく撓る。

そつと、…包み込むように…そつと…

刹那、真結は櫻の裏手に一人の女性を認めた気がした。腕に赤ん坊を抱き、優しくそつと話しかけている…自分によく似た、まだ若い女性の姿…

(……?)

だが、目を瞬かせた後には、森への入り口がいつも通りに暗がりを見せているだけだった。

少しだけ、躊躇つてしまふ。

…だが、やがてもう一度『大塚の櫻』を見上げると、真結は黙つて駅に向かつて走り始めていた。

合格者の掲示は夕方まで残されているとは言え、やはり、早めに結果を知りたかったのだ。

そして、一番に、『大塚の櫻』に報告じよう。

『彼』のハンカチを、鞄の中に確かに感じながら、真結は寒空の下を足早に通り過ぎていった。

まだ発表には時間があるというのに、高校へと向かうバスの中は、一日で受験生と分かる学生で一杯だった。

そこから溢れ出す波に押されてバスを降りると、そのまま高校の正門に向かつて緩やかな坂を上る。

左右に並ぶ進学塾の講師の群れや、部活動への強引な勧誘に戸惑いながらも、真結は自分でも驚くほど確かな足取りで掲示板の前まで進んでいた。

だが、ここまで来ると、流石にその落ち着きも、立ちゆく足下からアスファルトの中へと吸い込まれていくよつだ。

…少しずつ、怯えや緊張が舞い戻ってくる。

指先に力を込めて、鞄を…『彼』のハンカチを握り締める…
…そのまま、寒さも忘れ、真結はじっと「その瞬間」を待ち続けていた。

周りに集まる学生も、少し騒いでは黙り込み、また少し喋つては口を閉ざすなど、まるで落ち着きが無い。

結果が既に出ているとは言え、この僅かな瞬間に、皆が願いを籠めているのだ。その願いがたとえ重みの無いものであつたとしても、それを笑える者などいない。社会が造り上げた道筋に翻弄された結果であつても、それを彼や彼女たちは力一杯やり遂げたのだ。

とうとう、何人かの教師が大きな紙を手にして校舎から出でてくる。沸き起る不安に眉を顰めると、真結は鞄を、ハンカチを…『彼』を強く、胸に押し当てていた。

……俺は、『ここに居るよ。やつ…「ここ」で…

『彼』の声が聞こえてくる…

(…うん…)

そう、「ここ」に居てくれるのだ。…自分と一緒に…

やがて、掲示が張り出される。

同時に、受験生の集団が動き出していた。

あちこちで騒ぎが起こる中、真結も一つ一つ番号を確かめていく。何度も見て、もうすっかり覚えてしまっている、ポケットの中の受験番号を思い浮かべながら…

少しずつ、自分の番号があるはずの所に近付いていく。

…「んなにも、手が震えなければいいのに…

……大丈夫だよ。ほら…

その瞬間、確かに、真結は自分の番号を見付けていた。
取り出した受験票の番号を、一文字ずつ辿り…目を閉じて、もう

一度見上げても……やはり、そこには自分の番号が記されていなかった。合格したのだ。

物凄い喜びで、体が破裂しそうになる。

思わず唇を噛むと、涙を零しそうになつて……急いで口を瞬かせると、真結は人の波に逆行して、門のすぐ傍まで逃げ出してしまった。

沢山の人々が、忙しく目の前を行き過ぎる。少し離れた樹の下で一息吐くと、真結はその幹に寄り掛かり……瞳を閉じてしまった。

次第に気持ちが落ち着いてくる。と同時に、再び喜びが胸中で大きく膨れ上がつてくる。

その激しい思いを抑えるように、鞄を胸元に押し付けると、僅かに俯いて真結は知らず微笑みを零していた。

このことを、『彼』にも伝えたい。

名前も知らないけれど……『彼』に、今、すぐ……

「その様子だと、合格したみたいだね。おめでとう……」

思いがけない言葉が、不意に耳に飛び込んでくる。

……柔らかい声……

でも……まさか……

まるで、怯えるように体を震わせると、真結はゆっくりと口を上げていく……

……なんて、温かな笑顔だろう……

「まさか、こんな所で逢うなんて……思いもしなかつたよ……」

確かに……現実の『彼』の言葉を聞いた瞬間、真結は思わず泣き出してしまっていた。

絶対、夢なんかではない。

本当に、『彼』がすぐ傍に居てくれているのだ。

……なんて言えばいいのだろう。

あまりに突然のことで、真結はただ涙を流すことしか出来なかつ

た……

「あつ、『ごめん。びっくりさせてしまったね』

心配して謝つてくれるその声に、必死で気持ちを落ち着かせると、

真結は微笑みを浮かべようとした。

だが、瞳を見上げようとする、途端に涙も溢れそうになる。

…今の真結には、ただ小さく頭を振るだけで、精一杯だった。

「俺、今日、君と逢える気はしてたんだ…だから、『大塚の櫻』にも行こうと思って…でも、まさか、こんな所で、こんな形で逢えるなんて思つてなかつたから…

その…俺、何て言えばいいのか分からんんだ。

…掲示板の前で君を見付けた時、絶対に『夢』だと思ったんだよ…

でも、やつぱり、『本当』の君だつた…

混乱した口振りが、一生懸命な想いを伝えてくれる。

どうしても震えが止まらない指先で、鞄からハンカチを取り出す。そのハンカチで涙を拭いて…真結は、やつと笑みを浮かべることが出来ていた。

「…『ごめんなさい…』びっくりしたから…

嬉しかつたから…」

「俺の方こそ、ごめん。嬉しくて、何も考えないで声をかけてしまつたんだ」

本当に申し訳なく思つて『彼』のそんな様子に、少し笑みを深めてしまう。

漸く落着を取り戻した心で、真結はそつと尋ねていた。

「あなたは、合格したの…？」

「ああ、君のおかげでね。

あの夏以来、君にはずっと励ましてもらつたんだよ。ありがと…」

真剣な言葉に、真結は慌てて頭を振る。

「つづん…私こそ、何回も助けてもらつたもの」

やつと、真つ直ぐに『彼』の瞳を見つめることが出来る。

その時、手元のハンカチに気付いて真結は肩を落としてしまった。手にしているのは、大切な『彼』のハンカチだ。自分は、またそれを濡らしてしまった……

「『めんなさい。…折角、返せたかも知れないのに…』

「いいよ。四月からは、毎日、逢えるんだからね……」

そこで一瞬口ごもると、『彼』は少し照れた顔で続けてくれた：「……もし……もし、迷惑でなかつたら……その、ずっと持っていてくれてもいいんだ……えっと、だから……『一人のもの』として……」

その『言葉』に、真結は大きく瞳を見開いていた。

次には、その頬から胸元までが、美しく染め上げられる……どうして、こんなにぞきぞきするのだろう。絶対、外にまで聞こえている……

鳴り響く鼓動を、握り締めたハンカチで抑えようとしながら……それでも、真結は微笑みを頬に映し、濡れた瞳で『彼』を見上げていた。

……真っ直ぐに、見つめ、頷く。

「……うん。私、ずっとそつなりたいと思つてたの……」

「じゃあ……」

ただ、真結は微笑みを深めるだけだった：

「ありがとう！」

喜びに満ち溢れた声が、冬の空に響き渡る。

夏と変わらぬ黄金の光を送りながら……陽射しは、その腕に新しい銀の風を抱き上げていた……

『茜色の夕風』さん。これが、私の……『たつた一つ』の出逢いの話です。

私は今でも、『彼』のハンカチを持っています。いつも『彼』が使っているものとは別にして、宝の小箱に仕舞い込んであるんです……

『偶然』：奇跡や運命と言えるかどうかは分かりません。

それらは初めから一つも存在していなくて、『全て』が定められているのかも知れません。

でも、これだけは言えると思います。

初めから定められている川だとしても、地図を持たない小舟にとっては、川筋がどの目的地に定められ、伸びているのかなんて判らないんです。小舟にしてみれば、どの道を通りても、どんなことに遭遇しても、地図無しではそのどれもが『偶然』となってしまいます。だから：『茜色の夕風』さん。

『偶然』をもつと夢見ても構わないんです。そして、『偶然』を大切に、楽しんで下さい。

そうすれば、きっと『たつた一つ』の『必然』も、『偶然』の振りをしてあなたの許に飛び込んでくるはずです。

手がかりになれたかどうかは分かりませんが……私と『彼』との話は、これで終わりです。

『大塚の櫻』の下ではしゃぐ私達の娘にも、いつかこの話をするのかも知れません。

：いいえ、私達よりも先に、きっと、櫻の樹が教えてくれるんですね。

本当に、何週にも渡つて聞いてくれて、ありがとうございました。今夜は、これでお別れしたいと思います。

来週も、あなたに『素敵』なことが訪れますよつこ……

水口 真結でした……

エンディングが、緩やかにラジオから溢れ出す。

美しい音色が小さく消え入ると同時にタイマーは切れ、後には豊かな静寂だけが取り残されていた……

第三部『真の小舟』おわり

黄金の小舟は『無限』の舟
『全て』の『真』を身に示し
虚空にたゆとう『時間』の舟

眺めるぞ

眺めるぞ

誰が其の川

誰が夫の河

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420f/>

宝の小箱

2010年10月23日04時32分発行